元島名B・吹屋遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第4集—

1982

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

寄贈
発行者(所)殿

61. 8. 22

元島名B・吹屋遺跡正誤表

行	誤	正
写真目次　写真4	内部南半部	内郭南半部
〃	内部北半部	内郭北半部
写真4	内部南半部	内郭南半部
	内部北半部	内郭北半部
P 61 左5行目	P1	P3
P 63 図	標準土層図	標準層位図

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料 NO. 4932
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
平成10年5月13日
01—320
21
(8)

元島名B・吹屋遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第4集—

1982

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

ＳＢ02出土褐釉磁香合片

第23図２　1:0.8

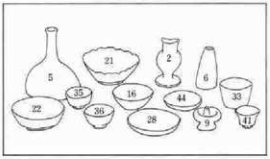
ＳＢ01･02柱穴群出土青白磁袋物片

第23図３　1:0.8

ＳＫ01出土伊万里系･美濃系陶･磁器

黎明寺ゴミ穴における陶･磁器の組合せ

第15～19図



元島名Ｂ遺跡出土陶･磁器類

序

昭和48年以来埋蔵文化財の発掘調査をすすめてまいりました関越自動車道新潟線も、昭和55年7月には、前橋インターチェンジまで開通し、現在では群馬県と首都圏とを結ぶ動脈として多くの人々に利用されております。

ここに報告します元島名B・吹屋遺跡も、この高速道路建設に関連して発掘調査を実施してきたものであります。両遺跡ともに、中世遺構の発見が多く、群馬県の中世史研究をすすめる上でも考古学上の貴重な資料を得ることができました。特に、吹屋遺跡からは、鎌倉時代後期から南北朝時代初期の頃のものと考えられる中世豪族の館址の一部が発見され、県内で調査された館址としては、最古のものとして注目されます。

酷寒・酷暑の日もいとわず、連日すすめられた調査の結果得られた各種の貴重な資料を収め、後世の人々にも残される記録として、本報告書が刊行できましたのも、日本道路公団東京第二建設局の関係者の方々をはじめとするたくさんの方々の御指導と御協力の賜物であります。ここに厚く感謝の意を表します。

願わくば、本報告書が多くの方々に広くご覧いただき、有効に活用されますことを念じ序といたします。

昭和57年3月

群馬県教育委員会

教育長 横山 巌

例　　言

1．本書は関越自動車道建設に伴い、昭和51年度に調査実施した元島名B遺跡と昭和52年度に調査実施した吹屋遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は日本道路公団の委託を受けて群馬県教育委員会文化財保護課が実施した。発掘調査担当職員は元島名遺跡について文化財保護主事平野進一・佐藤明人・大江正行が、吹屋遺跡について文化財保護主事松本浩一・平野進一・桜場一寿・大江正行である。

3．整理作業は昭和57年度に、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理担当は調査研究員大江正行であり、整理作業は、鈴木幹子、高橋順子、青木静江、須田幸子、後藤和美、金田美津子、平沢あや女、小池信子、渡部あい子、狩野えり子があたり、金属器・木器の処理は浜野和宗作、関邦一が行なった。

4．記録保存資料、出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

5．本書の作成にあたり、下記の諸氏、機関の協力・教示を受けた。記して謝意を表する。

城郭所見……山崎一　木器の材質鑑定……山内文（東京国立科学博物館）　鈴木三男（金沢大学）・能代修一（大阪市立大学）　米鑑定……佐藤敏也　陶・磁器……仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）　墓石・石製板碑……津金澤吉茂・木津博明・新倉明彦（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）・川原嘉久治

群馬県教育委員会文化財保護課・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・ふるさとを知る会諸氏

6．本書の執筆分担は、次のとおりである。

元島名B遺跡

1～6、7－(1～4)　……大江正行

7－(5)……新倉明彦

7－(6)、第4表……仲野泰裕

吹屋遺跡

1～6、8－(1)・(2)・(4)……大江正行

7……鈴木三男・能代修一

8－(3)……平野進一

7．巻頭カラー下段は、佐藤元彦（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）による。

凡　　例

1．元島名遺跡のグリッドは国家座標第IX系座標よりN31°30′W、吹屋遺跡のグリッドはN24°39′40″Wの方向角をとり方位記号は座標北を示す。

2．本書中の断面水準線数値、等高線数値は標高値を示す。

3．本書中の遺構実測図は1：60の縮小率を心がけたが、遺構規模が様々なため変則的とならざるを得なかった。

4．本書中の遺物実測図は1：3の縮小率である。

5．本書中の遺物写真は、おおむね1：3の縮小率である。

6．本書中のトーンは、斜線が地山を示すほか、それぞれの図版中にその意味を例記してある。

7．本書中の遺物出土位置・遺物観察表・遺物実測図番号は一致するが、一部に出土位置の図示のない場合もある。この場合は遺物観察表と遺物実測図のみが一致する。

8．本書中の転載地図・遺跡図は出典を各キャプション末尾に明記してある。

9．本書中の遺構種の略称は下記のとおりである。

SD……溝跡・溝状遺構　　SA……柵列跡　　SE……井戸跡

SK……土坑　　SX……検出時点において性格付けが困難な遺構

このほかは一般的な遺構名称を用いた。

10．元島名B遺跡の名称は、高崎市元島名町に所在するため元島名が用いられ、さらに南南東約600mに所在するAと区分する意味で元島名B遺跡の名称があたえられた。さらに元島名B遺跡の北西約300mから西方約200mの地域に所在する元島名城とその関連遺跡を高崎市教育委員会が圃場整備に伴い調査実施し、元島・名遺跡の名称を用いている。本書ではそれらと区分する意味で事業名称でもある元島名B遺跡をそのまま踏襲した。元島名を冠するのは、当調査で元島名城外郭堀切りとその内郭など大字名称を必要とする大遺構の一部を調査しているためでもある。なお元島名A遺跡、元島名遺跡については下記によられたい。

松本浩一「元島名A遺跡」『八幡原A・B、上滝、元島名A』（群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1981

五十嵐至・五十嵐信・白石修『元島名遺跡』（高崎市教育委員会）1979

11．吹屋遺跡は高崎市中尾町地内の小字名称である。調査当初、吹屋とは鍛冶工房に関連した地名であり歴史性を伴っており、小字吹屋之間（ノ）において浅間山給源による B軽石層下に水田面が検出され、主要遺構として強い印象を受けたので全体も吹屋遺跡とした。しかし、小字村東において、館址が検出されたため、それについては、村東の小字名称をとり村東館址と命名し、本文中で用いている。なお南接地域は、日高遺跡で、第35図のトーンの差でもってその区分を示した。日高遺跡については下記によられたい。

（群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）『日高遺跡』　1982

目　　次

元島名Ｂ遺跡

1. 調査の経緯と調査過程 …… 3
2. 遺跡の立地 …… 3
3. 調査方法 …… 3
4. 標準層位 …… 4
5. 周辺環境 …… 4
6. 検出した遺構と遺物 …… 15
   (1) 第１拡張区 …… 15
   (2) 第２拡張区 …… 33
   (3) トレンチ調査区 …… 37
7. 考　　察 …… 46
   (1) 元島名城外郭部の調査所見 …… 46
   (2) 土地利用の変遷 …… 48
   (3) SB01・02、SE01について …… 50
   (4) 出土遺物について …… 51
   (5) 元島名Ｂ遺跡出土の墓石と石製板碑について …… 52
   (6) 元島名Ｂ遺跡SK01遺構出土の陶磁資料について …… 55

吹屋遺跡

1. 調査の経緯と調査過程 …… 61
2. 遺跡の立地 …… 62
3. 調査方法 …… 62
4. 標準層位 …… 63
5. 周辺環境 …… 63
6. 検出した遺構と遺物 …… 73
   (1) 第１拡張区 …… 73
   (2) 第２拡張区 …… 75
   (3) 第３拡張区 …… 78
   (4) SD12についての拡張区 …… 107
   (5) SD20についての拡張区 …… 110
   (6) トレンチ調査区 …… 113
7. 科学的検討 …… 122
   (1) 吹屋遺跡出土木材の樹種 …… 122

8. 考　　察 …… 124
(1) 村東館址の調査所見とその検討…… 124
(2) 土地利用の変遷…… 133
(3) 弥生時代の自然地形 …… 134
(4) 出土遺物について…… 135

図　目　次

元島名B遺跡

第1図　標準層位模式図　4
第2図　元島名B遺跡周辺地形図と小字名称　1：5,000　5
第3図　桜屋敷、八幡社周辺古図　6
第4図　元島名域・元島名内出擬定図　1：5,000　7
第5図　桜屋敷発掘状況全体図　1：500　8
第6図　元島名B遺跡周辺遺跡　1：50,000　10
第7図　調査区設定図　1：2,500　12
第8図　遺跡北半部調査区設定図　1：800　13
第9図　遺跡南半部調査区設定図　1：800　14
第10図　SD06北東隅部実測図　1：80　17
第11図　内郭出土遺物　1：3　18
第12図　SD06出土遺物　1：6　20
第13図　SD06出土遺物　1：6　21
第14図　SD06出土遺物　1：6　22
第15図　SK01出土遺物　1：3　23
第16図　SK01出土遺物　1：3　24
第17図　SK01出土遺物　1：3　25
第18図　SK01出土遺物　1：3　26
第19図　SK01出土遺物　1：3　27
第20図　SE01実測図　1：60　33
第21図　第2拡張区実測図　1：160　34
第22図　SB01・02実測図　1：80　35
第23図　SB01・02出土遺物　1：3　36
第24図　SD出土遺物　1：3　38
第25図　SD断面土層実測図　1：80　40
第26図　SD断面土層実測図　1：80　41
第27図　精作土出土遺物　1：3　42
第28図　その他の出土遺物　1：3　44
第29図　縄文時代遺物　1：3　48
第30図　古墳時代遺物　1：3　48
第31図　奈良・平安時代遺物　1：3　49

吹屋遺跡

第32図　吹屋遺跡周辺遺跡　1：50,000　62
第33図　標準層位図　1：40　63
第34図　吹屋遺跡周辺地形図と小字名称　1：5,000　68
第35図　調査区設定図　1：2,500　69・70
第36図　吹屋遺跡南半部調査区設定図　1：1,500　71
第37図　吹屋遺跡北半部調査区設定図　1：1,500　72
第38図　第1拡張区出土遺物　1：3　73
第39図　第1拡張区実測図　1：160　74
第40図　SE01実測図　1：60　75
第41図　第2拡張区実測図　1：333　76
第42図　SE02実測図　1：60　77
第43図　SE02出土遺物　1：3　77
第44図　SE03実測図　1：60　77
第45図　SE03出土遺物　1：3　77
第46図　第3拡張区実測図　1：160　79
第47図　SX01実測図　1：60　82
第48図　SX01出土遺物　1：3　82
第49図　SX02実測図　1：60　84
第50図　SX02出土遺物　1：3　84
第51図　SX03実測図　1：60　84
第52図　SX03出土遺物　1：3　85
第53図　SX03出土遺物　1：3　86
第54図　SX04実測図　1：60　88
第55図　SX04出土遺物　1：3　89
第56図　SX05実測図　1：60　90
第57図　SX05出土遺物　1：3　90
第58図　SD07実測図　1：60　91
第59図　SD07出土遺物　1：3　92
第60図　SE07出土遺物　1：3　93
第61図　SE08実測図　1：60　96
第62図　SE08出土遺物　1：3　96
第63図　SE08出土遺物　1：4　97
第64図　SE08出土遺物　1：3　98
第65図　SE08出土遺物　1：3　99
第66図　SE08出土遺物　1：3　100
第67図　SE08出土遺物　1：3　101
第68図　第3拡張区出土遺物　1：3　105
第69図　古銭拓影図　1：1　106
第70図　SD12試掘時実測図　1：120　107
第71図　SD12第1拡張区実測図　1：120　108
第72図　SD12第1・2拡張区実測図　1：120　108
第73図　SD20拡張区　1：120　109
第74図　SE04実測図　1：60　110
第75図　SE05実測図　1：60　110
第76図　SE06実測図　1：60　111
第77図　SE06出土遺物　1：3　111
第78図　SE09実測図　1：60　112
第79図　SE09出土遺物　1：3　112
第80図　SD28出土遺物　1：3　114
第81図　弥生時代谷地形遺存範囲図　1：1,000　116
第82図　B群石下水田の範囲想定図　1：1,000　116
第83図　SD断面土層図　1：80　117
第84図　SD断面土層図　1：80　118
第85図　SD断面土層図　1：80　119
第86図　土層断面実測図　1：80　120
第87図　土層断面実測図　1：80　121
第88図　遺構年代対比図　125
第89図　村東館址の平面形態　1：4,500　126
第90図　矢島館址の平面形態　1：4,500　128
第91図　矢島館址　1：1,500　128
第92図　寺の内館址の平面形態　1：4,500　130
第93図　寺の内館址　1：1,500　130
第94図　14世紀前半の合成一括遺物　1：5　135
第95図　出土木器の合成一括遺物　1：5　136

表　目　次

元島名B遺跡

第1表　周辺主要城・館址一覧　9
第2表　周辺遺跡一覧　10・11
第3表　内郭出土遺物一覧　19
第4表　SK01出土遺物一覧　28～32
第5表　SB01・02出土遺物一覧　36
第6表　SD出土遺物一覧　39
第7表　精作土出土遺物一覧　43
第8表　その他の出土遺物一覧　45
第9表　(2)土地利用の変遷の項土器一覧　47

吹屋遺跡

第10表　周辺遺跡一覧　65
第11表　周辺遺跡の花粉分析　66
第12表　第1拡張区出土遺物一覧　73
第13表　SX01出土遺物一覧　83
第14表　SX02出土遺物一覧　83
第15表　SX03出土遺物一覧　87
第16表　SX04出土遺物一覧　88
第17表　SX05出土遺物一覧　90
第18表　SE07ほか出土木製遺物一覧　94・95
第19表　SE08出土遺物一覧　102～104
第20表　第3拡張区覆土層出土遺物一覧　105
第21表　第1・3拡張区出土古銭一覧　106
第22表　SD28出土遺物一覧　114

写 真 目 次

元島名Ｂ遺跡

写真１　元島名Ｂ遺跡全景垂直
写真２　元島名城跡・板屋敷、調査区との関係
写真３　元島名Ｂ遺跡、南半部を北から望む　北→
　　元島名Ｂ遺跡より元島名城本丸址を望む　北東→
写真４　内部南半部と SD06遠望　北→
　　内部北半部と SD05・06近景　北→
写真５　SD06北東隅部術跡遠景　北上→
　　SD06北東隅部術跡近景　北上→
写真６　SD06北東隅部近景
　　〃
写真７　SB01全景　北→
　　SB01全景　東→
写真８　SB02全景　東→
　　SB02全景　北→
写真９　SB02柱穴内出土磁器香合出土状態　北→
　　SD34鎌柄先出土状態　北西→
写真10　内郭出土遺物
写真11　SD06出土遺物
写真12　　〃
写真13　SK01出土遺物
写真14　　〃
写真15　　〃
写真16　　〃
写真17　　〃
写真18　　〃
写真19　第28図遺物・ SB01出土遺物
写真20　第24図、第29・30図、第27図遺物

吹屋遺跡

写真21　吹屋遺跡全景垂直
写真22　村東館址と日高遺跡の全景垂直
写真23　遺跡地北端部を北東より望む　北東→
　　遺跡地南半を望む　北→
写真24　遺跡地南半を望む　北→
　　遺跡地北半を望む　南→
写真25　第１拡張区全景　南西→
　　〃　　北東→
写真26　第１拡張区 SD01・06近景　南西→
　　SD12第１拡張区　西→
写真27　SD12第２拡張区　北→
　　SD12第２拡張区南西隅部近景　北→
写真28　第２拡張区全景　西→
　　第２拡張区全景　西→
写真29　第２拡張区 SD10断面　東→
　　〃　　西→
写真30　第２拡張区 SE01近景　北→
　　〃　　近接　〃
写真31　第２拡張区 SE02近景　北→
　　〃　　近接　〃
写真32　第２拡張区 SE03近景　北→
　　〃　　近接　〃
写真33　第２拡張区 SE02(左)・ SE03隣接状態近景　西→
　　SE04近景　北西→
写真34　第３拡張区全景　北西→
　　第３拡張区 SD14近景　西→
写真35　第３拡張区掘立柱穴群確認状況　南西→
　　第３拡張区掘立柱穴群・ SD14重複確認状況　西→
写真36　第３拡張区掘立柱穴群近景　北→
　　第３拡張区 SE・ SX群近景　北→
写真37　第３拡張区 SA05の柱穴内に見られる石材　西→
　　〃　　北→
写真38　第３拡張区 SE07近景　北→
　　第３拡張区 SE08近景　北→
写真39　第３拡張区 SX01近景　北→
　　第３拡張区 SX02近景　北→
写真40　第３拡張区 SX03近景　北北西→
　　第３拡張区 SX05（手前）・ SX04近景　北→
写真41　拡張区 SE06近景　南東→
　　〃　　南→
写真42　2A －145～155トレンチ　SE09近景　北→
　　〃　　〃
写真43　160ライントレンチ　東→
　　Ｘライン105～125トレンチ　北→
写真44　Ｕライン173～177トレンチ　北→
　　Ｏライン120～128トレンチ　北→
写真45　第１拡張区・ SX03出土遺物
写真46　SE02・03、第３拡張区特殊遺物
写真47　SX01・02出土遺物
写真48　SX03・04出土遺物
写真49　SX04・05、SE08出土遺物、第62図遺物
写真50　SE07出土遺物
写真51　　〃
写真52　SE08出土遺物
写真53　　〃
写真54　　〃
写真55　SE06・09、SD28出土遺物

元島名B遺跡

1　調査の経緯と調査過程

関越自動車道地域に存在する埋蔵文化財の発掘調査は群馬県教育委員会が実施し、対象遺跡については、日本道路公団東京建設局との間で年次委託契約を締結の上で実施されてきた。元島名B遺跡も昭和51年度契約の一遺跡であった。

関越自動車道中に存在する遺跡の認知は、2段階に分けて実施された。まず昭和44年4月1日に東松山市～渋川市間の基本計画の発表があり、それを受け、昭和44年度に文化財緊急調査国庫補助金を得て分布調査がなされた。この調査は路線決定前の予備的調査であり、計画範囲の幅4kmについて実施し、渋川市～藤岡市間では遺跡数386件の多きに達している。再度の分布調査は、昭和46年6月に日本道路公団が、渋川市以南について幅200mにわたる整備計画に伴う路線内の関連公共事業の調査を群馬県に依頼してきた。これを受け、群馬県教育委員会は、計画路線上の埋蔵文化財の分布調査を改めて実施し、藤岡市～渋川市間に存在する22遺跡を確認した。そのうち元島名B遺跡は藤岡市側から数えて№12遺跡であった。

元島名B遺跡の分布調査時点での所見は、畑中に土師器片の散布が見られ、集落跡の存在が予測されていた。

調査は昭和51年4月10日より6月30日までを予定し、26,000㎡を対象に実施された。その過程は4月下旬の間に試掘を行ない遺跡範囲および規模を確認した。続いてトレンチ拡張の必要と認められた2つの拡張区に重機を導入し、表土層を除去し作業の軽減化を計った。5月14日段階には6,000㎡の拡張区がもうけられ精査段階に入った。折りしも雨期をむかえ、排水、精査をくり返す悪条件の重なる日々が続いた。ようやく6月17日には遺構の測図が終了し、6月18日には機材の撤去と同時に実測終了後、進められていた埋戻しも終了したのであった。

2　遺　跡　の　立　地

元島名B遺跡は、群馬県高崎市元島名町に所在する。標高85m内外の地帯で勾配は緩慢としている。

この地域は県中央部にある榛名山から扇の骨状にのびる舌状の台地が、やがて関東平野に移ろうとする末端的位置にあり、台地といっても洪積世以降の侵蝕によって網状化した断続的高まりである。多少高い場所は、桑園、畑地、宅地等になっている。いく分低い場所は水田地帯となり、現地域の生産基盤となっている。このため、低所が水田、高所に宅地がまとまり、前代からの村落形態が、今もなお引きつがれている。

遺跡地もいく分高まりのある台地部分を中央に、水田地帯が両脇に存在する。台地上は畑地と桑園である。河川は当遺跡の南側700mに井野川が東流し、やがて利根川にいたっている。

3　調　査　方　法

調査区の設定は、遺跡内を走る関越道の中心杭を中心軸に置く2m格子の関越道一般グリッド型を用いている。東京側に若い番号を、東側に若い数字を配しているためグリッド呼称点は南東隅をきして呼び、50グリッド毎に南からABCの大区分がある。呼称法は50A07で例えるならば、50グリッド西へ行ったところのA区に位置し、北に7グリッド遡った位置にあると言った具合である。

杭設定は開放トラバースで関越道中心杭を用いたため国家座標に置き替えることも可能である。

水準は関越道中心杭にもたされている水準を引照して用いた標高値である。

測図はグリッド杭を使用して平板実測を主体に置いた。国家座標との方向角はN31°30′Wである。

写真は6×9㎝判のモノクローム、35㎜のモノクローム、カラーリバーサルフィルムを用いた。

4 標 準 層 位

元島名Ｂ遺跡の標準土層は遺跡全域を通じて全層がユニットとして抽出しうる場所は無いので以下は合成層位である。

Ⅰ層　耕作土。表土で、黒褐色を呈する。全体に軽石粒を多く含む。浅間山給源のＡ軽石層（天明３年　1783）を含むと考えられるが順堆積層は存在しない。

Ⅱ層　軽石粒を多く含み黒褐色を呈す。軽石は浅間山給源のＢ軽石（12世紀初頭頃）と黒褐色土が混った層。中世遺構の埋土。

Ⅲ層　浅間山給源によるＢ軽石層。順堆積層。

Ⅳ層　黒色粘性土層。Ｂ軽石の直下に多く見られる有機質の黒色土。

Ⅴ層　浅間山給源によるＣ軽石（古墳時代初頭）粒を多く含む暗黒色土。

Ⅵ層　暗黒色粘性土。旧表土層。

Ⅶ層　地山層で黄灰色。ローム層の二次堆積土。

第１図　標準層位模式図

5 周 辺 環 境

遺跡環境は考古学的環境を扱ったが、本遺跡の主体が中世遺跡であるので関連遺跡に主体を置いた。

1. 縄文時代

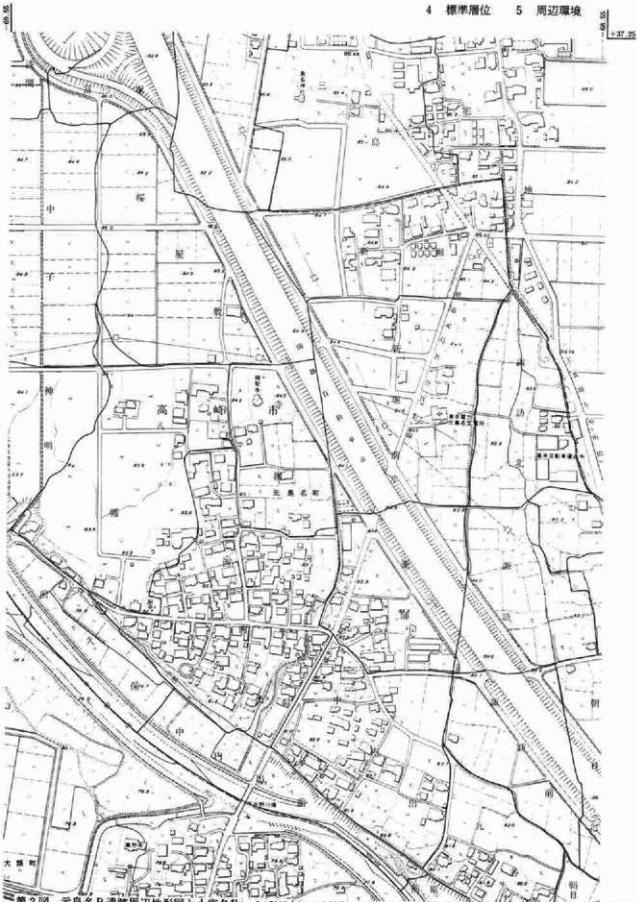
縄文時代周辺遺跡は、榛名山南麓裾が平地部に接しようとする標高120m以上の、高位の台地上に多く認められる。標高85mの当遺跡とは距離的に約６kmのひらきがあり、その間あるいは周辺での遺跡の在り方は閑散とした観を呈す。南東に1.5kmをへだてた上滝遺跡から加曽利ＥⅢ式、堀の内式に比定される土器が包含層からわずか出土している。[1] 近接地域では、北接地域の調査が1979年に高崎市教育委員会によって実施され、縄文時代後期の堀之内式に比定される土器と土坑が検出された。[2] 今回の発掘調査においても第29図の加曽利ＥⅢ式に比定される土器が出土しているので、周辺地域に縄文文化が及ばなかった訳ではない。

2. 弥生時代

弥生時代の集落、水田址の調査例はＰ58に述べたとおりである。当遺跡に近接した調査例は、北西約300ｍにある元島名桜屋敷地区を1979年に高崎市教育委員会が実施した例[2]があり、弥生時代後期初頭の住居跡、方形周溝墓が検出されている。本遺跡地は群馬県における初期の弥生文化が定着した、井野川流域地帯の一角にあり、台地上の一部は生活に、低地部分は井野川によって生じた後背湿地利用の生産基盤があったのであろう。

3. 古墳時代

古墳時代に至ると井野川、烏川流域では初頭から活況を呈する。元島名遺跡の北辺で方形周溝墓、集落が、北西約0.5kmにある鈴ノ宮遺跡で方形周溝墓・集落が調査されている。[3] これら井野川の中流左岸における象徴的な盟主層墳墓は南東約１kmにある墳丘



第２図　元島名Ｂ遺跡周辺地形図と小字名称　1:5000（1979高崎市　1:2500　No25および昭和18年作成地籍図による）

長約90mの前方後方墳の元島名将軍塚古墳が認められる。左岸下流域には下郷遺跡[4]の方形周溝墓群と共に墳丘長42mの前方後方墳SZ42が存在する。井野川右岸では円墳と推定されている□蛤元年銘の四神四獣鏡を出土した蟹沢古墳などが存在しているが、中・後期古墳との間に分布関係の異なる点が指摘されている。中・後期は継続的な墓域の維持がなされ、周辺地域にも古墳群形成が認められる。南南東約2kmに普賢寺裏古墳、不動山古墳、観音山古墳など地域盟主的な大規模前方後円墳を含む綿貫古墳群がある。これら古墳群の隣接地には集落跡と考えられる散布地があり、上滝遺跡など、その一部が発掘調査されているが未だ実例は少ない。集落の生産基盤は、井野川によって形成された後背湿地帯を開発した水田であった点は前代と同様であったろうが中・後期の古墳群形成の展開や盟主層的被葬者の展開を考慮すれば、その開発状況は、前代より一層の広がりと組織立った水田経営がなされたものと察せられる。

4. 奈良・平安時代

元島名の地は、総社本『上野国神名帳』にある「群馬郡之内東郡之分」からすれば東群馬郡に属し、『和名抄』に記載された郷名「島名之万奈」は、さらに遡った正倉院調布（『寧楽遺文』下）に

上野国群馬郡嶋名郷
戸主嶋名部馬手戸佰部黄（直カ）辛人　（白布国印三アリ）
調布壹端（長四丈二尺廣二尺四寸）　天平十八年十月

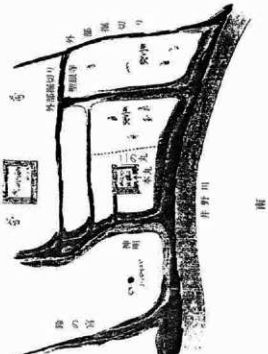
とあり奈良時代まで地名がたどれる。『大日本地名辞書』には「今大類村（南大類・上大類・中大類・下大類・宿大類・柴崎）・京が島村（島野・京目・元島名・矢島・西原・大澤・萩原）・新高尾村（日高・新保田中・中尾・鳥羽・新保）にあたる。即上郊郷の北、小野郷・八木郷の東にして、那波郡靭田郷の地と相交界して、其東北は利根川に至れり。」とある。中世末期に島名氏が出自の地に（元）島名城を築城していることからも古代・中世・近世に至るまで一貫した地名であり、古代における島名郷の中に元島名の地が含まれることは確かであろう。

奈良時代あるいは平安時代の集落跡は観音山古墳北側隣接地、元島名将軍塚古墳、宿大類、鈴の宮遺跡などに見られる。元島名将軍塚古墳の北接地域からは8世紀代の古瓦が散布し、郷倉など公的施設か大建築跡の存在が示唆される。

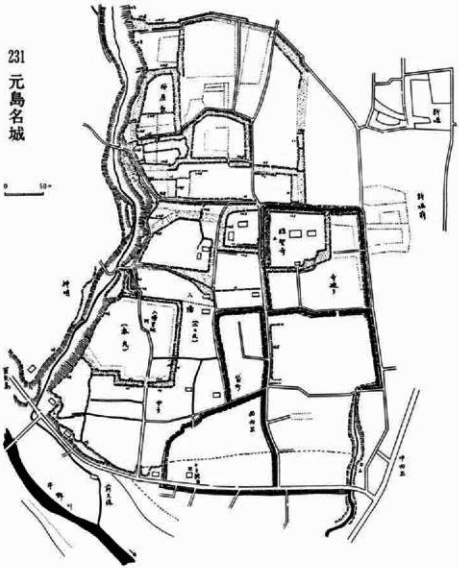
5. 中　世

中世後半の応永年間には元島名の地に島名城が島名伊豆守によって築城され、永禄の頃には長井豊前守政実の城址となったとされる元島名城址が存在する。城郭研究の山崎一氏[5]によれば、「元島名町の井野川北岸に元島名城址がある。南と西とは井野川とその支流に依托、北東南には壕をめぐらした方100mの本丸が遺っている。南面西寄りに一ヶ所の「折」があり、南、東、北にそれぞれ、虎口があり、土橋も認められる。二の丸は本丸の北東南三方をつつみ東西200m、南北250mの、ここを字中子と呼ぶ。

この城最外側の囲濠址は、北面、東面に認められ、北面は長さ280m、東面は400mに及び、この内には袋町、西内出の城下町のほか、本丸東北の鬼門除けと



第3図　桜屋敷、八幡社周辺古図（江戸時代前期か）
（高崎市教育委員会）『元島名遺跡』1979　補注は大江による



第4図　元島名城・元島名内出推定図　1:5000
山崎一『群馬県古城塁址の研究上巻』1971による

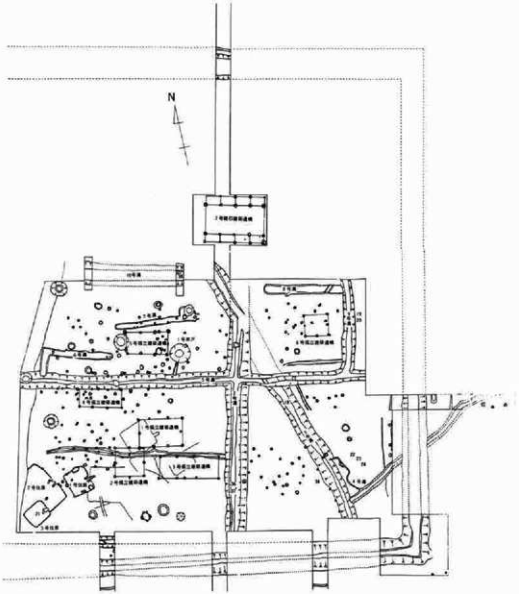
推定される型眼寺の別郭や、型眼寺西隣の環濠址等が含まれている。更に面白いのは北郭外の桜屋敷附近の遺構であって、囲郭式の構成をもつ一城郭が元島名城と不整合に埋もれているのがわかる。この城は元島名城より以前のものであることは勿論だが、中心郭南面虎口に喰違い構造のある点から元島名城址よりそれ程古いものではあるまいと考えられる。

元島名城は応永年間（1400年頃）島名伊豆守の築城と言われ、永禄の頃には、永井（長井）豊前守政実の城となった。甲陽軍鑑に永禄13年（元亀元年—1570年）、小幡三河、豊前が降参し、加勢を請うて、武蔵の内、忍、深谷領の入組んだ所の八千貫の地を攻略した。そこで三千貫を永井、五千貫を小幡に下され、所々所替えした。とあり豊前守は藤岡の南浄法寺からここに移り、その跡に芦田信守が入った。島名伊豆守の居たのは桜屋敷で、永井豊前の居たのは元島名城であろう。（第4図）

元島名Ｂ遺跡

天正の末、長井氏は神梅郷士の一派阿久沢氏に逐い落されたと伝えられ、その阿久沢氏の築いたのが中内出の砦である。」と解釈しておられる。（第４図）

この中で甲陽軍鑑の永禄13年の記事は武田勢に対してである。また中内出の砦は山崎氏のいう元島名の砦をさし、それについて「元島名町中内出の阿久沢氏の屋敷は三堀をめぐらし、南の一方は井野川の高さ10mにも及ぶ河崖に倚っている。東西150m、南北130mの広さをもち、北東西の各通路は虎口跡を通っているのであろう。戦国末、神梅、苗ヶ島からここに移ったのである。」としている。この元島名の砦は元島名城址の南東に接し、現在の小字名称、中内出の地である。また山崎氏の解説中に島名伊豆守[2]が桜屋敷に起居した指摘をされたが、発掘調査の結果（第５図）館址の主体遺物類は15世紀代の出土遺物であり、適合性は認められるが聖眼寺については元島名城の鬼門除けの寺院とするほど遡ぼるとは考え難く、『京ヶ島村誌』[6]によれば寛永年間に僧情意が開基創建したと伝えており、一方今回の発掘調査で聖眼寺の土塁の一部を発掘調査したが、土塁の構築は、元島名城外郭SD06が廃棄され、埋役以降の構築であった。西接の聖眼寺墓地も、古墓碑は見当たらず

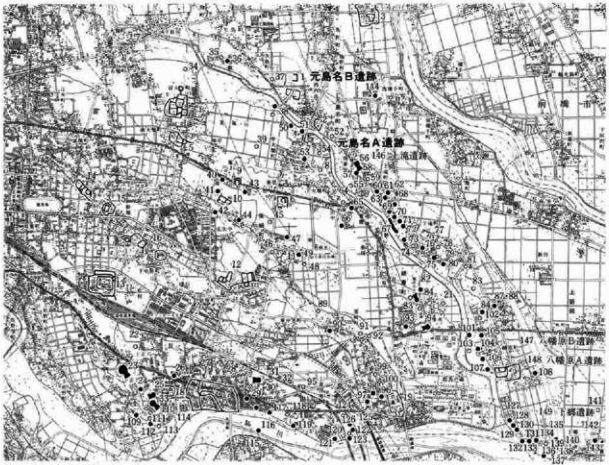


第５図　桜屋敷発掘状況全体図（圃場整備事業に伴う元島名遺跡群の調査Ａ区Ⅱ地点）
（高崎市教育委員会）『元島名遺跡』 1979による　　1：500

番号	遺跡名	所在地	種類	備考
1	元島名城跡	高崎市元島名町八幡・西内出 板屋敷	室町～ 安土桃山	当報告参照。
2	元島名内出跡	〃 元島名町中内出	安土桃山	南側を井野川の河崖に寄せた単郭堡、方100mの単郭、西面北面に壘を残す。
3	萩原城跡	〃 萩原町八幡北・八幡近 内出・石堂・町裏	安土桃山	方110m程の内郭、300mの外郭、北側に新屋敷の一部があったと推定される
4	大類館跡	〃 宿大類町	室町 安土桃山	東西南北370m、本丸は列郭式構造東丸を挟み4郭が並び最北部に熊野神社を祀る。
5	大類館跡	〃 南大類町館	鎌倉・室町	北面を一貫堀川によせた館址、東西200m、南北150mの囲郭型式で内郭は方80m。
6	大類寄居跡	〃 南大類町寄居	室町	方70m壘と土居をめぐらしていたが近年消滅す。外郭は東西150m、南北も同程度の囲郭構造と推定。寄居は高崎で本例のみ。
7	新井屋敷跡	〃 上大類町北宅地	安土桃山	飯五神社の東側に南北方向の顕著な堀跡が残り、長さ20mに及ぶ。
8	降照屋敷跡	〃 中大類町降照	室町 安土桃山	南面は崖端、北面を堀切った東西130m、最大幅50m北面土居は過半残り、高さ2.5m、中央に虎口あり。
9	隼人屋敷跡	〃 柴崎町隼人	室町	東西80m、南北100m、二重郭構えか。
10	高井屋敷跡	〃 柴崎町西浦	鎌倉・室町 安土桃山	東西は西北に偏し、東西86m、南北70m。西部・北部の二重堀外郭は進雄神社を含み東西150m、南北90m。
11	柴崎屋敷跡	〃 柴崎町屋敷	安土桃山	南100m、東西80m北面西面に壘跡。西面に壘跡あり、高さ3mの土居残存、北端は櫓台、東西200m、南北170mの外郭が推定される。
12	矢中七騎の遺跡	〃 矢中町村北・上村内	〃	栗原内記、大沢備後、松本九郎兵衛の屋敷跡。
13	下之城跡	〃 下之城町村内・村北	室町 安土桃山	四方連郭構造。囲郭式に改修。本丸を中心とした壘の一部確認。本丸東西90m南北100mで四囲に虎口あり。
14	反町屋敷跡	〃 上中居町西屋敷	安土桃山	西・北・東に壘。北面は二重壘、土居も認める。
15	中居の砦跡	〃 上中居新堀前屋敷	〃	西南の半円弧の壘が現存、これを外壘とした砦跡、西北部に土居・内壘跡を認める。内郭は東西30m南北80m。
16	下中居環濠宅跡群	〃 下中居町宅地近・天神裏 道祖神	〃	新井大学の屋敷跡・5角形の二重堀。内法120m「くぐりまど」と呼ばれる高尾佐渡守屋敷佐藤氏の屋敷は東外堀のみ。
17	倉賀野城跡	〃 倉賀野町上町・宮前町 南下町	鎌倉・室町 安土桃山	南を烏川河崖に寄せた平城。現遺構は、北の遠構堀と主郭東西の自然壘跡のみ。
18	倉賀野西城跡	〃 倉賀野町薬師前	安土桃山	西面を南北に続く、深地に面した平城、中郭の西南に古墳を利用した櫓台、東西は土橋あり。南に並んだ1郭に外郭と思われる跡を認める。
19	岩鼻陣屋跡	〃 岩鼻町旧陣板上北 板上南	江戸～明治	土居と壘と主郭の部分は東西170m南北250m東南に神山の台。
20	八幡原館跡	〃 八幡原町藤岡	鎌倉・室町	井野川両曲部の崖上に位置。東西280m、南北150mの二重構え、お八幡は二重構えらしい。
21	堀米屋敷跡	〃 鏡宮町堀米	安土桃山	井野川河崖の西北側に寄せた平坦地に位置する。

第1表 周辺主要城・館址一覧

本表は山崎 一『群馬県古城趾址の研究 上巻』1971を用いて高崎市教育委員会がまとめ、『元島名遺跡』1979で発表した一表をさらに加除筆してある。



第６図 元島名Ｂ遺跡周辺遺跡　１:50000（国土地理院『前橋』『高崎』1：25,000の一部を合成。遺跡位置は注１～４，８を合成して用いた）

番号	名　　称	種　　別	時　代
22		条里跡	奈良・平安
23	浅間山古墳	古墳	古　墳
24	正六古墳群	古墳群(方形アリ)	〃
25	小鶴巻古墳	古墳（円）	〃
26	七仏薬師古墳	〃　（〃）	〃
27	永泉寺の碑跡	碑跡	室　町
28	倉賀野中町遺跡	散布地	古　墳
29	(線)倉賀野町23・33号墳	古墳	〃
30	長賀寺山古墳	〃　（円）	〃
31	諏訪神社遺跡	散布地	〃
32	諏訪神社遺跡	〃	奈良・平安
33	大鶴巻古墳	古墳	古　墳
34		散布地	縄　文
35		〃	―
36	薬師塚古墳	古墳（円）	
37	鈴ノ宮遺跡	散布地	古　墳
38		〃	弥　生
39		〃	古　墳
40	諏訪山古墳	古墳（円）	〃
41		古墳群（円）	〃
42	かぐら塚古墳	古墳（円）	〃
43	富士塚古墳	〃	〃

番号	名　　称	種　　別	時　代
44		〃	弥　生
45		散布地	古　墳
46		〃	〃
47	浅間山古墳	古墳（円）	〃
48		散布地	〃
49	イナリ塚古墳	古墳（円）	〃
50		古墳	〃
51	浅間山古墳	〃	〃
52	元島名Ａ遺跡	散布地	〃
53		古墳	〃
54		散布地	〃
55	鍛冶分遺跡	〃	〃
56	将軍塚古墳	古墳（前方後方）	〃
57		散布地	〃
58		古墳（円）	―
59		散布地	―
60	慈眼寺Ａ号墳	古墳（円）	古　墳
61	慈眼寺大師堂古墳	〃	〃
62	慈眼寺Ｃ号墳	〃　（円）	〃
63	諏伊勢山古墳	〃　（方円）	〃
64		散布地	〃
65		古墳	〃

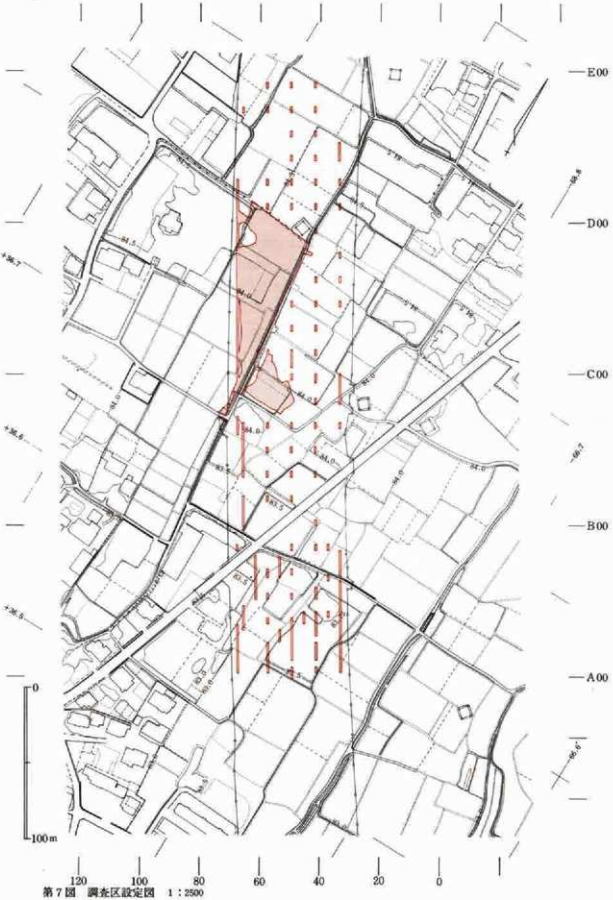
番号	名称	種別	時代
66	稲荷塚古墳	〃	〃
67	下滝遺跡群	集落跡	〃
68	三反畑85号墳	古墳（円）	〃
69	〃 82号墳	〃（〃）	〃
70	〃 80号墳	〃（〃）	〃
71	下滝町甲78・81号墳	〃（〃）	〃
72	三反畑乙78号墳	〃（〃）	〃
73		〃（〃）	〃
74		散布地	〃
75		古墳（円）	〃
76	八幡塚古墳	〃（〃）	〃
77		散布地	〃
78	中道遺跡	縄文	
79	中道原館跡	館跡	室町
80	中道327の2（番地）古墳	古墳（円）	古墳
81		散布地	—
82	（線）岩鼻18号墳	古墳（円）	古墳
83	鎌賀町堀米遺跡	散布地	〃
84	下斉田遺跡	集落跡	〃
85		散布地	—
86		古墳群	—
87	諏訪平341（番地）古墳	古墳（円）	古墳
88	天神山古墳	〃	〃
89	栗崎町宮原・栗崎塚遺跡	散布地	〃
90	飯玉山古墳	古墳（方円）	〃
91	栗崎原遺跡	散布地	〃
92		〃	
93	堀米古墳群	古墳群（円）	古墳
94	不動山古墳	古墳（方円）	〃
95	倉賀野条里跡	条里跡	奈良
96	桃山古墳	古墳	古墳
97		〃（円）	
98	首切山古墳	〃	〃
99	岩鼻町延喜寺遺跡（合新田町谷周遺跡）	散布地	奈良・平安
100	岩鼻町延喜寺遺跡	〃	縄文
101		墳墓	—
102		散布地	—
103		〃	—
104	針塚古墳	古墳（円）	古墳？
105		〃（〃）	—
106	ユニビラ山古墳	〃（〃）	古墳
107	天王山古墳	〃（〃）	〃

番号	名称	種別	時代
108	稲荷山古墳	〃（〃）	〃
109	下位野古墳群	古墳群	〃
110		散布地	—
111	下位野戸崎遺跡	〃	古墳
112	大山古墳	古墳（円）	〃
113	倉賀野万福寺遺跡	散布地	〃
114	倉賀野万福寺遺跡	〃	縄文
115	本郷北城跡	城跡	安土・桃山
116	（線）倉賀野町56号墳外12基	古墳群（円）	古墳
117	（線）倉賀野町40号墳	古墳（円）	〃
118	倉賀野町下町横東遺跡	散布地	〃
119		古墳群（円）	
120	倉賀野大道遺跡	散布地	〃
121	（線）倉賀野町75～182号墳	古墳群（円）	〃
122	倉賀野大応寺遺跡	散布地	
123	（線）倉賀野町132号墳外27基	古墳群（円）	〃
124	倉賀野大道南遺跡	散布地	〃
125	（線）倉賀野町189号墳外5基	古墳群（円）	
126	大応寺遺跡	古墳・散布地	〃
127	前原1052（番地）古墳	古墳（円）	〃
128	若宮2133（番地）古墳	〃（〃）	〃
129	若宮2149（番地）古墳	〃（〃）	〃
130	鈴塚古墳	〃（〃）	〃
131	若宮2040（番地）古墳	〃（〃）	〃
132	若宮古墳	〃（〃）	〃
133	八幡原2019（番地）	〃（〃）	〃
134	若宮遺跡	集落跡	縄文
135	若宮古墳	古墳（円）	古墳
136	若宮古墳	〃（〃）	〃
137	若宮古墳	〃（〃）	〃
138	八幡原遺跡	集落跡	弥生
139	八幡原古墳群	古墳群	古墳
140	八幡原遺跡	散布地	〃
141			〃
142	宇賀古墳群	古墳群（円）	〃
143	上ノ手薬師前古墳	古墳（円）	〃
144	（線）高崎市第93号墳	古墳	古墳
145	田口屋敷跡	屋敷跡	中世
146	上滝遺跡	集落	古墳～近世
147	八幡原B遺跡	窯跡	中世
148	八幡原A遺跡	講址	近世
149	下郷遺跡	古墳群	古墳

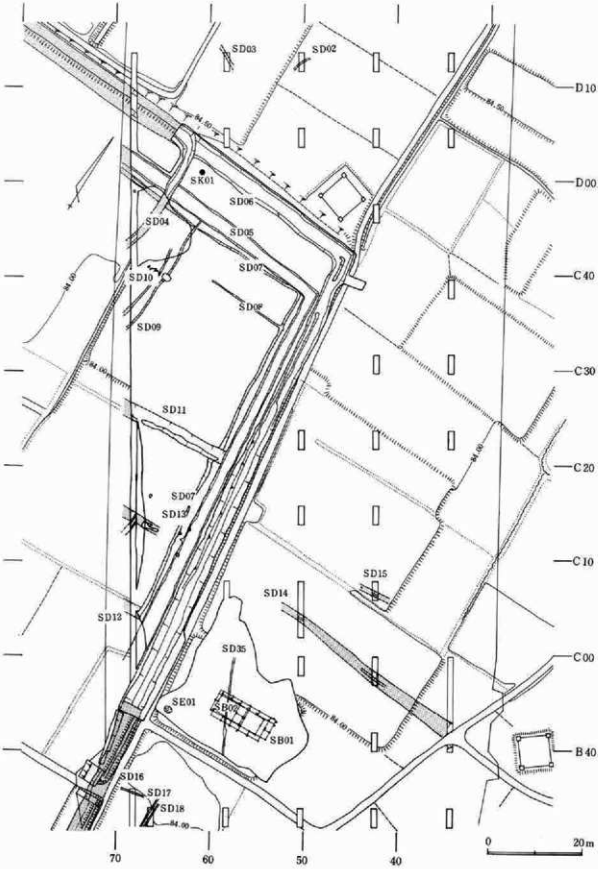
第2表　周辺遺跡一覧　注1～4、8を基として作成（線）は「上毛古墳総覧」

江戸時代以降であった。しかし、桜屋敷の発掘調査[2]では大量な石製板碑の出土があり、周辺に古墓があった可能性は高い。城内の西内出には千手観音を祀る観音堂があり、境内に鎌倉時代末期から南北朝期にかけての石製板碑が2基存在している。『京ヶ島村誌』[6]によれば観音堂は大同3（808）年に創建されたと伝えられている。第3図の古地図には本丸跡に位置する八幡社や桜屋敷は載っていても聖眼寺の記入がなく、寛永年間の開基に信憑性が持たれる。

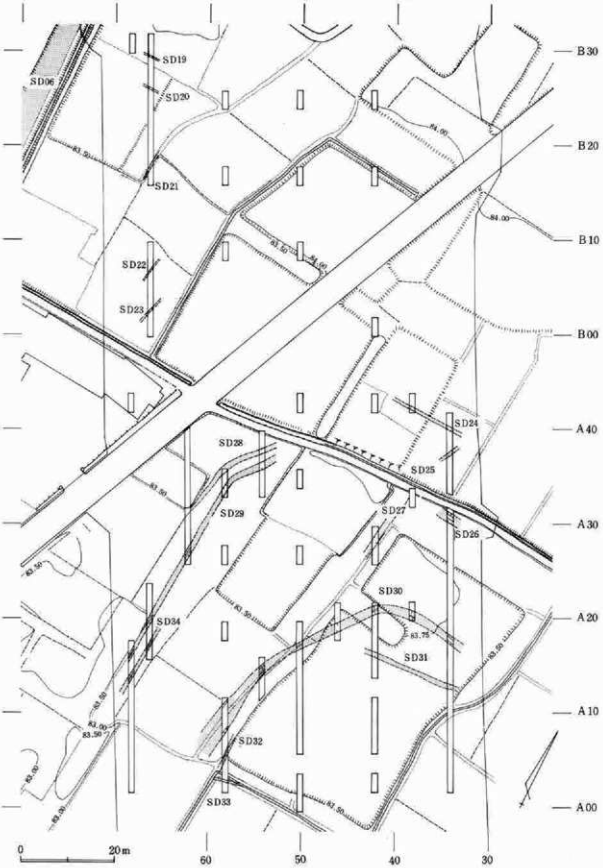
(1) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『八幡原A・上滝・元島名A』1981
(2) （高崎市教育委員会）『元島名遺跡』1979
(3) （高崎市教育委員会）『鈴の宮遺跡』1978
(4) （群馬県教育委員会）『下郷』1980
(5) 山崎一『群馬県古城塁址の研究　上巻』1971
(6) （京ヶ島村誌編纂委員会）『京ヶ島村誌』
(7) 巾隆之「古墳時代初頭の遺構・遺物からみた下郷遺跡」『下郷』（群馬県教育委員会）1980
(8) （群馬県教育委員会）『群馬県遺跡台帳』1973



第7図　調査区設定図　1：2500



第８図　遺跡北半部調査区設定図　1：800　※トーンは溝の延長推定をあらわす



第9図　遺跡南半部調査区設定図　1：800　※トーンは溝の延長推定をあらわす

6　検出した遺構と遺物

拡張区の設定

拡張区の設定は試掘調査の所見をふまえ、拡張しなければ規模、性格の把握ができない遺構を対象とする前提から、まず元島名城の外部内郭の全体的な拡張と、60C00トレンチ内で検出された掘立柱穴群の拡張を計った。

(1)　第 1 拡 張 区（第8図）

第1拡張区は以前より知られていた元島名城跡の二の丸北東隅が関越道内におよんでいた周知の遺構である。拡張の範囲は68B48、44B42、68D09に挟まれた三角形の地区で、この範囲はかねてより図示された元島名城跡二の丸域に相当している。範囲設定は二の丸域が現地形からも明瞭に判断できたことと、試掘所見と地形判断とが一致しているため、元島名城図から再測する調査区設定はしなかった。

排土は重機を中心に、溝の底部、小溝などを人力排土し実施した。

検出された遺構は下記のとおりである。

SD04（第 8 ・25図）

SD04は68C44から62D05をへて68D10に至る。調査前は調査区に西接する聖眼寺縁と北縁地域を面する溝であった。北縁溝は調査前段階まで水路で下方にあるSD06と一致の重複であった。SD04はその重複部分から、隅丸コーナをへて東へ、約90°向きをかえ聖眼寺の東を南に走行する。埋土は第25図のとおり泥土を主としていた。規模は最大幅1.4m、深さ1.04m、北側軸走行N86°W、東側軸走行N 0°30′ Eである。底面勾配は北から南下りとなる。出土遺物は埋土下方からガラス片が出土し、近代以降の遺物が多い。

SD05（第 8 ・25図、写真 4 ）

SD05は68C00から48C38をへて68D02に至る。形態は断面形一形で底面は平らである。立ち上りは約50°の傾で外斜する。規模は最大幅2.0m、深さ0.75m、北側軸方向N85°W、東側軸方向 6 °30′W、であった。底面に密着した出土遺物はまったく無く、49C38のSD05隅部で、人頭大の川原石が数個出土している。そのほかの出土遺物は第11図のとおりである。

SD06（第 8 ・10・25図、写真 5 ・ 6 ）

SD06は元島名城北二の丸を画する壕と目された地形変換部から検出された大溝である。位置は67B43から46C42をへて68D10に至る。形態は第10図のとおり北側および53C27の間まで、底面が平らで、外斜に立ち上る断面形を呈すが、それ以南は、序々に丸底気味にU字形となる。この間、46C40には小溝の掘り込みがあり、49C37以南にも小溝の掘り込みが底部を貫いていた。立ち上りも部分的に変化があり、北側は外斜するが53C27以南では内湾気味に立ち上り、深さを増す。

SD06隅部は第10図のとおりである。内側は丸みをおび、外側は直に鋭利に掘り込まれている。46・47C40～42間には溝底部に小溝が掘られ、北側の先端が急に西に曲っている。さらに48C37以南には前者と同じ規模の小溝が南へ延びており、49C37から49C39の間に小溝のない部分が存在する。

SD06の軸方向は北線でN86°W、東線でN 6 °30′Wであった。

出土遺物は、第11図のとおりで、底面から得られた遺物は極めて少ない。このほか墓石類がある。

第12図 1 は空風輪で、多孔質の角閃石安山岩を用いている。風輪部と空・風境いのくびれ部に墨付がなされ、風輪部のその中に「カ」と読める種子刻がある。

元島名B遺跡

第12図2は水輪で多孔質安山岩製である。

第12図3は火輪で降棟、上面四端部に墨付けがなされ、一側面に日輪と考られる墨書があり、その中に「ラ」と読める種子刻がある。材質は多孔質安山岩である。

第12図4は火輪で多孔質安山岩を用いている。側部四面に「ラ」と考えられる種子刻があるが退化し、異体字となる。

第14図13は石臼で上臼部である。上方皿部、軸穴の一部を残す。目分割は乱れている。材質は多孔質安山岩製である。

板碑は新倉氏による7－(5)を参照されたい。

SD07（第8図）

SD07はSD05よりも内城側にあり、並走している。SD05の最大幅2.1mと比較すれば、はるかに細い溝である。溝の形態は断面、浅いU字形となる。埋土は砂質である。重複は、SD04、SD11より古い。規模は西側で最大幅0.8m、東側で0.4mであり、深さは西側で0.3m、東側で0.2mである。軸方向は、北側でN86°W、東側でN4°30′Wである。

出土遺物は皆無であった。

SD08（第8図）

SD08は53C35においてSD07に交わり、60C39まで続く。形態は平面で直線的に延び、断面形は浅いU字溝である。埋土は砂質である。規模は最大幅0.3m、深さ0.2m、軸方向N86°30′Wである。

SD09（第8図）

SD09は61C46から68C35に位置する。平面形は少し蛇行気味であり、断面形は浅いU字状を呈す。埋土は黒色の粘性土で、中世以降の埋土と大きく異り、古代の埋土である。重複はSD05より古い。規模は幅0.3m、深さ0.1m、軸方向N3°30′Eである。

SD10（第8図）

SD10は68C37から64C42に位置する。平面形は少し蛇行気味であり、断面形は浅いU字状を呈す。埋土はSD09と同様の、黒色粘性土で中世以降の埋土と大きく異なり、古代の埋土である。規模は幅0.3m、深さ0.2m、軸方向N8°30′Eである。

SD11（第8・25図）

SD11は68C26から59C20に位置する。平面形は比較的直線的である。断面形は幅の広いU字状を呈し、南側底面にそって、2段堀の小溝がある。（第25図5）。埋土は中世的砂質土である。規模は幅1.2m、深さ0.64m、軸方向N83°30′Eである。

SD12（第8図）

SD12は68C05に位置する。断面形は幅の広いU字状を呈す。埋土は中世的砂質土である。規模は幅3.65m、深さ0.55m、軸方向N83°30′Eである。

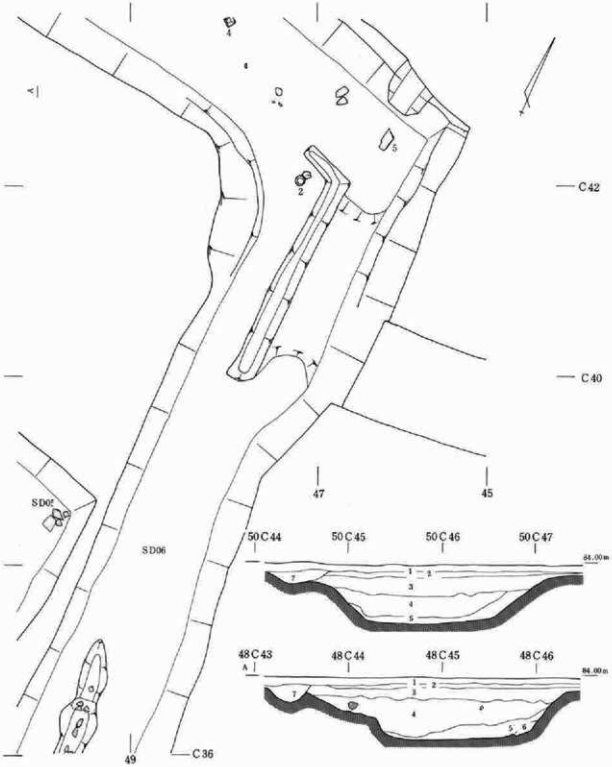
SD13（第8図）

SD13は68C04から63C16に位置する。断面形は幅の広いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.5m、深さ0.35m、軸方向N3°Wである。

SK01（第8図、写真13～18）

SK01は61D01に位置している。SK01の検出は重機による表土除去作業を実施中、おびただしい陶・磁器片が現われたため、存在に気付いたのである。直ちに重機作業を中止した。しかし、直径約80cm、深さ60cm余りの規模のSK01の上面には松の根が喰い込んでいたため重機により、それを除去した。その結果、SK01自体の掘り方形状、規模などは攪乱が生じてしまい不明瞭となった。

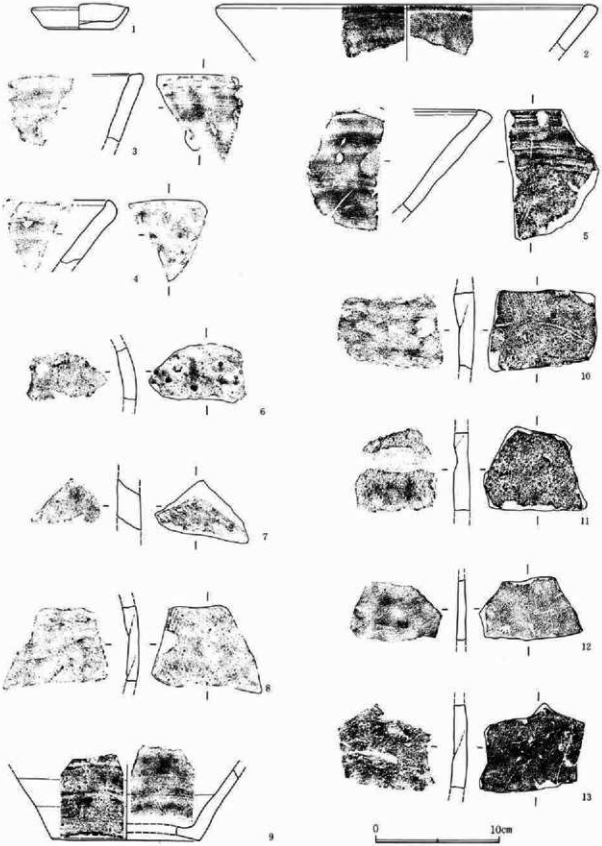
おびただしい陶・磁器は、仏花器、燈火器、徳利、銚子、擂鉢、片口、飯茶碗、皿、猪口、そば猪口、湯呑茶碗などがあった。この中の仏花器は4個体（第15図1～4）存在し、このSK01が、聖眼寺に伴うゴミ穴であることを示唆していた。



※SD06内No.は石製板碑・墓石No.に一致

① 水田耕作土。
② 水田耕作による鉄分酸化層。
③ B軽石を多く含む砂質黒褐色土。
④ 砂質土と、粘性土がラミナ状を呈す黒褐色土。
⑤ 粘性の黒褐色土。
⑥ 地山を主とする黒褐色土。
⑦ 砂質の黒褐色土。

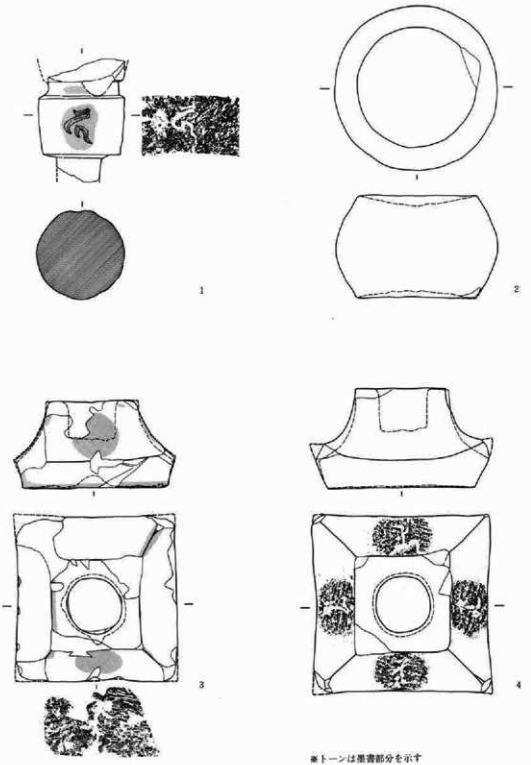
第10図　SD06北東隅部実測図　1:80



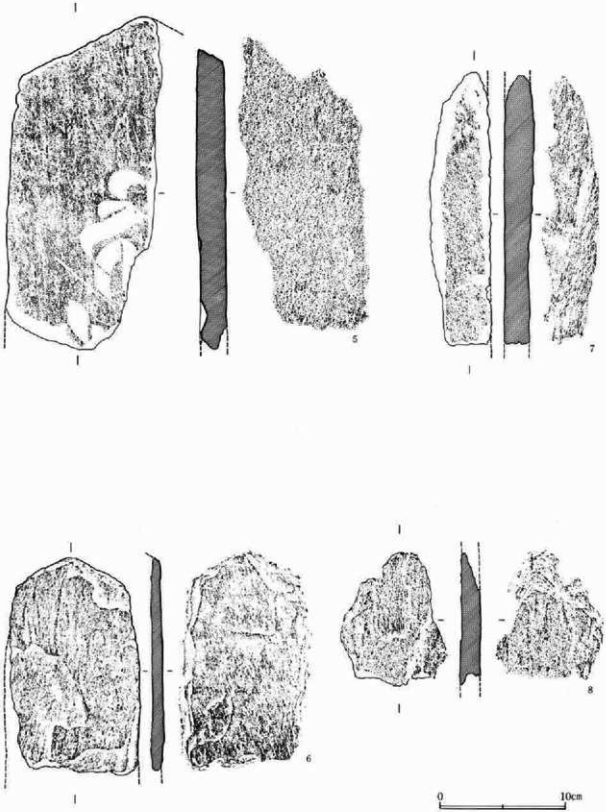
第11図　内郭出土遺物　　1：3

図・写真No	土器種（器種）	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘　要
1	中世土師質土器（皿）	50C44。SD06埋没土層。	口径7.9cm 底径6.2cm 高さ1.8cm 完存。	夾雑鉱物粒を多く含む。片岩粒・雲母粒を含む。普通。淡橙色。	内面底は糸切による凹凸がある。側部轆轤目は発達していない。口縁端部はやや肥厚する。底面に轆轤左廻りによる糸切り痕がある。側面の内・外には横撫でが見られる。	在地製品。
2	軟質陶器（鉢）	70C48。SD05埋土。	口径30.9cm（推定）	砂を多く夾雑する。普通。灰色。やや燻およぶ。	割れ口の粘土走行から紐作りと見られる。口縁端部内面に、わずかながら返りの凹みがある。口縁部下の内・外面に横撫でがあり。口縁部が若干摩耗する。	在地製品。
3	軟質陶器（鉢）	53C21。SD 06埋没土上層。	口縁部小片	夾雑鉱物を多く含む。軟質。にぶい橙色で酸化気味。	割れ口の粘土走行から紐作りと見られる。口縁端部に平らな面あり。口縁部下の外面に横撫でがあり。口縁部が若干、摩耗する。	在地製品。
4	軟質陶器（鉢）	45C40～45。SD 06埋土上層。	口縁部小片	夾雑鉱物は少ない。軟質。にぶい橙色で酸化気味。	割れ口の粘土走行から紐作りと見られる。口縁端部はやや内傾する。内・外面に凍ハぞあり。口縁部下の内面に横撫でがあり。	在地製品。
5	軟質陶器（鉢）	45C40～45。SD06埋土。	口縁部小片	夾雑鉱物を多く含む。軟質。灰色で器表に黒灰色の煤およぶ。	割れ口の粘土走行から紐作りと見られる。口縁端部はわずかな返りの凹みがある。内面には挽痕しによる凹凸あり。内面には横撫で痕あり。外面には摩耗あり。体部大半を除く上半に横撫であり。摩耗がいちじるしい。	在地製品。
6	焼締陶器（壺か）	45C40～45。SD 06埋没土。	体部小片	白色鉱物粒を多く夾雑する。焼締りあり。自然釉およぶ。灰色。	内面には紐作りによる接合痕と指などの圧痕が見られる。外面には箆削り痕あり。	製作地不詳。
7	焼締陶器（大甕か）	66C49。SD05埋土。	体部小片	白色鉱物粒を多く夾雑する。自然釉およぶ。灰色。	割れ口には紐作りによる粘土走行あり。わずかであるが指などによる凹凸あり。外面にわずかながら叩目あり。整形痕は紐片のため不明瞭。	素地は砂粒状で混夾焼か。
8	焼締陶器（大甕か）	46C42 SD 06埋土。	体部小片	長石・石英粒を多く夾雑する。自然釉およぶ。灰白色。	割れ口に紐作りによる粘土走行と内面に紐作りの接合痕あり。内面は指頭圧痕がある。外面に格子目状の叩き痕あり。内面は指による撫で痕あり。外面は自然釉がかかり不明瞭。	製作地不詳。
9	焼締陶器（壺か）	45C40～45。SD06埋土。	底径11.8cm。（推定）	白色鉱物粒を多く夾雑する。自然釉および焼締りあり。灰黄褐色。	割れ口には紐作り痕あり。内面は轆轤による挽痕しあり。外面は紐作り痕か、轆轤再整形時における凹凸あり。底面は焼台の痕跡が見られる以外は平滑となる。内面は轆轤による横撫で痕あり。外面は箆削り痕あり。	常滑焼。
10	焼締陶器（大甕か）	59～60C44。SD 05埋土。	体部小片	白色鉱物粒を多く夾雑する。焼締りあり。灰黄褐色。	割れ口には紐作りによる粘土走行あり。内面には紐作りによる接合痕あり。指などによる圧痕あり。内面は指による撫で痕あり。	常滑焼。
11	焼締陶器（大甕か）	59～60C44。SD 05埋土。	体部小片	白色鉱物粒を多く夾雑する。焼締りあり。灰黄褐色。	割れ口には紐作りによる粘土走行あり。内面には紐作りによる接合痕と指などによる圧痕あり。内面は指による撫で痕あり。	常滑焼。
12	軟質陶器（内耳鍋形か）	59～60C44。SD 05埋土。	底部小片	砂を多く夾雑する。軟質。灰色、燻およぶ。	内面には指の圧痕が若干残る。内面は指による圧痕あり。底・外面には砂の付着が顕著である（乾燥時かい。	在地製品。
13	焼締陶器（大甕）	44～46C42。SD 06埋土。	体部小片	白色鉱物粒を多く含む。焼締りあり。灰褐色。酸化気味。	割れ口は紐作りによる粘土走行あり。外面、手拳のおさえ後に板状の工具による再整形痕あり。内面は摩耗痕が顕著である。良く使用されている。	常滑焼。

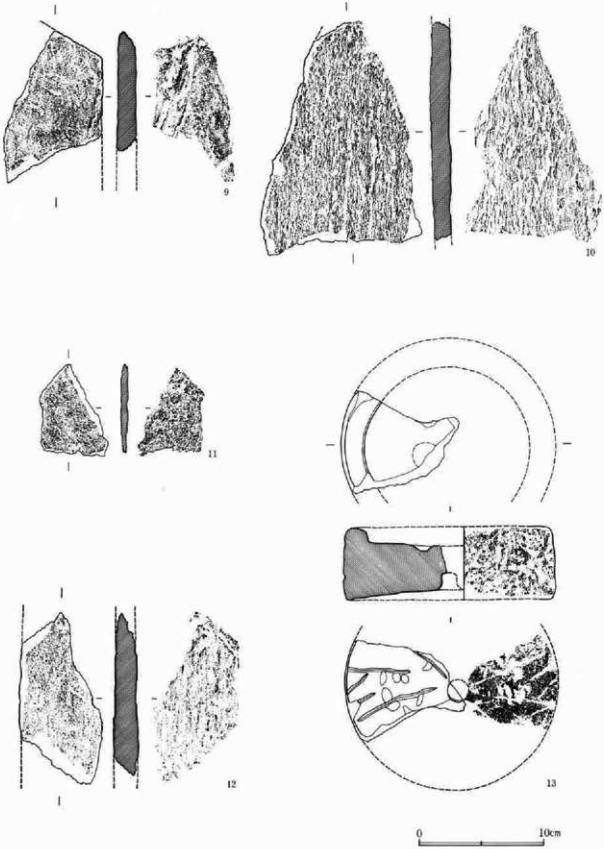
第3表　内郭出土遺物一覧



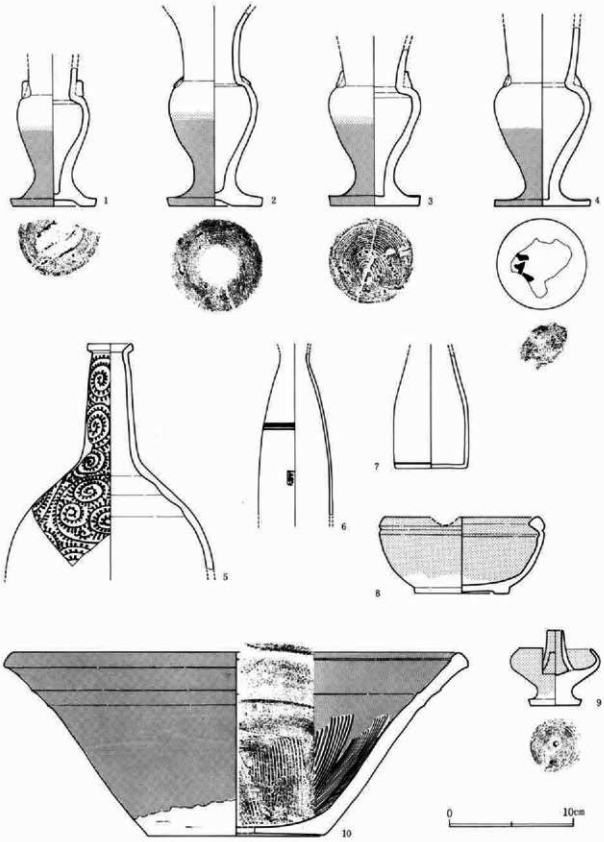
第12図　SD06出土遺物　　1：6



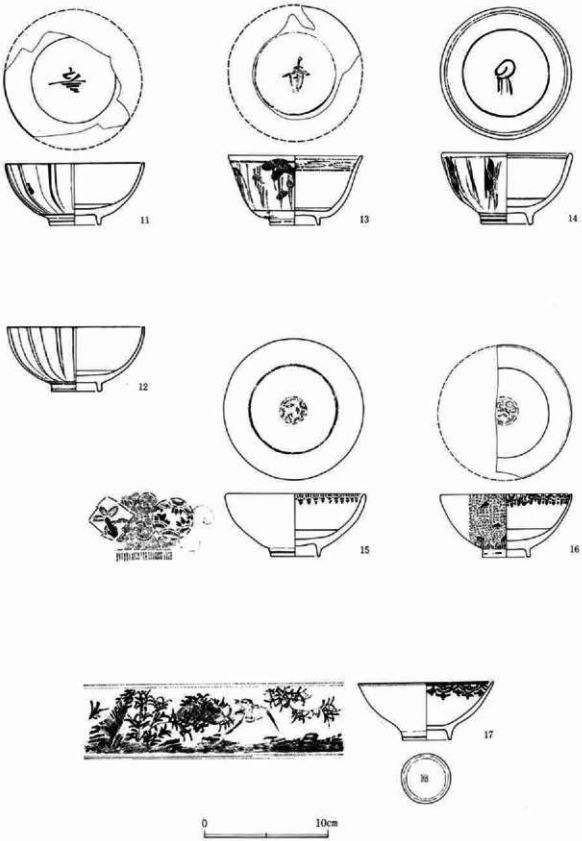
第13図　ＳＤ06出土遺物　１：６



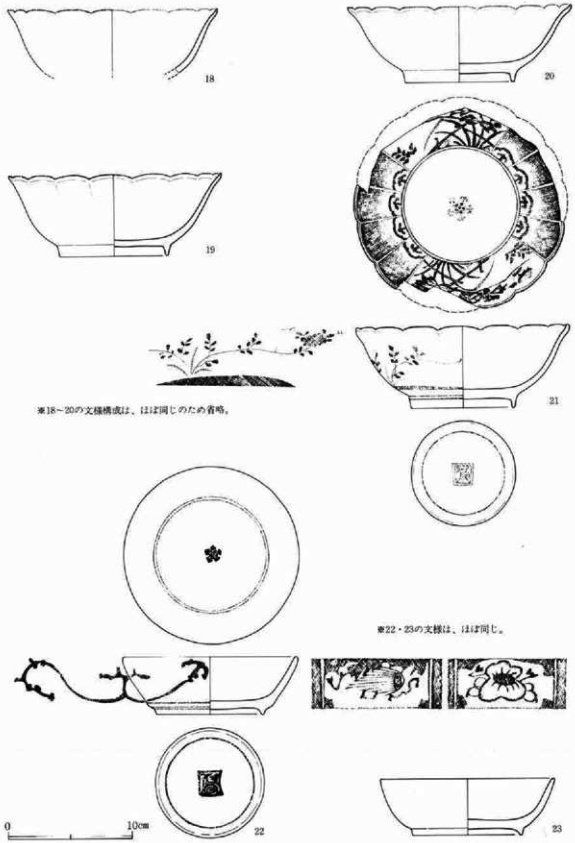
第14図　ＳＤ06出土遺物　１：６



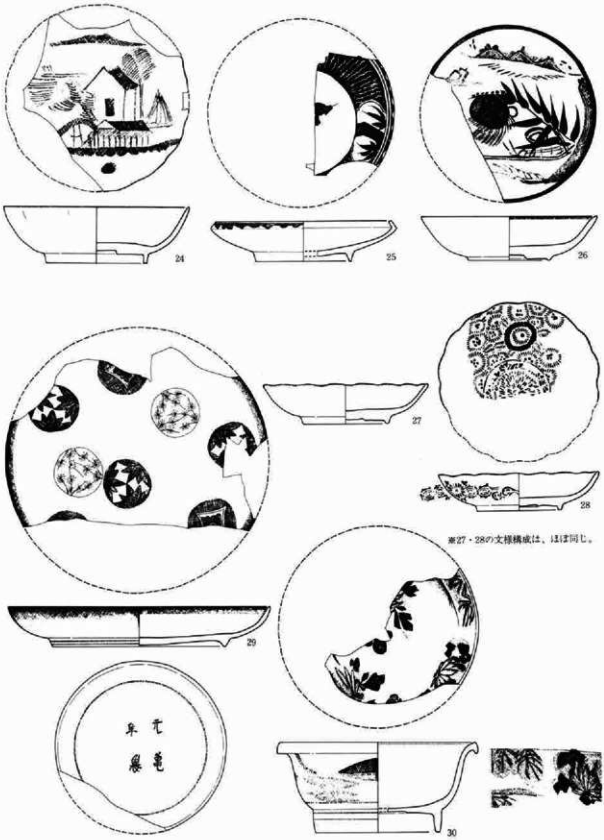
第15図　SK01出土遺物　　1：3　　※トーンは、鉄釉・灰釉（飴釉）を示す。



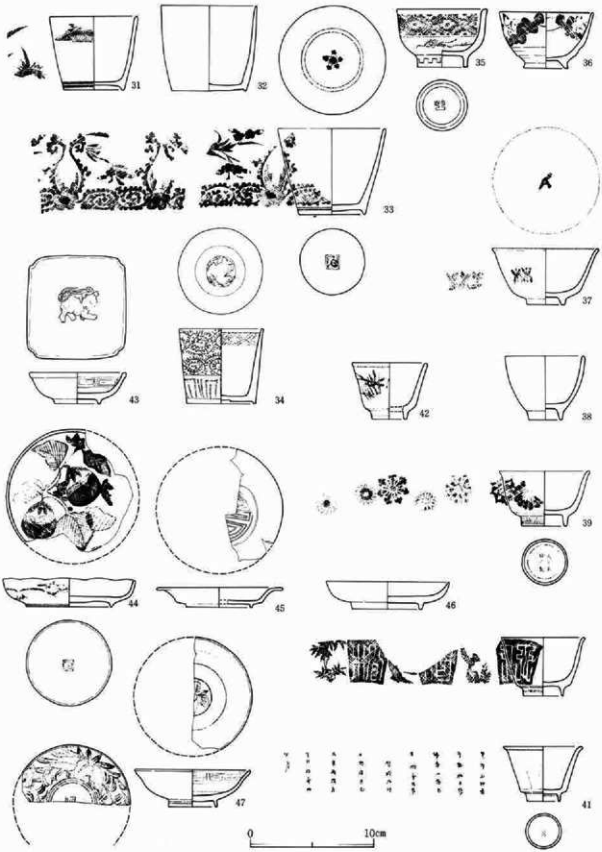
第16図　SK01出土遺物　　1：3



第17図　SK01出土遺物　　1：3



第18図　SK01出土遺物　　1：3



第19図　SK01出土遺物　　1：3

図No.	出土遺構	種別	器種	底目(cm) ( )内は遺存数値	胎土・焼成 色調	器形・施釉・文様	整形の特徴	摘要
1	SK01	陶器	仏花瓶	器高(11.0)、底径6.7。	灰色。 夾雑物微量	双耳仏花瓶。胴部中央を境に上半に灰釉、下半に鉄釉を掛けているが、中央部は両者の釉がまざり帯状に中間的発色となっている。内面は、頸部上方に限り施釉。底部無釉。頸部直立。	底面に轆轤右回転による糸切り痕を残す。体部下半に轆轤目を残す。底部中央を不整形に凹ませている。	瀬戸・美濃系。18～19世紀。
2	〃	〃	〃	器高(15.5)、底径7.5。	灰色。 夾雑物微量	同上。	底面に轆轤右回転による糸切り痕を残す。底部中央を円形に凹ませている。	瀬戸・美濃系。18～19世紀。
3	〃	〃	〃	器高(12.5)、底径7.2。	灰色。 夾雑物微量	双耳仏花瓶。胴部中央を境に上半に灰釉、下半に鉄釉を掛けているが、中央部は両者の釉がまざり帯状に中間的発色となる。内部は頸部上方に限り施釉。底部無釉。肩部が張り頸部開く。	底面に轆轤右回転による糸切り痕を残す。	瀬戸・美濃系。18～19世紀。
4	〃	〃	〃	器高(14.2)、底径7.7。	灰色。 夾雑物微量	双耳仏花瓶。胴部中央を境に上半に灰釉、下半に鉄釉を掛けている。内部は頸部上方に限り施釉しており、底部は無釉。底面に不明墨書。	底面に轆轤右回転による糸切り痕を残す。	瀬戸・美濃系。18～19世紀。
5	〃	磁器	徳利	器高(17.9)、口径3.7。	夾雑物無し 乳白色。	白磁釉は、青白色を帯びる。鮑唐草文を呉須を用いて器面全体に描く。文様は塗り重ねて濃く表現している。内面無釉。長い頸部に丸い肩部と球状の胴部が続く。	器表面は平滑である。内面は、僅かに轆轤目が認められる。	伊万里系。18世紀。
6	〃	磁器	徳利 (燗徳利)	器高(12.0)、胴径6.0。	夾雑物無し 乳白色。	胴部上半に、呉須による2条の線がめぐっており、上段が太い。胴部中央に、呉須による不明角銘が認められる。	器表面は、平滑で、薄手に仕上げられている。	瀬戸・美濃系。明治～大正。
7	〃	〃	〃 (〃)	器高9.2、底径5.7。	〃 〃	胴最下部に、呉須による1本の条線がめぐる。内面並びに底部無釉。寸胴状の胴部は上端で「く」の字状に変化。	器表面は、平滑であるが、内面には僅に轆轤目が認められる。	瀬戸・美濃系。明治～大正。
8	〃	陶器	片口鉢	器高6.1、口径13.3。	夾雑物微量 灰色。	高台の内・外・端部を除く器面全体に灰釉を掛けている。輪高台。片口部は欠損している。	口縁端部は、折り返して厚く仕上げ、胴部下半は、篦削りで、薄く丸く整形。	不明。19世紀。
9	〃	〃	茶碗(ちゃわん)	器高6.7、胴径7.2。	夾雑物微量 灰色。	脚部下半、底部を除く器面全体に灰釉を施しており暗緑色に発色。芯たて部が、油だめより高い。	底部に、轆轤右廻りの糸切り痕あり。胴下半部に篦削りによる再調整痕あり。底面中央に、ヒビ割れ防止の小穴有。	不明。18～19世紀
10	〃	〃	擂鉢	器高14.7、口径37.6。	夾雑物微量 黄灰色。	内面に、10+α本を単位とする下し目条線あり。全面に錆釉を施し、底部、胴部下半をぬぐいとっている。	体部下半に篦削りによる再調整。底部は、切り離し後、轆轤回転による再調整。口縁端部を内側に折り返す。	瀬戸・美濃系。18～19世紀。

SK01出土遺物一覧

図No	出土遺構	種別	器種	量　目(cm) (　)内は 遺存数値	胎土・焼成 色調	器形・施釉・文様	整形の特徴	摘要
11 〜 12	S K01	磁器	飯茶碗	器高4.8、口径11.3。	夾雑物微量 灰白色。やや焼成不足	呉須とクロム化合物を交互に用いて縦縞文様を描き、呉須は、濃い藍色で、所謂ペロ藍に近い発色。器面の白磁釉は、焼成不足のためか、若干白濁をおび、見込には、簡略化の進んだ帆舟文様を呉須で描く。高台の釉境は、鉄足状に酸化。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。	不明。幕末〜明治。
13	〃	〃	〃	器高5.6、口径10.9。	夾雑物無し 乳白色。	コバルトを用いた染付で、不連続の縦縞文様を主体としており、簡略化が進み雑な施文。所謂ペロ藍的発色。見込には円圏文の中央に「寿」が文様化され描かれている。高台の釉境は、鉄足状に酸化。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。口縁端部がやや外反している。	瀬戸・美濃系。明治〜大正。
14	〃	〃	〃	器高5.7、口径10.6。	夾雑物無し 乳白色。	コバルトを用いた染付で、不規則な縦縞文様を描き所謂ペロ藍的発色。見込には、円圏文を描く、その中央に「俗」文を描いている。高台端部を除く器面全体に施釉し、高台の釉境は、鉄足状に酸化。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。全体に厚手。	瀬戸・美濃系。明治〜大正。
15	〃	〃	〃	器高5.0、口径11.3。	夾雑物無し 乳白色。	コバルトを用いた摺絵染付。青海波状の地文と蘇鉄等の窓絵がある。口縁内側は、簡素化された環珞文。高台端部鉄足。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。全体に厚手。	瀬戸・美濃系。明治〜大正。
16	〃	〃	〃	器高5.1、口径10.7。	夾雑物無し 乳白色。	コバルトを用いた摺絵染付。所謂ペロ藍的発色。器表面全体に、半円重ね文を描いている。見込には、手描き円圏文とその中央に摺絵による円形松竹梅文がある。口縁の環珞文はくずれている。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。全体に厚手。	瀬戸・美濃系。明治〜大正。
17	〃	〃	〃	器高4.6、口径11.0。	夾雑物無し 乳白色。	コバルトを用いた染付。所謂ペロ藍発色。小鳥が、柘榴の実を啄む図。口縁内側に環珞文。高台内側に、円圏文と不明角銘。腰部に丸味の少ない磁形。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。比較的薄手。	瀬戸・美濃系。大正。
18 〜 21	〃	〃	鉢	器高6.5、口径17.2。	夾雑物無し 乳白色。	輪花（16弁）形の染付鉢。内側面は、大きく四分割され、2区画には、主文様となる草花文を配し他2区画はダミの連続による変化あり。見込五弁花文、外側面2箇所に草花文、口縁端部に口銹がある。高台内側に同圏文と鳴状角銘がある。露胎部酸化気味。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。ハリ支え。比較的薄手。	伊万里系。18世紀。
22 〜 23	〃	〃	皿	器高4.5、口径14.0。	夾雑物無し 乳白色。	染付皿。内側面を4分割し、宝尽し文を描く。見込五弁花文のみコンニャク判。外側面には唐草文を描く。高台内側には、円圏文と鳴状角銘銘。高台端部を除く器面全体に施釉。	外面、高台括れ部に筆削りの再調整あり。厚手。	伊万里系。18世紀。

SK01出土遺物一覧

図No	出土遺構	種別	器種	量 目(cm) ( )内は遺存数値	胎土・焼成 色調	器形・施釉・文様	整形の特徴	摘要
24	SK01	磁器	皿	器高4.5、口径15.0。	夾雑物無し 乳白色。	輪花（16弁？）形染付皿。見込には、龍海図が描かれている。細線による縁描の後、ダミをさしている。口縁端部は、口銹が認められるが、外側面は無文。高台は、所謂蛇ノ目凹高台であり、無釉部分は、酸化気味。	外面、高台括れ部に篦削りによる再調整あり。	伊万里系。19世紀。
25	〃	〃	〃	器高3.3、口径15.0。	夾雑物無し 乳白色。	内面口折れの染付皿。見込側面は、三方浮彫により窓絵を設け、竹等を描き、他は、墨はじきによる蔵織文様を残している。口縁外側には、波状文、端部には口銹を施す。以下の外側面は無文。高台端部のみ無釉である。	外面、高台括れ部に篦削りによる再調整あり。	伊万里系。18～19世紀。
26	〃	〃	〃	器高3.4、口径14.3。	夾雑物無し 乳白色。	染付皿。白磁釉は、青白色を帯び、高台端部を除く器面全体に掛けられている。見込は、山水風の絵と草花文と混在しており意味不明である。口縁端部に口銹。高台は、所謂蛇ノ目凹高台であり、無釉部分は酸化気味。	外面、高台括れ部に篦削りによる再調整あり。	伊万里系。19世紀。
27～28	〃	〃	〃	器高3.9、口径12.9。	夾雑物無し 乳白色。	輪花（16弁？）形摺絵染付皿。白磁釉は、青白色を帯びる。コバルトを用いており濃い藍色に発色。見込中央に、円圏文を配し最も大きな菊文を描き、周辺部は大小の菊文で埋めつくし、外側面には、菊花を中心とした唐草風の連続文が2箇所認められる。高台は、所謂蛇ノ目凹高台であり、施釉部分と、露釉部分との境は鉄足状に酸化。	外面、轆轤による篦削り痕あり。厚手。	瀬戸・美濃系。明治～大正。
29	〃	〃	〃	器高3.3、口径21.6。	夾雑物無し 乳白色。	浅い盤状の染付皿。白磁釉は、若干青色を帯び、高台端部を除く全面に施している。見込には、木葉、七宝などの丸文を散らしている。口縁部の内外周に、ダミを施し濃淡で変化をつける。高台内側に円圏文と、「元亀年製」銘が認められるが、当該資料の製作年とは考えられない。高台外側面には2条の線文があり、端部は無釉。	外面、轆轤による篦削り痕あり。ハリ支え痕あり。	伊万里系。18世紀。
30	〃	〃	鉢	器高7.3、口径16.2。	黒色鉱物粒 僅に含む乳白色。	高い高台の折縁の染付鉢。白磁釉は、青白色を帯る。草花文を散らし、外側面は山海図風の文様を、ダミ筆を用いて描く。畳面に高い高台が付き、高台の内側が、蛇ノ目状となる。高台の内側及び蛇ノ目部分を除き、器面全体に施釉される。無釉部分は、鉄足状に酸化。	外面、轆轤による篦削り痕あり。高台括れ部に再調整あり。	瀬戸・美濃系。大正?。

SK01出土遺物一覧

図No.	出土遺構	種別	器種	量　目(cm) (　)内は遺存数値	胎土・焼成 色調	器形・施釉・文様	整形の特徴	概要
31	S K01	磁器	そば猪口	器高5.9、口径7.2。	夾雑物微量 乳白色。	染付そば猪口。釉は乳白色を呈し、高台端部を除き全面に施釉。全体に細かい貫入が入る。淡青色の呉須を用い、山水風の文様を描く。高台外側面に２条の条線文を描く。	ほとんど轆轤目等認められない。	伊万里系。18世紀。
32	〃	〃	〃	器高7.3、口径7.8。	夾雑物無し 乳白色。	白磁そば猪口。釉は透明度が高く、高台端部を除く器面に施釉。赤味直気味の高台から、胴部にかけてややふくらみをもって立ち上がる。	内・外面共に轆轤目が僅にわかるが、極めて薄手である。	伊万里系。18世紀。
33	〃	〃	〃	器高6.9、口径7.8。	夾雑物無し 乳白色。	染付そば猪口。釉は、青白色を帯び、高台端部を除く器面全体に施釉。外側面を三方割にして草花文を配し、これを蛸唐草文でつなぐ。見込に、五弁花文、高台内側には、円圏文と渦状の角福銘が認められる。高台外側には、２条の条線文がある。	轆轤目は、僅に認められるが、極めて薄手である。	伊万里系。18世紀。
34	〃	〃	〃	器高6.0、口径6.8。	夾雑物無し 乳白色。	染付そば猪口。釉は、青白色を呈す。器表面下部に、蓮弁状の連続文をめぐらし、上部は蛸唐草文を描く。蛸唐草文には部分的にダミをきし、内面上方には、四割花菱の連続文、見込には、円圏文と円形の松竹梅文を描く。高台は、所謂蛇ノ目凹高台である。	轆轤目は、僅に認められるが、極めて薄手である。	伊万里系。18～19世紀。
35	〃	〃	小　坏 (煎茶碗？)	器高4.7、口径7.3。	夾雑物無し 白色。	染付小坏。釉は透明度が高く高台端部を除く全面施釉。呉須は、濃い藍色に発色し、ベロ藍に近い。文様は、高台部が雷文風、体部が雨龍(草の龍か)、上方が花菱形文となる。高台内に文字銘。	轆轤目は、目立たないが厚手である。	瀬戸・美濃系。明治～大正。
36	〃	〃	〃 (〃)	器高4.6、口径7.6。	夾雑物無し 白色。	鉄染付小坏。文様は、鉄の下絵付で草花文を描いている。口縁端部に口銹。釉は、透明度が高く高台端部を除く器面全体に施釉。体部下半に、３条の沈線文がめぐり、高台端部の露胎部と釉の境目は、鉄足状に僅に酸化する。	轆轤目は、目立たない。	不明。明治。
37	〃	〃	〃 (〃)	器高4.5、口径8.6。	夾雑物無し 白色。	染付小坏。釉は、乳濁しており高台端部を除く器面全体に施釉。呉須は青色を呈し、墨書と考えられる２文字が描かる。見込に、不明文様が認められる。口縁に口銹が認められる。かんた窯（瀬戸市上半田川町）等の出土例がある。	轆轤目は、目立たない。	瀬戸・美濃系。19世紀。
38	〃	〃	〃 (〃)	器高5.2、口径6.4。	夾雑物無し 白色。	瑠璃釉小坏。内面は白色で外面にコバルトによる青色釉(瑠璃釉)が厚く施されている。高台端部を除く器面全体に施釉。	轆轤目は、目立たない。	瀬戸・美濃系。大正?。

SK01出土遺物一覧

図No.	出土遺構	種別	器種	量 目(cm)（ ）内は遺存数値	胎土・焼成色調	器形・施釉・文様	整形の特徴	摘要
39	SK01	磁器	小坏（煎茶碗？）	器高4.4、口径7.3。	夾雑物無し 乳白色。	銅版染付小坏。花文、鋸歯状文を、コバルトと鉄（茶鉄須）を用いて銅版染付する。釉は、高台端部を除き全体に施す。高台内側には、円圏文と「大日本鈴山製」の銘が認められるが詳細不明である。	轆轤目は、目立たない。	瀬戸・美濃系。大正。
40	〃	〃	〃（〃）	器高4.4、口径6.8。	夾雑物無し 白色。	銅版染付小坏。外側面に松、竹、梅の図を文字文と交互に配している。釉は、高台端部を除く器面全体に施されている。	器面は平滑。腰部に三角形の面取りがなされており、整形後の型押製作か。	瀬戸・美濃系。明治。
41	〃	〃	〃（〃）	器高4.4、口径6.4。	夾雑物無し 白色。	染付小坏。外側面に、漢詩が9行にわたって描かれているが、判読できない。濃い藍色に発色しており、所謂ベロ藍に近い。高台内に、円圏文と角銘が認められるが詳細不明である。高台端部に限り無釉であり、鉄足状に酸化する。	器面平滑。体部下方に鎬筋が立っており、型押製作か。	瀬戸・美濃系。幕末～明治。
42	〃	〃	〃（〃）	器高4.5、口径6.2。	夾雑物無し 白色。	染付小坏。外側面に、春蘭が描かれる。濃い藍色に発色し、ベロ藍に近い発色である。釉は、高台端部を除く、器面全体に施される。口縁部上方に1条、高台部に2条の条線文が認められる。	器面平滑。厚手である。体部下方に鎬筋が立っており、型押製作か。	瀬戸・美濃系。明治～大正。
43	〃	〃	皿	器高2.5、口径7.9。	夾雑物微量 白色。	白磁角皿。見込に、印文による唐獅子文、内側面に雷文帯がめぐっている。口縁端部は僅に外側に折り返している。釉は、高台端部を除く器面全体に施される。	器面平滑。	不明。幕末(?)。
44	〃	〃	〃	器高2.3、口径10.8。	夾雑物無し 乳白色。	染付輪花皿。見込に、筍が描かれており、外側面には、唐草文がめぐっている。釉は、高台を除く器面全体に施釉。高台内側に角銘が認められるが不明。	轆轤目は目立たない。	伊万里系。18世紀。
45	〃	〃	〃	器高1.6、口径10.2。	夾雑物無し 白色。	白磁皿。口縁部が、水平に開いた口折れの小皿。見込に印文が認められる。高台端部を除く器面全体に透明釉を施す。	轆轤目は目立たない。	不明。幕末(?)
46	〃	〃	〃	器高2.2、口径10.0。	夾雑物無し 白色。	白磁皿。高台端部を除く器面全体に透明釉を施す。	見込に若干轆轤目が認められるが、外表面は目立たない。口縁端部を除く他は厚手である。	不明。幕末。
47	〃	〃	（蓋）	器高3.0、口径9.4。	夾雑物無し 白色。	蓋付茶碗の蓋。釉は、淡い青白色を呈し、鈕端部を除く全面に施釉。外側面には、草花文、内側には、雷文、二重円圏文、花文がそれぞれ線描される。鈕内側に角銘が認められるが、詳細不明。	轆轤目は目立たない。	不明。明治。

第4表　SK01出土遺物一覧

(2) 第 2 拡張区（第21図）

第2拡張区は50C00・58B40トレンチ内で掘立柱穴が検出され、掘立建物があることが判ったので、そのトレンチ間の拡張を実施した。それが第2拡張区である。検出された柱穴群は、検討の結果、SB01・02の建物としてまとめることができ、このほかSE01、SD35を検出している。

SB01（第21・22図、写真7）

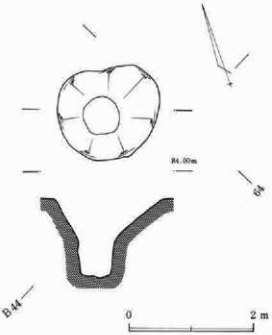
SB01は53～60B41～46に位置する。調査に当っては、柱穴規模、掘り方形態が共通するものを基準にまとめた。SB01は桁行5間、梁行2間を数える。桁行は東より1.90＋2.10＋2.10＋2.10＋2.10mで総長10.3mである。梁行は2.18＋1.60mで総長3.78mで、北側の梁が60cm余り短くなっている。また、東より2間目の側柱間に束柱か棟受柱の柱穴があり、この掘立柱建物の特徴となっている。梁方向N 5°15′E。

SB02（第21・22図・写真8）

SB02は53～60B40～46に位置し、SB01と同位置に存在する。SB02は桁行5間、梁行2間を数え、東・南・北に庇か下屋が取りつく。東側の庇は2回の建て替えがある。規模は桁行で東より2.25＋2.10＋2.10＋2.10＋2.70mそれに東側1.35mの庇が付き、総長12.6mを計る。梁行は南より1.8＋1.95m、さらに南0.96m、北0.9mの庇が付き、総長5.61mを計る。中央の側柱間に束柱か棟受柱がありSB01の特徴と共通する。SB01・02の新古は柱穴間の重複により、SB02が新しい。柱穴形態は方形気味である。梁走行はN 2°30′Eである。出土遺物は第23図1・2が柱穴から出土している。

SE01（第20・21図）

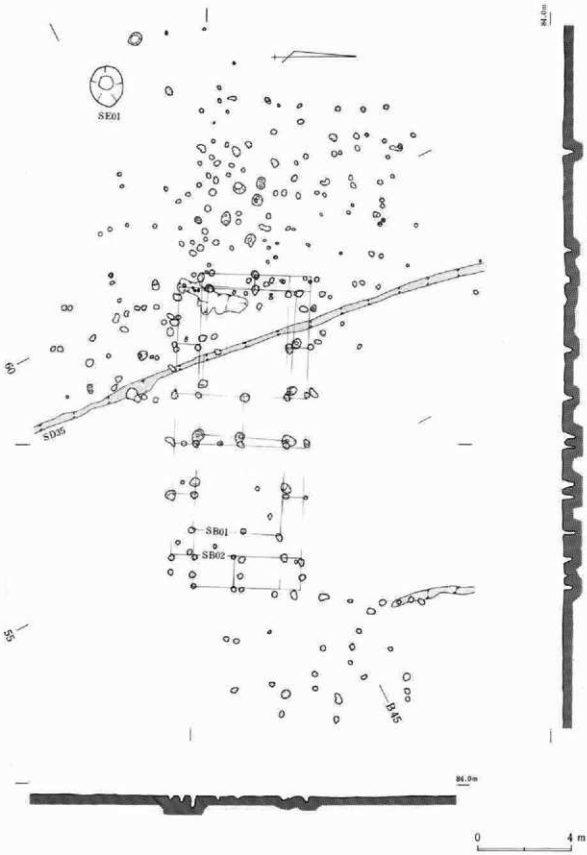
SE01は64B44に位置し、形態は井筒上部がロート状になり、下半は直筒的である。規模は口径1.7m深さ1.7mである。埋土は砂質で中世の質感を呈し、SB01・02柱穴内埋土とほぼ同じである。出土遺物はない。



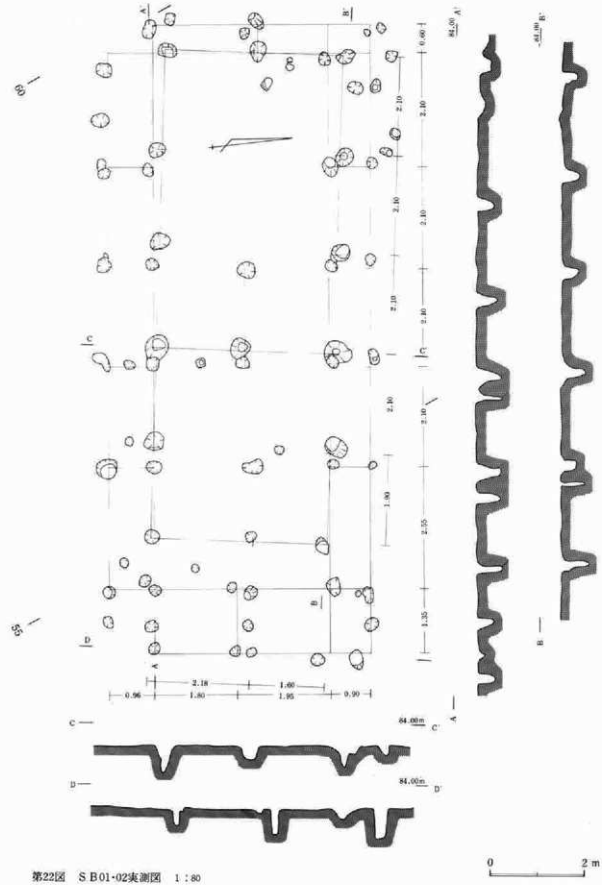
第20図　SE01実測図　1：60

その他の柱穴

SB01・02東方・西方にまとまることができなかったが柱穴群がありSB01・02と同期の別建物の存在が示唆される。



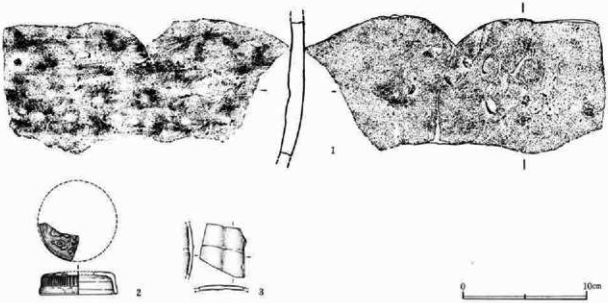
第21図　第2拡張区実測図　1：160



第22図　ＳＢ01-02実測図　1：80

図・写真No.	土器種（器種）	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘要
1	焼締陶器（大甕）	柱穴底部の柱受けとして出土	体部片	白色鉱物粒を主とし、若干黒色鉱物粒を含む。焼締。赤褐色。	内面に紐作りの接合痕があり指圧痕がある。割れ口の粘土走行も紐作りの単位が見える。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼か。SB02出土
2	磁器（香合子蓋）	SB02 柱穴埋戻土	口径6.1cm、器高1.9cm（推定）	夾雑物なし。磁胎。白色。桃緑。釉調茶褐色。	外面に片切の割花文あり。側部の外面上に蛇腹状の刻目あり。器形は胴の張った香合子の蓋となる。釉調は、鉛釉調であるが素地自体も酸化しているため、本来は青磁の意識か。外面は薄いが全面施釉される。口縁端部は釉が削られ、生掛状に釉と素地との境目を有す。内面は天井部側に部分的に入るほか露胎となる。釉と素地との境目は鉄足状に酸化し、素地自体もやや酸化気味となる。口縁端部は箆削目がある。釉の表面に細貫入がしきりと入る。	舶載
3	磁器（袋物）	SB01・02 柱穴群	胴径約9cm（推定）	夾雑物を含まない磁胎。白淡灰色。釉調は厚い部分で青白磁色を呈し、薄い部分で白磁色。	外面にカボチャ瓜状の凹凸をこしらえ、内・外面に接合のため凹線が入る。縦破片数は4片あり、復元像は、長いカボチャ型となり、おそらくは盆物であったと思われる。内・外面に薄いが青白磁釉が全面に施釉されている。釉は大まかな貫入が入る。内面には整形時の横撫で痕が見られる。	景徳鎮窯。

第5表　SB01・02出土遺物一覧



第23図　SB01・02出土遺物　　1：3

(3)　トレンチ調査区

トレンチ調査によって検出された遺構で、拡張した部分を除外すれば、すべて溝状遺構であった。溝状遺構については以下のとおりである。

SD01

35D25に位置する。断面形は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.5m、深さ0.3m、軸方向N 8°30′Eを計る。

SD02（第8・25図）

50D13に位置する。断面形は浅いU字状を呈し、標準II層から掘り込まれる。埋土は砂質である。規模は幅0.7m深さ0.52m、軸方向N16°30′Eを計る。

SD03（第8・25図）

58D13、14に位置する。断面形は浅いU字状を呈し、標準II層から掘り込まれる。埋土は砂質である。規模は幅1.55m、深さ0.7m、軸方向N66°30′Wを計ることができる。

SD14（第8図）

34B40～43、42B48、50C04にかけて位置する。断面形は浅いU字状を呈し、部分的に二条となり、掘り直しが認められる。規模は幅1.4m、深さ0.6m、軸方向N83°30′Wを計る。

SD15（第8図）

42C06、07に位置する。断面形は浅いU字状を呈す。埋土は砂質、規模は幅0.7m、深さ0.5m、軸方向N86°Eを計る。

SD16（第8図）

68B36に位置する。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.3m、深さ0.2m、軸方向N80°Eである。埋土中から第24図1が出土している。

SD17（第8図）

68B34に位置する。断面形は浅いU字状を呈す。埋土は砂質。規模は幅0.4m、深さ0.3m、軸方向はN 1°30′Eを計る。

SD18（第8図）

66B33に位置する。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.3m、深さ0.2m、軸方向N 1°30′Eである。

SD19（第9図）

66B29に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.4m、深さ0.3m、軸方向N80°Eである。

SD20（第9・26図）

66B26、27に位置している。断面は南立ち上りの不明瞭な形状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.8m、深さ0.96m、軸方向N89°30′Eである。

SD21（第9・26図）

66B17、18に位置している。断面は浅いU字状を呈し、数回の掘り直しが行われている。埋土は砂質である。規模は幅1.2m、深さ0.5m、軸方向N 0°30′Wである。

SD22（第9図）

66B06、07に位置している。断面は浅いU字状を呈している。埋土は砂質である。規模は幅1.0m、深さ0.3m、軸方向はN 8°30′Eである。

SD23（第9・26図）

66B02、03に位置している。断面は浅いU字状を呈している。埋土は砂質である。規模は幅0.8m、深さ0.32m、軸方向はN12°30′Eである。

SD24（第9図）

34A40～38A42に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅1.5m、深さ0.4m、軸方向N88°30′Eである。

SD25（第9図）

34A37～38に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅1.4m、深さ0.4m、軸方向N23°30′Eである。

SD26（第9図）

34A29～31に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅2.75m、深さ0.5m、軸方向N88°30′Wである。

SD27（第9図）

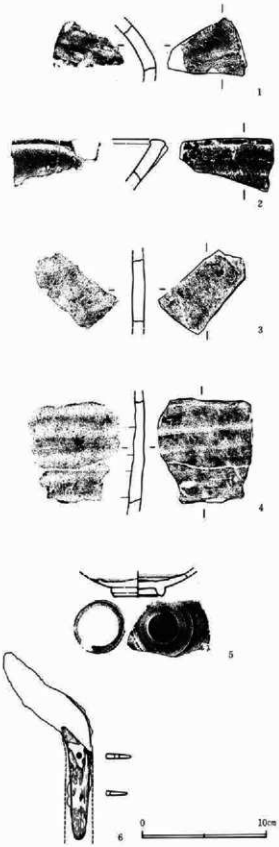
42A28、29に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅2.0m、深さ0.6m、軸方向N 1°30′Eである。

SD28（第9・26図）

54A37・58A35にかけて位置する。断面形は浅いU字状を呈し、部分的に二条となり、掘り直しが認められる。規模は幅1.68m、深さ1.0m軸方向N33°30′E

SD29（第9・26図）

54A36～68A16、17に位置する。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅1.2m、深さ0.8m、軸方向N 0°30′Wである。埋土中から第24図4の出土がある。



第24図　SD出土遺物　　1：3

図・写真No	土器種(器種)	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘　要
1	焼締陶器(甕)	SD16埋土 68B35・36	肩部小片	夾雑物含む。灰色。	甕の肩部片である。内面に指などによる圧痕と紐作りによる粘土の接合痕あり。外面は自然釉がおよぶ。内面に指などによる撫痕あり。外面は自然釉のため不明瞭。	常滑焼。
2	軟質陶器(鉢)	SD11埋土	片口部小片	白色鉱物粒多い。軟質。茶褐色。	口片鉢の片口部小片である。内外面に横ぶまおよび黒褐色となる。片口部は指により折り曲である。外面に指などの圧痕あり。内・外面に指などによる横撫で痕あり。内面に擂鉢としての擦痕は明瞭でない。	在地製品。
3	焼締陶器(甕)	SD34埋土 68A14	体部小片	白色鉱物粒含む。灰色。	体部の小片である。内面に指などによる圧痕あり。外面にも指などによる圧痕あり。内・外面の割れ口の摩耗いちじるしい。内面に指などによる横撫で痕あり。	常滑焼。
4	軟質陶器(内耳鍋形)	SD29埋土 58A34	体部片	夾雑鉱物粒含む。軟質。茶褐色。	体部の小片である。内外面に横ぶまおよび黒褐色となっている。内・外に紐作り後の輪積の整形痕あり。割れ口に紐作りによる粘土走行あり。内面に指などによる横撫で痕あり。外面にも横撫で痕あり。	在地製品。
5	施釉陶器(皿)	SD30埋土 50A17・18	底径4.0cm	夾雑鉱物粒微。横縞。灰色。釉調淡青緑色。	外面は体部上半に施釉あり。見込は蛇目となり、施釉は生掛。釉調は銅釉的。高台は削り出し。輪積は左廻り。高台および外面の体部下半に荒削りによる再調整あり。	唐津系。
6	金属器(鎌)	SD34埋土 68A16・17	全長15.0cm	鉄製品	茎に目釘穴あり。茎は両刃的になるが刃側が厚く棟側が薄い。柄の木質が遺存している。刃部は片刃となる。鎌としての刃区、棟区はこしらえていない。先端まで完存するが刃先の形態が異様なのは、先端が多少研減しているためか。木質端は旧状を保つ。	

第6表　SD出土遺物一覧

SD30（第9・26図）

34A18～58A17～21に至る位置に存在する。断面はU字状を呈すが数次の掘り直しが見られ一部が分岐する。埋土は砂質であるが底部に黒褐色粘性土が見られる。規模は幅1.2m、深さ0.76m、軸方向N32°30′Eで、蛇行気味である。第24図5が50A17から出土している。

SD31（第9図）

34A13～42A16に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.7m、深さ0.3m、軸方向N81°30′Eである。

SD32（第9図）

58A05、06に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅1.5m、深さ0.4m、軸方向N4°30′Wである。

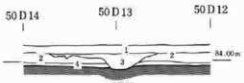
SD33（第9・26図）

58A03に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.7m、深さ0.63m、軸方向N73°30′Eである。

SD34（第9・26図）

66A16、17～68A13、14に位置している。断面は浅いU字状を呈す。埋土は砂質である。規模は幅0.7m、深さ0.58m、軸方向N0°30′Eである。埋土中から第24図6の出土がある。

元島名B遺跡



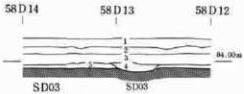
SD02

① 耕作土。

② B軽石を多く含む黒褐色土。上面、水田により酸化気味。

③ A軽石を主とする。灰色土。

④ B軽石順堆積層、灰色。



SD03

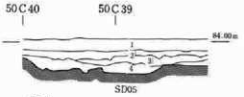
① 耕作土。

② B軽石を多く含む黒褐色土。上面、水田により酸化気味。

③ よごれたB軽石、黒褐色土。

④ 細かいB軽石を主に、下方にしたがい粘性おびる。灰色。

⑤ B軽石順堆積層。



SD05

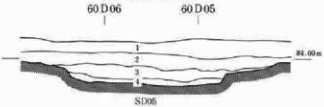
① 耕作土。

② B軽石を多くまじえる黒褐色土。上方は水田により酸化気味。

③ 砂質の黒褐色土層。

④ B軽石を多くまじえる。

⑤ 砂質の黒褐色土層。③よりも灰色味強い。



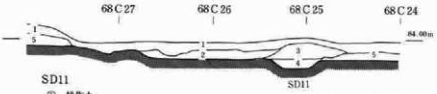
SD05

① 耕作土層。

② B軽石を含む黒褐色土層。

③ B軽石を多量に含む黒褐色土層で、上面が酸化気味となる。

④ 粘性おびる黒灰色土。



SD11

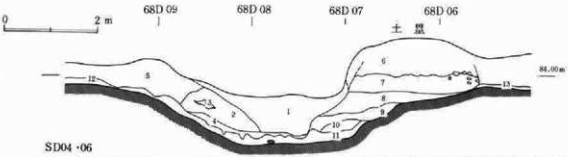
① 耕作土。

② A軽石を主とする灰色土。

③ 田畦と見える。やや粘性の黒褐色土。

④ 砂質であるが粘性の黒褐色土。

⑤ B軽石を多く含む黒褐色土。



SD04・06

① 現代に残る水路・水堀のため、黒色混土中に、多量の有機物を含む。

② 軽石を多く含む砂質土。

③・④ 灰色砂質土。

⑤ 軽石を多く含む、黒褐色土。上面が農道のため硬く締る。

⑥ 土盛盛土で、軽石を多く含む粗質な黒褐色土。

⑦ ローム層ブロックを多く含む、砂質の黒褐色土。土盛基部土層。

⑧ 土盛構築時か、それ以前に存在したと考えられ、締りのある黒褐色土。

⑨ B軽石を含むが、粘性の強い黒褐色土。

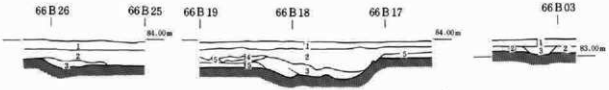
⑩ B軽石を多く含むが粘性の強い黒褐色土。

⑪ 砂、シルト質の細砂が、下方にあり、上方に至るにつれ粘性味を増す。黒灰色土。

⑫ B軽石を多く含む黒褐色土。

⑬ B軽石をまじえない黒褐色土。（旧黒色土）。

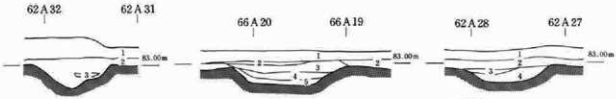
第25図　SD断面土層実測図　1：80



SD20
① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土で、水田により上面酸化気味。
③ 砂質の黒褐色土。

SD21
① 耕作土。
② B軽石を多く含む黒褐色土。上面水田により酸化気味。
③ 軽石を含むが粘性の黒褐色土。
④ B軽石を多く含む黒褐色土。
⑤ 粘性の黒褐色土。
⑥ 軽石をわずか含む黒褐色粘性土。

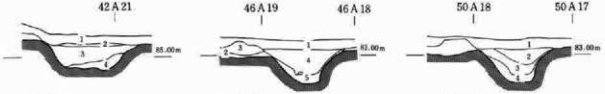
SD23
① 耕作土。
② B軽石を多く含む黒褐色土。
③ 砂質な黒褐色土。



SD28
① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。

SD29
① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土で、水田により酸化気味。
③ 粘性の黒褐色土。
④ 砂質の黒褐色土。

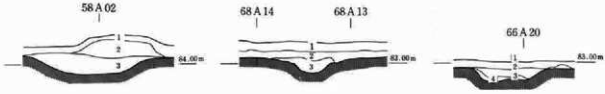
SD29
① 耕作土。
② 軽石の多い黒褐色土。
③ 縞りのある黒褐色土。
④ 粘性のある黒褐色土。
⑤ 砂質の黒褐色土。



SD30
① 耕作土。
② B軽石を多く含む砂質の黒褐色土。
③ 黒褐色粘性土。
④ やや酸化気味で砂質の黒褐色土。

SD30
① 耕作土。
② B軽石の少ない、締った黒褐色土。上面は水田により酸化気味。
③ B軽石を多く含む砂質の黒褐色土。
④ 砂質の黒褐色土
⑤ 粘性の黒褐色土。

SD30
① 耕作土層。
② B軽石を含む砂質の黒褐色土層。
③ B軽石を多量に含む黒褐色土層。
④ B軽石の少ない灰褐色粘質土層。



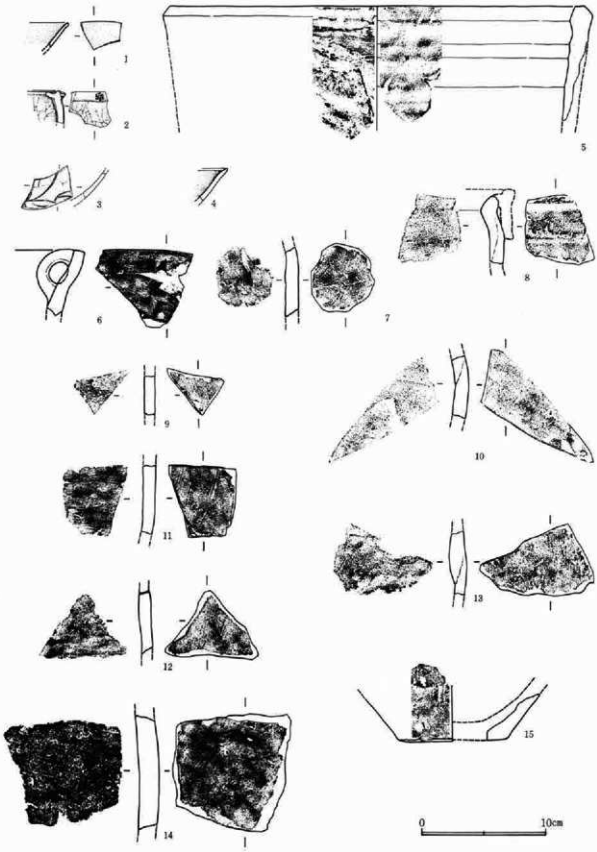
SD33
① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。上面は水田により、酸化気味。
③ B軽石を多く含み砂質の黒褐色土。

SD34
① 耕作土。
② B軽石を多く含む黒褐色土。上面水田により酸化気味。
③ 軽石の多い砂質の黒褐色土。

SD34
① 耕作土。
② 軽石の多い黒褐色土。
③ 粘性のある黒褐色土。
④ 砂質の黒褐色土。

0　2m

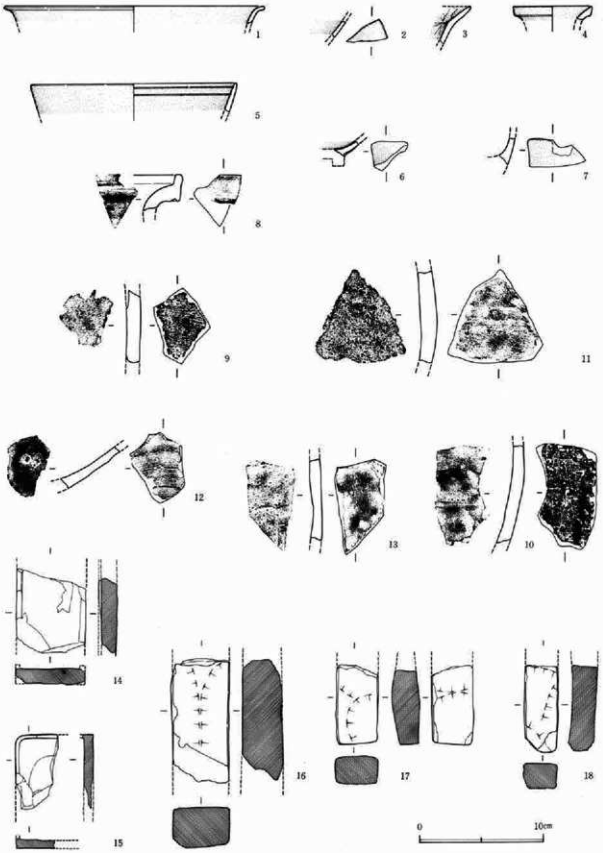
第26図　SD断面土層実測図　1:80



第27図　耕作土出土遺物　　1：3

図・写真No.	土器種（器種）	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘　要
1	磁器（青磁碗）	63A39	口縁部小片	夾雑鉱物を含まず。白色。青磁釉。	大きく外反する碗の口縁である。劃文は見られない。釉の発色は青緑色で、内・外面ともに施釉される。	龍泉窯系。
2	磁器（青磁蓋物）	34A5	口縁部小片	夾雑鉱物を含まず。白色。青磁釉。	蓋物の身の口縁部か。口縁内側に返りをもつ。口縁下外面に、装飾変形味文あり。釉は厚く、深い青緑色を呈する。内外ともに施釉される。	龍泉窯系。
3	磁器（青磁碗）	34C22	体部小片	夾雑物を含まず。白灰色。青磁釉。	劃文が内面に施されているが、外面に施文はない。釉は薄く、茶味がかったオリーブ色を呈す。	龍泉窯系。
4	磁器（白磁皿）	58B44 SD35埋土か	口縁部小片	夾雑物を含まず。灰白色。白磁釉。	口縁部に釉の削り落しによる口禿げあり、他は白磁釉。大まかな貫入あり。素地と釉の境目は曖化。釉は薄い、白磁釉。釉の気泡は細かく、多く乳濁する。	中国産。
5	軟質陶器（不詳）	34C2	口縁部小片	砂・片岩粒を含む。軟質。褐色。	内面に轆轤目あり。外面下方は大きく剝落。口縁部上端はヘラ削りにより平らになる。内面は轆轤に伴う横撫である。口縁部下外面に横撫である。	在地産。
6	軟質陶器（内耳鍋形）	65C31	口縁部小片	夾雑物少量含む。軟質。灰色。	内面に内耳あり。外面下方に、指のおさえ痕あり。内面は横撫である。外面は撫でによる擦痕あり。下に横撫である。	在地産。
7	須恵器（円形加工）	42A14・15	体部小片	夾雑物微。普通。灰色。	大甕の2次加工円盤である。周辺面取りは大まかである。部分的に面取りの再調整あり。	2次加工製品
8	焼締陶器（甕）	42A26・27	口縁部小片	白色鉱物粒含む。褐色。	大甕の口縁部片で口縁と考えられる。内・外面に横撫でと内面指頭圧痕あり。	常滑焼。
9	焼締陶器（甕）	34C38	体部細片。	白色鉱物含。褐色。	細片のため不明瞭。	常滑焼。
10	焼締陶器（甕）	63C12。SD13埋土か	肩部小片。	鉱物粒微。褐色。	内面に指などの圧痕と紐作りによる接合痕あり。外面に格子叩有。内面に横撫で痕あり。	常滑焼。
11	焼締陶器（甕）	68D37～40	体部小片。	白色鉱物含。暗赤褐色。	内面に指などの圧痕あり。内外面櫛目状工具による整形痕あり。	常滑焼か。
12	焼締陶器（甕）	42A2・3	体部小片。	白色鉱物微。黒色。	内面に指などの圧痕と紐作りによる接合痕あり。内面に横撫で痕あり。	製作地不詳
13	焼締陶器（甕）	34A10・11	体部小片。	夾雑物多し。黄灰色。	内面に紐作りの接合痕があり指などの圧痕あり。外面に板状工具による整形痕あり。	製作地不詳
14	焼締陶器（甕）	68B37～40	体部片。	微鉱物粒多。灰色。	内面に素文の叩きか素文による凹みあり。外面に叩目状の微圧痕。内面に撫で痕あり。	製作地不詳
15	軟質陶器（鉢）	42A16・17	体部下方～底部細片。	夾雑鉱物微。軟質。灰色。	内面剝落。底面にわずかながら糸切痕あり。外面に撫で痕あり。	在地製品。

第7表　耕作土出土遺物一覧



第28図　その他の出土遺物　1：3

図・写真No.	土器種（器種）	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘　要
1	磁器（青磁碗）	表採	口縁部細片	淡灰色。釉調青緑色。	口縁が大きく外反する。釉は薄いが、内・外に細貫入あり。内・外施釉。	龍泉窯系。
2	磁器（青磁碗）	表採	体部細片	淡灰色。釉調青緑色。	釉調は砧手で薄い。体部外面に大まかな蓮弁文があり鎬ゆるい。内・外施釉。	龍泉窯。
3	磁器（青磁鉢）	表採	口縁部細片	淡灰色・淡青色	白色・釉調青緑色。厚く施釉され内外施釉、貫入入る。	龍泉窯。
4	磁器（青白磁碗）	表採	口縁部細片	淡灰色。淡青色。	釉調は青白磁で厚い施粕。口縁端部は鋭い。内・外施釉。	龍泉窯系。
5	磁器（青磁碗）	表採	口縁部片	淡灰色。釉調青褐色。	釉調はオリーブ色がかり薄く細貫入あり。内面刻文あり。内・外施釉。	龍泉窯系。
6	磁器（青磁碗）	表採	高台部周辺の細片	淡灰色。釉調青緑色。	釉調は砧手で厚く施釉。高台端部側が鉄足状に酸化。内・外施釉。	龍泉窯。
7	磁器（黒釉瓶）	表採	体部細片	夾雑物なし。淡灰色。釉調黒色。	釉調は深い黒色。内面に轆轤条痕あり。器形は細片のため判然としないが底部隙片であれば梅瓶片か。内面は施釉なし。	舶載。
8	焼締陶器（甕）	表採	口縁部小片	夾雑鉱物少。褐色。	口縁内面に段をもち、端部は丸みをおびる。口縁は大きく外反する。内・外面に横撫で痕あり。	常滑焼。
9	焼締陶器（甕）	表採	体部小片	白色鉱物多。灰褐色。	内面に成形の際の擦痕あり。外面に櫛目状の整形条痕あり。	常滑焼。
10	施釉陶器（瓶）	表採	体部小片	夾雑物微。灰色。	瓶の体部上方片。内面紐作り痕。指などの圧痕あり。内面施釉なし。外面の施釉下に貫削りの整形痕あり。灰釉で釉調は淡緑色。	瀬戸焼。
11	焼締陶器（甕）	表採	体部小片	夾雑鉱物多。灰褐色。	割れ口に紐作りと思われる粘土走行あり。内面に指などの圧痕有。内面に横撫で痕あり。	常滑焼。
12	施釉陶器（碗）	表採	体部小片	夾雑鉱物微。灰白色。釉調淡緑色。	内面施釉され、外面は釉掛なし。内面にトチン痕あり。釉は灰粕。外面に轆轤目と体部下半に箆削り痕あり。	美濃焼。
13	焼締陶器（甕）	表採	体部小片	白色鉱物多。灰色。	内面は紐作りによる接合痕あり。外面は厚い自然釉に覆われ不明瞭。内面に横撫で痕あり。自然釉あり。	常滑焼か。
14	硯	C区内郭	幅5.6cm	軟質。灰色	長方形の板片で面に使用痕あり。裏は整形なし。側部研磨痕あり。	泥岩製。
16	砥石	C区内郭	幅4.6cm	黄灰色。	表面側面は研磨により平滑。割口・小口面に研磨痕なし。裏面に斫り痕がそのまま残る。	凝灰岩製。
17	砥石	C区内郭	幅4.4cm	黄灰色。	両小口を除く4面に研磨痕あり。表・裏面ともに凸状に減る。両小口は割れとなっているが端部に摩耗および、割れ以後も使用。	凝灰岩製。
18	砥石	表採	幅2.7cm	淡黄灰色。	両小口を除く4面に研磨痕あり。表・裏ともに糸巻状に凹む。両小口は割れとなっているが端部に摩耗および、割れ以後も使用。	凝灰岩製。

第8表　その他の出土遺物一覧

7 考　　察

(1) 元島名城外郭部の調査所見

今回の調査では、島名城の外郭の堀切りであるSD06と、聖眼寺の寺域の一部を含む外郭内部の調査がなされたがそれぞれの構築年代について記述していないので合せて触れておきたい。

SD06は、大規模で45C42に直角に曲る隅部を設けているため、耕地区界や、利水のための大溝と異なるのは明らかであろう。幅約5m、深さ約1mの大規模である点を考慮すれば土塁こそ検出されなかったが島名城址に伴う堀切りと考えてよさそうである。しかし現況に残る島名城の内堀りは幅約8m以上を測ることができるため、内郭同等の本格的な防禦を持った堀切りでないのは明らかである。未掘部分の南延長上は、この堀切り痕跡が次第に広く、深くなり、防禦力は高かったと考えられる。それに接した外郭南半には、袋町と称する町屋関連の地名称（第4図）が残り、外郭機能の一部が知られる。この外郭すべてに町屋形成がなされていたかは、調査区内において生活関連遺物が薄かったので、やはり南半に限られていたと想定される。調査区内におけるSD06の規模が小さかったのもこの町屋の存在と有機的な関連にあるのかもしれない。

SD06の構築年代は、北東隅の墓石、石製板碑を一括廃棄とした場合、その堀役位置は、底面より約30cm以下の埋土下層にあるため第12図4から出された15世紀後半は、その構築年代の一部を示唆し、少なくとも15世紀後半以前に構築されたとしうるのである。[1] 15世紀初頭に構築され16世紀代終末まで存続した島名城からすればその存続の前期に位置するであろう。

山崎氏は、島名城址推定図（山崎1971）[1]を掲げ、調査個所に対し、二個所に土橋様の渡りを想定（第4図）しておられたが、該当個所には検出されず、さらに砂質土を伴う流水の痕跡を底面に認め、地山造り出しによる土橋遺存の可能性はなかった。しかし、堀切りの渡りは必要不可欠な存在であり、土橋の代りとなりうる俵、木橋を別に想定する必要があろう。調査個所で渡橋を示唆する場所にSD06の北東隅部があり（第10図）底面においてわずかな高まりながら、土橋様の造り出しが認められ、さらに47C49～52に小溝の切り残し部分があり、それぞれ異なる段階における渡橋施設の一部を思わせた。調査時に、このことを意識して43～45C38・39トレンチを設定したが関連物証は得られなかった。

聖眼寺の遺構は、SK01が廃棄遺物の製作年代から大正時代が考えられ、機能としては仏花瓶を伴うことから聖眼寺のごみ穴と考えられた。出土陶・磁器は18世紀前半まで散々と遡ぼり、しかも一般民家では用いられなかった上手の製品（第17図18～21）があり、聖眼寺の生活機能は17世紀まで遡ぼる可能性が強くなった。

北接の土塁については、中世におけるSD06が完全埋没し、一部がSD06の中に及んで構築され、さらにその築成土は、密に締められてはいなかったので城郭に伴う土塁とは考え難く、構築時点も江戸時代の聖眼寺に伴ってと判断された。

聖眼寺は山崎氏によれば鬼門除けとされたが、西接の墓地に中世に遡ぼる墓石が微弱であること、江戸時代前期と思われる古絵図（第3図）[2]に記入されていないことから、島名城が機能していた間に存在したとは考え難いのである。地域伝承に聖眼寺は、寛永年間に僧情意が開基したとあり、[3] 調査所見からすれば妥当性が生じる。

SB01・02については次節で触れたとおりであるが、まとめることのできなかった掘立柱建物跡が東西にあり、雑屋的な施設を考慮する必要がある。主屋に対する脇屋が東に一棟、西に数棟、井戸跡らの

組合せは、生活しうる機能の単位がほぼ満たされていると見ることができる。この掘立柱建物が存在した14世紀代は、県内の掘立柱建物例が少なく、まとまりの単位を明らかにし得た点は重要であるが元島名城との授極的な関連性は考え難かった。

(1) 山崎一『群馬県古城遺址の研究　上巻』1971
(2) 高崎市教育委員会『元島名遺跡』1979
(3) 京ケ島村誌編纂委員会『京ケ島村誌』

図・写真No	土器種(器種)	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘要
第29図	縄文(深鉢)	62A34耕作土	把手片	砂が多い。普通。橙色。	深鉢に伴う把手片である。加曽利E III式。	
第30図 1	須恵器(坏)	34C22		夾雑物なし。硬質。灰色。	蓋付きの坏部である。返り部分に接合痕あり。口径の割に器高がある。受け部端部は丸味をおび、立ち上がり部との区分が明瞭になされている。体部下半に轆轤左廻り篦削りあり。それ以外は轆轤に伴なう横撫で痕あり。	
2	須恵器(大甕)	58A06	体部片	白色鉱物粒多い。硬質。灰色。	体部外面に不明瞭な平行状叩きあり、内面に青海波の当て目あり、割れ口に紐作り痕あり。内面に手などによる撫で痕あり。	在地産。
3	土師器(器台)	64C31	脚部片	白色鉱物粒多い。普通。橙色。	割れ口に紐作り痕あり、脚部内面に指の圧痕あり。外面に僅かながら篦痕がある。	
4	土師器(高坏)	50C22	坏部片	酸化鉱物粒多い。軟質。橙色。	大きく外反する高坏の体部片であるその中位に一段の段部あり。器面が摩耗している為不明瞭である。	
5	埴輪(円筒)	42C46	胴部片	砂が多い。軟質。橙色。	外面に断面三角形の突帯あり。その上下に櫛目施文あり。内面に指による撫で目あり。	
第31図 1	須恵器(坏)	土橋トレンチ 73B37	底径6.6cm.(推定)	夾雑物少ない。軟質。淡灰色。	底面に轆轤右廻りの糸切り痕あり。内面底は轆轤による凹凸あり。側部外面には轆轤目あり。轆轤による横撫でが、側部内・外面に見られる。	
2	須恵器(瓶)	D地区表採	底径10.8cm(推定)	夾雑物少ない。普通。灰色。	底面に糸切り痕がわずかに残る。内面底は轆轤による凹凸あり。高台は貼付による。轆轤による横撫でが、側部内面に見られる。側部外面は、高台貼付後に篦削りの再調整がなされている。	
3	土師器(坏)	34B02	口径13.0cm(推定)	夾雑物少ない。普通。淡橙色。	小片のため遺存状態不明瞭。体部外面に篦削りがわずかながら見られる。	摩耗はなはだしい。
4	瓦(平瓦)	S D06北東コーナー断ち割、47C38	厚さ1.1cm	白色の小鉱物粒を多く含む。片岩粒をわずかに含む。軟質。橙色。	表面には、布の圧痕があり、裏面は素文となる。側部は篦削りあり、1回の面取り。奥小口面は1回の面取り。表面に横骨痕なし。表・裏面に粘土板剥取痕なし。粘土板接合痕なし。	摩耗はなはだしい。

第9表　(2)土地利用の変遷の項土器一覧

(2) 土地利用の変遷

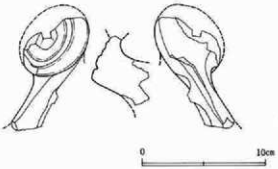
元島名Ｂ遺跡における土地利用の変遷については検出遺構種が中世に限定されるため、余りにも薄弱であるが、ここでは、通史的変遷を得られた資料の範囲で考えてみたい。

1 縄文時代

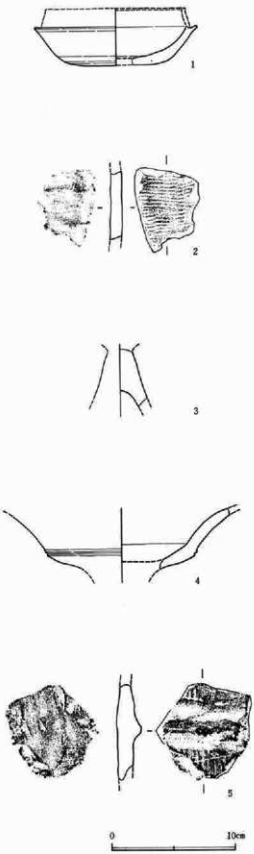
縄文時代の遺構はまったく検出されなかった。当遺跡では、台地上面にローム層の水性による２次堆積が終り、黒色土の堆積が進み、現在とほぼ同様な地形、形成の中で縄文時代をむかえたと考えられるが、各拡張区、トレンチ調査区に遺構は見られなかったのである。ただ62Ａ34区において、第29図の縄文土器１片が耕作土中から出土した。それは加曾利ＥⅢ式の把手片であるが、割れ口がかなり摩耗している。

2 弥生時代

群馬県では、古墳時代初頭に浅間山給源によるＣ軽石の降下があった。当遺跡においても部分的にＣ軽石層が見られたが順堆積層でなく、汚れていた。古墳時代以降の遺構、埋土はこのＣ軽石層の存在によって見分けることができる。当遺跡ではＣ軽石の入らない小溝が３個所に検出されている。SD09、10、35である。少なくともＣ軽石降下に先だって存在したと考えられるが出土遺物がまったくない。３条の



第29図　縄文時代遺物　　１：３



第30図　古墳時代遺物　　１：３

小溝のうち、SD09、10は並走することから人為によるものと考えられ、6－(1)において概述したとおり北接地域の弥生時代集落と何らかの関連を持つかもしれない。

3　古墳時代

古墳時代の遺構は検出されていないし、遺物自体の出土量も少ない。第30図は各トレンチからの出土遺物である。どの個体も摩耗が顕著であるが、古式土師器の段階から、和泉期、鬼高期の遺物であろう。縄文～古墳時代を通観し、土地利用形態を考えた場合、当遺跡は人為性の少ない空間であったようだ。

4　奈良、平安時代

奈良時代も、遺構は検出されていない。遺物は第31図3がある。

平安時代の遺構は検出されていないが、C40ライン以北に、12世紀前半頃の火山灰とされる、B軽石層の堆積を認めることができたが直下に黒色粘性土は存在したものの、水田跡の存在は無かった。北接低地に伴う堆積と考えられ、低台地上は攪乱を受け順堆積の状態ではなかった。

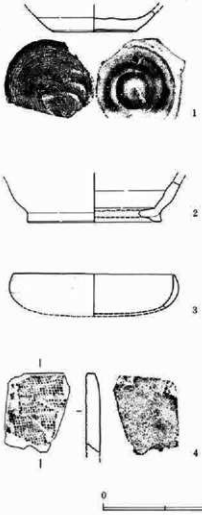
平安時代の遺物は若干、認められ、第31図1、2、4がある。いずれも摩耗が顕著であり、住居跡などに伴うほど新鮮な感じはない。第31図4は布目瓦である。最も近い散布地に高崎市新保町新保遺跡、京ヶ島町浄土野遺跡があるが両者ともに、2km以上のへだたりがあり当遺跡出土層とは関連性が薄いと見なされる。

5　中世以降

鎌倉時代の遺構は明瞭でなかった。しかし、鎌倉時代と考えられる第13図5の板碑類、第11図3、4などが出土している。現状では鎌倉時代の遺構認定は土器種が不明瞭なため古墓群を除くと、生活、生産遺構の把握がともに困難な実状にあり、当遺跡とても同様である。少なくとも、板碑類の出土を見たことから周辺に古墓が存在したことは言うまでもない。

南北朝から室町時代にかけての遺構として、SB01、02、SE01などがあり、当遺跡では初現のまとまった遺構で、地域における在家の発達に大いに関連するであろう。それらに後出して、SD05、06などの元島名城関連の遺構の存在がある。

SD06は、構築時点は室町時代後半と考えられ、埋没は16世紀と出土遺物から推測される。また遺跡各所に存在し、水田に用いられたと考えられる小溝の一部は中世遺物を混えており、この頃から、江戸時代前半にかけ序々に耕地化されていたのであろう。



第31図　奈良・平安時代遺物　　1：3

(3) SB01・02、SE01について

第2拡張区における掘立柱穴群、井戸跡は周辺に掘立建物が見られないこと、集中性があることなどから、年代幅のある所産とは思えず、比較的短い期間に存在した可能性が高い。

その年代は、柱穴から第23図1～3に中国磁器片と常滑焼片が出土しているため、それから求めたい。

常滑焼は体部片で、特徴がなく年代推測は困難である。飴釉の香合子の蓋は、かつて、「日本出土の中国陶・磁展」、が東京国立博物館で開かれた折の所見では景徳鎮窯系とされる青影的な青白磁の主体は、平安時代の末から、鎌倉時代にかけて出土傾向があった。第23図2は、釉調が茶褐色であること片切りによる劃花文が施されている点、青影釉香合子より後出的である。さらに香合子の主体は中世後半に減少するので、この香合子片を中世前半代と考えたい。第23図3の袋物は青白磁で、青白磁の多用されたのは北宋代である。第23図2の常滑焼は、体部曲率が浅く、大器の大甕であり、このことと流通上の供給状況を考え合せれば宋代と一部並行する中世初頭の所産とは考え難く、いく分後出するであろう。以上の諸点を勘案すると、14世紀前後の存在が想起される。

その年代観をふまえ、次に、SB01・02およびSE01を含めた建築時の復元像を考えたい。

まず第21図では建物として、まとまったのはSB01・02であるが、そのほか東方、南側西半部、西側から北西側にかけて柱穴群が存在し、まとめることはできなかったが何らかの施設が存在したと考えてよいであろう。この広がりの中で注意されるのは、井戸の周辺および、掘立建物の東半の南前面、北面延長上に掘立柱穴群がないことである。SB・SE、柱穴群とが、相互を意識しながら、存在した証しであろう。またSB01・02の東半の居住域外に柱穴群がないのは、出入口、裏口が存在したための開放的な空間と察せられる。

SB01の復元像であるが、桁行5間、梁行2間で居住区外に特別な施設を伴わない。しかし側柱列間では東より最初から桁間が1.90mと他の桁間より20cm余り短い。また梁間は、東西とも北側が、1.06mと南側より58cm短いため、屋根構造は南側に長い、北側に短い形で、梁間が2間分しか取ってないことから、おそらくは切妻の屋根であったと考えられる。

居住域内では東1間の桁数が45cm大きいのは、ここが出入口とか、あるいは特殊な部分であったことを示唆している。また桁で東より3柱目に束柱か棟受柱の柱穴があり、居住域内部に間仕切りが存在したか、床束が存在したことのいずれかであろう。

SB02の復元像であるが、桁行5間、梁行2間で、西を除く三面に庇か下屋が取り付く、SB02が新しいのでSB01から02に移行したことになる。側柱列間では東1間目の桁数が2.25mで他の2.10mより15cm長く、西1間も同様に他より60cm長くもうけられている。東1間分は、土間となり、出入口か、特殊な施設にあてられていたと考えられるが西側はさらに特殊である。北西隅側柱を検出すべく整査をくり返したのだが検出することができなかった。このことは、北西の柱組の構築が一般的でないことが指摘できよう。居住域中央に床束か棟支柱の柱穴がある。床張りがあったのであろうか。

屋根構造はSB01の場合と同様、切妻であったと思われる。庇部分であるが、東の庇に隅柱穴が残されており、下屋であったのかもしれない。南側は、部分的に柱穴が2重になり作り替えが考えられる。東側は梁中央の側柱が一度作り替えられ、庇自体の作り替えがなされている。庇の作り替えの新・古は柱穴が重複していないので、不明瞭だが、北庇の庇梁長、0.9mを当初のものとすれば、隅柱を伴う0.9mが古く、側柱から1.35mを計る長い庇の方を新しい付替えと考えることもできる。

(1) 〈東京国立博物館〉『日本出土の中国陶磁』1978

(4) 出土遺物について

元島名遺跡から出土した遺物類は、中世を主体とするものであった。中世遺構出土遺物は古代遺構出土遺物ほど出土量の豊富さや一括性が高くなく、現状において地域の遺物像の究明はおろか遺物種揃えさえ明瞭でない。その理由としては、各報告に一括性・同時性の表示がなされていない点に端を発し、遺物種組合せなども触れられていない場合が多いからである。本項では一括性の表明とその組合せについて触れておきたい。

中世遺物の一括性は、凹みを有する遺構中からまとまって出土した例や、長大な溝跡を平面調査した場合に得られるが、元島名遺跡における中・小規模な溝跡は、トレンチ調査によるもので不確定要素が強く、仮に複数個体が出土しても一括性があるとして強く推奨はできない。出来そうな例として、SD06の埋土層から出土した一群、SB01・02から出土した遺物についてある程度、云えそうである。

1. SD06出土遺物

SD06の上層から出土した第11図1を除き、第11図3～6・8・9・13、第12・13図などが溝跡検出面以下から出土しているのでそれらは、SD06の構築時点から完全埋没までの間のまとまりとなるが、一括性とするにはほど遠い感がある。ただ墓石・板碑類の第12図～第14図の出土は、近接した位置と、層仕上も関連し一括廃棄の可能性が強い。次にそれらのまとまりがどのくらいの年代幅にあるのかを考えたい。

第11図1は、SD06の発見面からの出土であり、発見面の年代を推定するのに重要な資料である。群馬県における土師質土器皿の変遷観にしたがえば、D系にあたる15・16世紀[1]の製作と考えうる。

第11図3～5は軟質陶器製の鉢類である。4は、口縁端部を尖らせ3内面直下に凹みをめぐらし、口縁部外面に横撫でを施す手法をとっている。この特徴は元応二[2]（1320）年銘の類例に近似しているため、14世紀前半の製作が考えられる。2・3・5は口縁端部を内側にわずか折り返す特徴を持つ鉢類で、この特徴は15・16世紀の後代に形式化しながら受け継がれてゆくが15世紀代よりも発達せず、元応二年銘鉢よりも後出するのは明らかなので14世紀後半頃の所産と考えたい。

第11図6～8は時代判定しうる特徴が明瞭でないので、推定困難である。

墓石類については、新倉明彦氏により、第12図1が15世紀前半、6が15世紀前半、3が15世紀後半、4が15世紀前半の所産が考えられている。

石製板碑類については細片を除き第13図5が15世紀前半、第13図10が15世紀終末、と考えられている。

これらの一群の年代観を通観すれば、14世紀前半代が最も古く、15世紀後半が最も新しいことになり、その幅でのまとまりとして考える必要があろう。

SD06の北東隅における墓石・板碑類は一括廃棄とした場合には、最も新しい第12図6が15世紀終末にあるため、その段階の廃棄行為が考えられる。

SB01・02は、前章で触れたとおり、掘立柱建物群の存続した幅で継続性を認めてよいであろう。

SK01は、調査困難な状況の中で出土した遺物類であるが、ほとんどが白色を呈した陶・磁器で、それが黒色土中から出土したのであるから、まとまりの状態は一目で識別しえた。このため、確実な一括遺物であると云える。廃棄時点は、製作年代の若い第19図39・42をとらえれば大正時代が考えられる。この一括資料は発掘調査例において19世紀～20世紀初頭代の陶・磁器の良好な一括例が少ないため、愛知県陶磁資料館の仲野泰裕氏に検討をお願いし、後節を参照していただきたい。

(1) 大江正行「群馬県における中世土師質土器」「群馬考古通信7号」1980
(2) （尾島町教育委員会）『長楽寺遺跡』1978

(5) 元島名Ｂ遺跡出土の墓石と石製板碑について

本遺跡出土の板碑の数量は８基を数えるが、すべて破損または摩滅が著しく、紀年銘の残るものは無い。そこで、個別に形状等から造立年代を推定した後、若干の考察を述べることにする。

№５の板碑　この板碑は、６号溝底部より出土している。石材として緑泥片岩を用いている大型の板碑である。残存部分は板碑の左上半部分（ここでの左右は板碑正面から見た場合を言う。以下同じ）にあたるもので、厚さ4.7㎝を計り、推定全巾40㎝弱・推定全長130㎝前後を計るものと思われる。主尊は薬研彫りの阿弥陀種子（キリーク）で、同じく薬研彫りの蓮座をもつ。阿弥陀種子は一尊か三尊かは不明であるが、キリークのイーがアク点の間を貫けない書体であろう。蓮座は左右の花弁がやや開くものと思われる。二条線は刻まれていないが、肩の部分に二段の切り込みをもつ。紀年銘・華瓶・偈文等は破損のため、その有無さえ不明である。この板碑の造立年代を推定するに、二条線の無刻、種子・蓮座の形態、大きさなどからみて、14世紀中頃から15世紀中頃の造立であろうと考えられる。

№６の板碑　この板碑は、６号溝埋土中より出土している。石材として絹雲母片岩を用いている小型の板碑である。下半部を欠損しており、厚さ1.9㎝・巾19.7㎝を計り、推定全長50㎝前後を計るものと思われる。碑面の摩滅・剝離が著しく、主尊・紀年銘等すべて判読不可能である。この板碑の造立年代を推定するに、小型化している点、頂部山形が丸味をおびている点などからして、15世紀初めから16世紀初めの造立であろうと思われる。

№７の板碑　この板碑は、６号溝埋土中より出土している。破損が著しく、一部碑面が剝離しているため、どの部分にあたるかも不明であり、全長・全巾の推定も困難であるが、厚さが4.7㎝と比較的厚いことから、中型もしくは大型の板碑であろうと思われる。石材として緑泥片岩を用いている。

№８の板碑　この板碑は、６号溝埋土中より出土している。石材として緑泥片岩を用いている。板碑側端部にあたる破片であるが、左右は不明である。厚さが3.0㎝と厚く、№５の板碑と同じ位の大型板碑であろうと思われる。№５の板碑と同一個体の可能性もあるが、色調・石英の含有量等石材に若干の差異が認められる。

№９の板碑　この板碑は、６号溝埋土中より出土している。石材として絹雲母片岩を用いている。２点からなる接合資料であり、下端部（根部）の破片である。差し込み式の台を持たず、直接地中に刺し造立する板碑である。巾15.6㎝・厚さ3.0㎝を計り、推定全長70～90㎝程を計る中型の板碑であろうと思われる。

№10の板碑　この板碑は、６号溝埋土中より出土している。石材として緑泥片岩を用いている。板碑右上端部の破片であり、破片左下に阿弥陀種子（キリーク）の一部が僅かに残る。厚さ3.1㎝を計り、推定全巾25㎝前後・推定全長70㎝前後を計る中型の板碑であろうと思われる。二条線は刻まれておらず、種子の刻字法は浅いが薬研彫りである。この板碑の推定造立年代は、二条線の無刻・大きさ・種子の刻字法などからみて、14世紀後半から15世紀末頃の造立と考えられる。

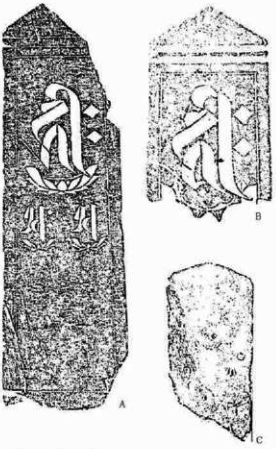
№11の板碑　この板碑は、６号溝埋土中より出土している。石材として緑泥片岩を用いている。この破片は、板碑碑面が板状に剝離したもので、全様は不明である。また、他の破片とは接合不可能である。

№12の板碑　この板碑は、６号溝埋土中より出土している。石材として緑泥片岩を用いている。材質は№７の板碑に類似する。破片は板碑右側端部にあたり、阿弥陀種子（キリーク）の一部である薬研彫りのアク点が僅かに残る。厚さ3.8㎝、推定全巾30㎝前後であろうと思われる。厚さ及び種子の刻字

法が、No10の板碑と類似することから、この板碑の推定造立年代も同じく14世紀後半から15世紀末頃であろうと考えられる。

以上、個別に特徴をあげ、造立年代を推定したが、ここで8基の出土板碑についてまとめてみたい。まず、造立年代については14世紀中頃から15世紀末にかけて造立されたものであり、個々に若干の時間差があるものの、出土位置が近接するため一時期において8基が伴って造立されていた可能性も高い。また、造立されていた期間は碑面や側面の摩滅・破損の状態からみて、比較的長い期間造立されていたものと考えられる。このことから、8基の板碑が溝に廃棄された年代は15世紀中頃から16世紀中頃と推定される。また、溝（6号溝）の埋没した年代も板碑の出土層位から、同じく15世紀中頃から16世紀中頃であろうと考えられる。また、出土状態から廃棄の行なわれ方を察するに、土塁が想定されるため板碑は溝の北側から、すなわち6号溝を元島名城外堀とすると堀の外側から投げ込まれたものと考えられ、このことから造立の原位置を堀の外側に限定できよう。

出土板碑の廃棄年代及び遺構の埋没年代については前述のとおりであるが、板碑廃棄の理由を考える上で、板碑自体の衰退が問題となろうと思われるため、ここで板碑の衰退について述べてみたい。板碑の衰退の時期については、板碑の種類・地域等によって差異があるものの大勢としては14世紀末頃から15世紀初めにかけて急激に減少し始め、16世紀末にはほぼ消滅してしまう。板碑の衰退の原因については諸説あるが、なかに板碑の石材不足や石工の不足等供給者側にその要因を求める説もある。しかし、私は板碑の衰退の大きな要因は供給者側にあるのではなく、需要者側にあると考える。石工が城の構築に狩り出されたなどの要因も若干は考えられるものの、直接の要因はやはり需要者側である中世土豪階層の人間達の質的変化によるものではないかと考えられる。仏教思想に基づき極楽往生を願い供養塔として当時流行していた板碑が造立された。こうした



附図1　板碑拓影

ここに掲載した3基の板碑は、昭和53・54年に高崎市教育委員会により圃場整備事業に伴い調査された元島名遺跡より出土したものである。出土した遺構は元島名城の本丸と推定される位置の付近より検出された溝・土塁・井戸である。Aの板碑は「延慶二年□月」(1309年）の紀年銘が残り、長さ104cm（下部欠損）・巾30cm・厚さ3cmを計る。Bの板碑は、下半部を欠損しているが、二条線・種子・蓮座の様相から13世紀中頃から13世紀末頃の造立と推察され、巾32cm・厚さ3.4cmを計る。Cの板碑は摩滅・破損が著しいが、14世紀から15世紀頃の造立と推察される。このように、この3基の板碑中2基は、前述（本稿）の8基の板碑よりややさい時期の板碑である。造立者については出土地点が若干異なるため前述の8基の板碑と同一集団によるものかは明らかではない。今後の調査研究により資料も増してゆくなかで、周辺の板碑との比較等によりこの地域の板碑の特性が明確化されてゆくものと思われる。

（新倉　明彦）

板碑造立の必要性・流行が薄れてゆき、板碑が衰退してゆくのではないかと思われる。板碑の衰退の理由については不明僅な点が多く、今後の大きな課題となるであろう。

以上、板碑の衰退について若干述べたが、本遺跡出土の板碑は、前述のとおり造立数が急激に減少し始める時期に廃棄されたものであり、廃棄の直接の原因は造立者に何らかの異変が起きたためと考えられる。具体的にはこの土地における造立者の勢力が弱まり、勢力の交替がなされ、新しい勢力により板碑が一掃されたのではないかと推察される。この様な背景で廃棄された板碑の例は本遺跡の場合のみならず、各地において見られ、[1] くり返し行なわれる中で他の要因と相まって衰退してゆくものと思われる。

ここで、本遺跡出土板碑の造立者・被供養者を考える上で、板碑の商品的価値についての問題も重要であろうと思われるため、若干述べてみたい。板碑の造立者について、私は、初発期の板碑造立に荒川・入間川流域の有力土豪が関与している点、供養塔を造立するという仏教思想を持っている点、板碑造立にかかる経費を捻出できうる経済的背景をもっている点などから考えて、板碑の造立は在地の土豪階層の人々の手により行なわれたものと考える。特に上記の中で経済的背景という点については、各地域における個々の板碑の造立者を限定する上で、重要な手掛かりになるものと思われる。すなわち、板碑の大小・装飾（花瓶・天蓋・三具足等）は代価につながり、造立者の勢力を表わすものと考えられる。しかし、板碑は大小や装飾だけで代価が決まるのではなく、産出地（製作地）から造立地までの運搬にも費用がかかり代価も増したであろう。つまり、小型で簡素な板碑であっても産出地より遠い地域に造立する場合は高価なものとなったであろうし、まして大型の板碑であればその重量から考えて運搬にかかる費用は大きいものであったと考えられる。板碑（武蔵型板碑・青石塔婆）の製作地については、その石材となる緑泥片岩等の片岩の産出地であり、かつ未完成板碑[2]（外形を整えただけ、又は、種子、蓮座のみを刻んだ半製品の板碑）が多く存在することから、秩父山地の北麓地域であろうと推定される。本遺跡出土の板碑も秩父山地の北麓より搬入されたものと思われ、特に№5の板碑など推定全長が約130cm前後、推定重量約30kgを計り、運搬には多くの労力と費用を費やしたであろうと考えられ、故に、本遺跡出土の板碑の造立者は、経済的にも力を持った有力な土豪階層の人々であったと推察される。

最後に、本遺跡出土板碑から推察されることをまとめると、造立者は有力な土豪階層の人々であり、少なくとも板碑の造立された14世紀中頃から15世紀末頃に本遺跡付近に居住しており、彼らは何らかの形で元島名城と関係を持ち、15世紀中頃から16世紀中頃にその勢力が弱まり新勢力によりこの土地を追われたものと推察される。

本稿では、出土板碑に紀年銘が無く、形状等から造立年代を推定したが、今後、板碑研究が進むにつれ造立年代の推定巾が縮少され、より実年代に近いものになるはずである。そのためにも地域における板碑集成作業の急務を切望する。又、今後の板碑研究の課題として先に述べた板碑の商品的流通の問題及び衰退・消滅の問題も残されている。

(1) 当事業団の調査例において、庚塚遺跡、(昭和53・54年調査)、渦町屋敷内遺跡(昭和54年調査)、同道遺跡(昭和53年調査)などがあり遺構から廃棄された板碑が出土している。

(2) 未完成板碑と板碑製作地については、『板碑研究の課題』（千々和實、「日本歴史」291所収）

(6) 元島名Ｂ遺跡ＳＫ01遺構出土の陶磁資料について

はじめに

元島名遺跡内SK01遺構より、近世から近代にかけての陶磁資料が一括して検出された。これらの陶磁資料について、その年代と生産地域の同定並びに在地資料の有無などについて調査依頼があり、これに基づき調査検討した結果について報告するものである。

この時期の遺構は、近年の攪乱が激しく、SK01遺構のように一括して遺物が検出される例は少ないため、貴重な調査例である。一方、窯業生産地における窯跡出土の陶磁資料についても、この時期は不充分な点が多いため、今後、これらを補完する重要な資料となるであろう。なお、瀬戸・美濃の陶磁資料の全体比、時期差による傾向などを知るため、伊万里系の磁器についても、生産地の同定を行った。全体の個体数が48点と少なく、確定的なことはいえないが、以下のような傾向を認めることができる。

1. 産地同定

個々の陶磁資料についての産地同定は、「出土陶磁資料観察表」に示したとおりであるが、輸入陶磁並びに17世紀以前の陶磁資料は認められない。

時代及び生産地別に分類したものが、「時代別分類表（附表１）」である。18～19世紀初頭にかけて、伊万里系磁器製品が招来されており、これに、瀬戸・美濃系の仏花瓶、などが僅かに共伴している。一方では、幕末から明治にかけて、伊万里系磁器製品が減少する傾向を示し、これにかわって瀬戸・美濃系の磁器製品が、徐々に増加し、明治時代から大正時代にかけて最も多く認められる。しかし、「器種別分類表（附表２）」に示したように、これらの推移の中にも、伊万里系磁器製品と瀬戸、美濃系磁器製品との間に器種の重複は認められない。さらに、食器を中心に考えを進めると、18～19世紀初頭までは、伊万里系の小皿の他は、木製品で賄われていたと考えられ、これに常時使用しない猪口と深皿が伴っている。次の幕末～明治・大正時代にかけて、瀬戸・美濃系の磁器製品が供給されるようになり、食卓に飯茶碗が登場するようになっている。又、煎茶碗と考えられる小坏も増加しており、煎茶系の喫茶の普及が考えられる。さらに多くの資料を集成した上で述べるべきことであろうが、数少ないSK01遺構出土資料の中からも、このような傾向をよみとることができる。

出土資料の共伴関係は、比較的単純であり、伊万里系、瀬戸・美濃系が多数をしめ、不明品（在地窯製？）が一部認められるのみである。このため、他

	陶　器			磁　器								合　計
	18～19	幕　末	小　計	18	18～19	幕　末	幕末～明治	明　治	明治～大正	大　正	小　計	
伊万里系				9	2	7					18	18
瀬戸美濃	5		5			1	1	2	9	4	17	22
不　明	1	1	2			3		1			4	6
そ の 他							2 皆沢				2	2
計	6	1	7	9	2	11	3	3	9	4	41	48

附表１　時代別分類表

の近世遺跡に認められる唐津系陶器、京焼系陶磁、軟質陶器、土人形などは出土していない。器形別にみると、擂鉢、大皿、壺、甕、土瓶、鍋などが検出されておらず、擂鉢、徳利類も少ない。

2. 在地資料の有無

秉燭（第15図9）、片口鉢（第15図8）、染付飯茶碗（第16図11・12）、小坏（第19図36）などの産地不明資料がある。

在地の近世窯としては、皆沢焼（勢多郡富士見村皆沢）、自性寺焼（安中市下秋間）などをあげることができる。皆沢焼は、陶器の他に磁器を併焼[1]しており、文化十二（1815）年頃[2]前橋藩の藩窯として開窯された。群馬県下唯一の磁器焼成窯であり、前橋藩日記の文政五（1822）年の条に、美濃一ノ倉村の窯職与兵衛の名がみえる。自性寺焼は、幕末期の日用陶器窯であるが、詳細は不明である。いずれも、江戸時代後期から明治時代にかけての短期間の操業である。又、供給力のある周辺諸窯として益子焼（栃木県芳賀郡益子町）、飯能焼（埼玉県飯能市）などをあげることができるが、これらの諸窯と認められる特徴を示す資料は検出されていない。

SK01遺構出土の陶磁資料は、磁器製品が多く、皆沢焼などの在地並びに周辺諸窯を含めて検討すべき

	陶器				磁器												合計
	18~19		幕末	小計	18	18~19	幕末			幕末~明治		明治		明治~大正	大正	小計	
	瀬戸美濃系	不明	不明		伊万里系	伊万里系	伊万里系	瀬戸美濃系	不明	瀬戸美濃系	その他	瀬戸美濃系	不明	瀬戸美濃系	瀬戸美濃系		
擂口				—	3	2										5	5
煎茶碗（小坏）				—				1		1		1	1	2	2	8	8
飯茶碗				—							皆沢？2			4	1	7	7
皿（小皿）				—	2	2	3		3					2		12	12
鉢（深皿）				—		4									1	5	5
鳴徳利				—								1		1		2	2
徳利				—	1											1	1
仏花瓶	4			4												—	4
ひょうそく		1		1												—	1
片口鉢			1	1												—	1
擂鉢	1			1												—	1
その他（蓋）				—									1			1	1
	5	—	1	6	6	4	7	1	3	1	2	2	2	9	4	41	48

附表2 器種別分類表

であるが、今回は、在地の何窯製品であると、はっきり断定することはできなかった。

3. 時代的位置付けと今後の課題

詳細については、出土陶磁資料観察表（第4表）に示したとおりであるが、このSK01遺構から出土した陶磁資料は、幕末から明治時代に至るものが、その中核となっている。この時期は、周知のとおり産業的にも急速に発展した時期である。窯の形態は、薪による有段連房式登窯から、石炭窯へと、多くの場合は、廃棄した窯を取りこわした後に新しい窯を築くため遺構は残りにくい。しかも、明治時代というとまだつい先日のような感覚があるため、窯体構造図面なども価値の無いものとして人知れず処分されてしまっている。さらに、近代の遺構は、窯業遺構にかかわらず、埋蔵文化財の認定を受けないため、遺構が遺存している場合においても、発掘調査されること無く湮滅した例も多いようである。このため、大きな節目であるにもかかわらず、この時期の時期判定の根拠は、不充分な点が多い。このような中で、従来、磁胎摺絵、コバルトの使用、銅版転写、正円子の使用などを近代と認める指標としてきた。しかし、近年、これらの通説を修正する必要を認める報告が発表されている。例えば、磁胎摺絵技法については、18世紀の伊万里系磁器製品に認められるのは周知のとおりであるが、その後は中断しており、明治7（1874）年佐賀県杵島郡小田志村の松尾喜三郎が再興[3]したと考えられてきた。一方、美濃では、明治15（1882）年頃岐阜県多治見市脇之島の上田幸右衛門らが[4]摺絵を始めたのが最初とされている。ところが、北海道檢山郡江差町の江差港内に、明治元（1868—慶応四）年11月沈没した幕府の洋式軍艦「開陽丸」[5]から、従来、近代と考えてきた磁胎摺絵製品が出土[6]している。コバルトの使用についても、瑞穂屋卯三郎が、パリ万国博から帰朝の際（慶応三・1867年）持ち帰り試し焼き[7]させたのがその初現といわれている。「開陽丸」から検出された磁胎摺絵資料がコバルトを用いたものであるか否か、生産地などについても、手にとって確認する必要のあるものの、写真、実測図から判断する限りでは、従来近代の製品と考えてきたものと認められるのである。

このように、近代初頭を示すものと考えている数々の指標についても、いまだ不充分な点が多くあり、正しい近世陶磁史の理解を深めるためにも、早急に近代初頭の陶磁についての調査を進める必要がある。

本稿をまとめるにあたり、藤島一巳氏より貴重な御教示を得たのでここに感謝の意を表するものである。

（注）

1 『日本やきもの集成 I 北海道東北関東』・平凡社・1981
2 尾崎喜左雄・「信沢の瀬戸場」『富士見村誌』・富士見村・1954
3 加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』・淡交社・1972
4 一ノ瀬武『美濃焼の歴史』
5 『開陽丸A地区総括報告書』・江差町教育委員会・1981
6 調査担当者の説明では、ヘドロと土砂に埋没した船体の一部を発掘しているので、沈没後新しい資料が混入することは考えられない。
7 （注3）に同じ。

（仲野　泰裕）

吹　屋　遺　跡

1　調査の経緯と調査過程

吹屋遺跡は昭和46・47年に関越自動車道の建設に伴い認知した日高遺跡（高崎市日高町）と中尾遺跡（高崎市中尾町）の約900m間に未認知遺跡であったのを認め調査に至ったものである。昭和46・47年度の認知の過程については元島名B遺跡本文P1を参照されたい。

その発見は、日高、中尾両遺跡の発掘調査中に周辺遺跡の踏査を行なった。その過程で、高崎市中尾町吹屋一帯の畑地が堀切状の水田により囲繞された城の郭状地形を呈することと、中世遺物の散布することなどに目をとめたことからはじまる。昭和52年5月のことであった。

このことは、すでに関越自動車道日高一中尾間の工事が発注済になり、土盛りなど実質的な工事施工が開始されているため、速やかに県教委文化財保護課対日本道路公団との間で協議する必要があった。県教委はこの事実を確認するため試掘計画をふまえて公団側に申し入れを行なった。そして6月1日より1週間の計画で直ちに試掘に入ることになった。

試掘案は両遺跡間で調査の必要な700mにトレンチを設定し、その担当として担当者数の多い日高遺跡から1名の担当者を出し、両遺跡から5～10人内外の作業従事者を挽出して、6日間で実施された。

試掘調査は6月25日に周辺水田に引水されるため早急を要していた。調査は重機と人力とを併用しトレンチ排土を行い、調査杭設定、平・断面図の作成などは測量業者委託によった。試掘範囲は、南接する日高遺跡北端から国道18号線前橋・高崎間バイパスの南接部分まで総長約700m、45,000㎡を対象とした。

この結果、堀切り跡と見られた帯状水田2個所は確かに堀切り遺構（SD10・20）であり、その間に挟まれた高燥地の畑地中には掘立遺構が検出され、北方低地水田地帯中には、浅間山給源によるB軽石下に水田畦を認め、さらに下層には日高遺跡の弥生水田面上で見た浅間山給源のC軽石層が黒色泥質土上に堆積しているのを確認した。要するに、複合的な時代にわたって、遺構の存在が確認でき、本格調査の必要性があった。

この試掘結果をふまえた県教育委員会文化財保護課は道路公団に本調査の必要性を申し入れ、6月10日に県教委、公団、工事施工を行う企業体の3者からなる調査会議がもたれた。

その内容は本調査と工事予定とのかね合いに終始した。工事は側道、土盛り、カルバートなどがすでに着手されており、調査実施については土盛りの除去をはじめとして工事中止を申し入れなければならず、協議は難行を極めた。県教委は工事計画で延期可能な個所と急を要する個所とを分けた段階的な工事予定表を道路公団側に求めた。提出された工事予定表はカルバート部分、側道部分が急を要していたが、その部分を優先的に実施すれば都合3ヶ月間の調査期間を見込むことができた。このため県教委としては、遺構の検出状況に応じて再度、申し入れを行うこともあり得ることを前提に、その計画案に基づく調査の実施を了承した。

これを受けた県教育委員会文化財保護課は体制および組織として、この事態に可動、可能な日高、中尾遺跡のうち担当者数の多い日高遺跡から1名の担当者と作業従事者を分担して実施するはこびとなったのであった。調査は遺構中枢部を極めるため再三工事延期を求め、10月29日に終了した。

2 遺跡の立地

吹屋遺跡は群馬県高崎市中尾町に所在している。標高は105m内外の地帯で、勾配は緩慢としている。

この地域は県中央部にある榛名山から扇の骨状にのびる舌状の台地が、やがて関東平野に移ろうとする地域である。台地と言っても洪積世以降の浸蝕によって網状化した断続的高まりである。多少高い土地は桑園、畑地、宅地となり、いく分低い土地が水田地帯となっている。このため、低地が生産基盤の水田となり、高所に村落のまとまりがある。しかしこの周辺は前橋、高崎市間に挟まれた地帯のため宅地化が進み旧態が崩れようとしている。

遺跡地は、台地上を主体とし東の路線外に日高遺跡側から延びる水田地帯が東接し、その水田地帯は、吹屋遺跡の北側までおよんでいる。

3 調査方法

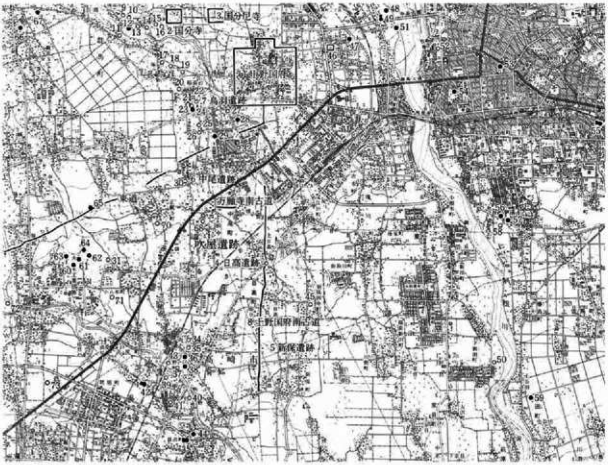
調査区の設定は、吹屋遺跡調査前から実施され、南接する日高遺跡座標を延長して使用した。日高遺跡座標は4mのグリッドを用い東西にABCを配し、南北に数字をあてはめて呼称している。送りは、南から北へ、西から東にしたがい番号が若くなるため、グリッド呼称点は南西隅にある。

杭設定は開放トラバースで関越道中心杭の一部に日高遺跡グリッドを盛り込んであるため国家座標に置き替えることも可能である。

水準は関越道中心杭にある標高値の引照である。

写真は6×9cm判を白黒で、35mm判を白黒、スライドで撮影している。

調査は45,000㎡を対象にし、50m方眼毎に東西トレンチを入れ、南北トレンチは、遺跡対象地に2本



第32図　吹屋遺跡周辺遺跡　1:50000（国土地理院「前橋」1:25000を縮少）（遺跡位置は注27を基として作成した）

入るよう配慮した。拡張法は、トレンチをそのまま広げるトレンチ拡張法と、トレンチを数多く入れるトレンチ法の両者を併用した。

4　標　準　層　位

吹屋遺跡の標準土層は遺跡全域を通じると数個所にユニット的に全層を抽出しうる壁面があるので2E208の壁面を第33図に示し標準土層とした。

Ⅰ層　耕作土・表土で黒褐色を呈す。浅間山給源のA軽石層（天明3年　1783）を含むと考えられるが順堆積層は存在しない。

Ⅱ層　軽石粒を多く含み黒褐色を呈す。軽石は浅間山給源のB軽石（12世紀初頭頃）。

Ⅲ層　浅間山給源によるB軽石層。順堆積層。

Ⅳ層　黒褐色粘性土層。B軽石の直下に多く見られる有機質の黒色土。

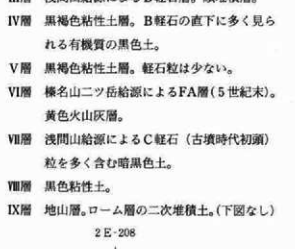
Ⅴ層　黒褐色粘性土層。軽石粒は少ない。

Ⅵ層　榛名山二ツ岳給源によるFA層（5世紀末）。黄色火山灰層。

Ⅶ層　浅間山給源によるC軽石（古墳時代初頭）粒を多く含む暗黒色土。

Ⅷ層　黒色粘性土。

Ⅸ層　地山層。ローム層の二次堆積土。（下図なし）



第33図　標準土層図　1：40

5　周　辺　環　境

遺跡環境は、考古学的環境と古環境をあつかい、前半を考古学的な周辺環境について、後半を古環境について見たい。

(1)　考古学的環境（第32図）

1　縄文時代

吹屋遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、北方地域に多く土器散布が見られ、染谷川、牛池川、八幡川の左、右岸ぞいに分布（第32図）があるが県内丘陵地帯ほど顕著でない。時期は中期が主体を占め、後期が若干採集されている。7の関越道鳥羽遺跡[1]では土坑などに伴い勝坂、加曽利EⅢ式に比定される土器群が出土している。現在、県内における縄文時代の集落、住居跡は、発達した台地上、丘陵地帯の調査例が多く、吹屋遺跡周辺のように低地に隣接した地域での調査例は少ない。このため、低地隣接地域の利用形態が当時いかようなものであったのか今後検討が要されよう。

2　弥生時代

群馬県の弥生時代について特異な現象がある。古墳時代初頭に浅間山給源とするC軽石の堆積があり、直下から壮大な広がりをもって水田跡が調査されている。それは火山県群馬の遺跡の特質であり、このため集落跡、墓跡など合せた、生活のサイクルが一元的に把握される条件下にある。吹屋遺跡周辺で弥生式土器の初見は中期にあり、その段階に高崎市竜見町遺跡[2]、競馬場遺跡[3]、新保遺跡[4]などが比較的近接地域にある。後期では高崎市日高遺跡（4）、新保遺跡[4]（45）、正観寺遺跡[6]（70）、元島名遺跡[8]、鈴の宮遺跡[9]などがあり、住居跡が調査されている。墓跡は日高、新保、元島名、鈴の宮遺跡に方形周溝墓が、日高、新保遺跡に土器使用棺による墓跡が調査されている。生産遺跡では日高、新保、熊野堂[10](72)、小

八木[61]、芦田貝戸[62]、御布呂[64]遺跡などから、先のC軽石に埋れた水田跡が調査されている。C軽石の降下は古墳時代初頭と考えられるため、降下以前に水田が存在したことになる。このうち日高遺跡のように形態上、遺存上、弥生時代水田とされた例もあるが、他例は遺構自体に不確定要素があったり、検討が充足されていなかったり、いずれにしても報告書による年代所見の明確な表示が望まれる。

3 古墳時代

古墳時代の集落について石田川期と和泉期との間に不連続が明瞭で南関東の在り方とほぼ同じ様相下にある。和泉期から国分期に至る間は連続性が認められ南関東の様相と、若干異なる点があり、このため土器形式上の区分のむずかしさが現況の課題となっている。

石田川期の土器を伴う散布地は多少認められるが、和泉期の土器の散布は数例で分布性が極端に薄い。鬼高期の初頭にかけては、三ツ寺[19]遺跡と有機的な関連のある保渡田の前方後円墳群、あるいは三ツ寺遺跡、総社古墳群の王山古墳[39]（49）が近接し、鬼高期形成の向上の一過程が窺える。鬼高期の分布は顕著で、山王廟寺遺跡[67]、高崎市芦田貝戸遺跡、正観寺遺跡(70)、群馬町保渡田遺跡[68]などで住居跡あるいは土器の出土がある。また鬼高期には榛名山二ツ岳を給源に2回にわたる火山灰が東麓に堆積し、さらに火山灰層が土石流、泥流となり、それは降下以上の堆積として南東麓に顕著な堆積を占める。これらの火山灰層下から壮大な規模で水田跡が検出され、古い方の火山灰層下では新保遺跡(45)、同道遺跡、熊野堂遺跡(72)、芦田貝戸遺跡があり、新しい方の火山灰層下には宮田[69]遺跡、同道遺跡、御布呂遺跡がある。これらは火山灰により同一文化層把握が広域になされうる背景を持っている。そのため水田の形態分類による水田遺跡相互の質差の分析と集落、墳墓域の対比がなされることにより、最も質の高い地域文化の復元ができるはずである。

4 奈良時代

奈良時代は、地域事情、国策などに応じ、寺院建築や、律令制機構の要となる国府の設置、税制の根本となる土地制度つまり条里制の施行が実施され、前代にない遺構形態が出現する。周辺地域も氏寺として山王廃寺が建立され、吹屋遺跡の北東約2kmには上野国府推定地[71]（1）が、北方約2kmには上野国分二寺跡（2・3）が存在する。また、それら隣接地には真間期の集落が多くの場合に存在する。

5 平安時代

吹屋遺跡周辺の低台地上には、ほとんどと言って良いほど国分期の集落が存在し、前代の土器文化から比較すれば、最も顕著な量をもって存在する時代である。

また、浅間山給源によるB軽石が考古学的には12世紀初頭に堆積したとされ、それに埋没された水田に日高遺跡（4）、大八木遺跡（73）、御布呂遺跡、寺の内遺跡[27]、同道遺跡、芦田貝戸遺跡、正観寺遺跡(70)、小八木遺跡などがある。なおこのB軽石については『中右記』などによる天仁元年（1108）の降下説が文献解釈上から有力視されている。

6 中世

中世は地域支配の形態が鎌倉幕府に付随した御家人領、前代からの荘、御厨あるいは各社寺領などが混在し、室町時代に至っては守護領国の細分化などによって複雑な土地支配となっていた。

吹屋遺跡の存在する地域は中世に青木[24]荘であったとされるが明確な原典がなくそれ以前はさらに明瞭でない、おそらく、中世全般を通じ明瞭でないのは国府がこの地域に存在していたことや、国府の地が後の蒼海[25]域となり、この周辺にある中尾城、総社城などと共に重なる戦乱の禍にあったために、地域支配の形が永く定まらなかったことも考えられる。

B軽石の降下に先だち竪穴住居は消え、平地面上に居住したと考えられるが県内で12、13世紀の建物跡は明確でない。平安時代末期には在家の一部は広

番号	名　　称	種　別	時　代
1	上野国府跡・(蓄陶城址)	官衙・城郭	奈良・中世
2	国分寺跡	寺院・城郭	〃
3	国分尼寺跡	〃	〃
4	日高遺跡	水田址	弥生・平安
5	新保遺跡	住居・墓・官衙	弥生～平安
6	中尾遺跡・(中尾城址)	住居跡・城郭	古墳～中世
7	鳥羽遺跡・(中尾城址)	住居・生産	奈良～平安
8	上野国府南古道	古道	平安
9		包蔵地	縄文・古墳・奈良
10		〃	古墳
11		〃	縄文
12		〃・墳墓	古墳・奈良
13		包蔵地	縄文・古墳・奈良
14		〃	縄文
15		〃	古墳
16		〃	〃
17	上野国分寺跡（塔跡）	〃	古墳・奈良・平安
18	国分寺参道	〃	〃
19	国分寺参道	〃	奈良
20		〃	古墳・奈良・平安
21		〃	古墳
22		〃	奈良
23		〃	古墳
24		包蔵地・墳墓	奈良
25		包蔵地	古墳
26		〃	古墳・奈良・平安
27		〃	弥生
28	弥勒山	墳墓	古墳
29		〃	鎌倉
30	菅谷遺跡	包蔵地	弥生
31	権現塚遺跡	〃	古墳
32		〃	〃
33	山貝戸遺跡	包蔵地・集落跡・住居跡	弥生・古墳
34	与五右衛門屋敷跡	城館跡	安土・桃山
35	新井若狭屋敷跡	〃	〃
36		墳墓	古墳
37	井野岡貝戸遺跡	住居跡	〃
38		墳墓	〃
39		包蔵地	弥生
40	井野天神遺跡	〃・祭祀跡	縄文・弥生・古墳
41		包蔵地	縄文
42	天王山古墳	墳墓	古墳
43		包蔵地	〃
44	五霊神社古墳	墳墓	〃
45	新保遺跡	包蔵地・集落跡・住居跡	弥生・古墳
46		包蔵地	古墳
47	長尾氏遺跡	墳墓	室町
48	王山群塚墓二	〃	古墳
49	王山古墳	〃	〃
50	下新田遺跡	住居跡	奈良
51	王山群塚墓一	古墳	古墳
52	前橋城址	城址	江戸
53	八幡神社古墳	古墳	古墳
54	観梅院裏古墳	〃	〃
55	不二山古墳	〃	〃
56		〃	〃
57		〃	〃
58	京安寺遺跡	寺院	平安
59	下川渕3号墳	墳墓	古墳
60	清水944古墳	〃	〃
61	清水943古墳	〃	〃
62	オトウカ山古墳	〃	〃
63	清水古墳	〃	〃
64	ボンボン塚古墳	〃	〃
65	菅谷古墳群	〃	〃
66		〃	〃
67	薬師さま	〃	〃
68		包蔵地	〃
69	東道	古道	古代～現代
70	正願寺遺跡	水田址	古墳
71	小八木遺跡	〃	古墳～平安
72	熊野堂遺跡	集落・水田址	弥生～中世
73	大八木遺跡	水田址	平安

第10表　周辺遺跡一覧　　注27を基として作成

場的空間を置いた主屋を中心に厨屋、納屋、井戸などを分立して配した形態で浸透していたと思われる。この形態は後に館として一般的になり郷村成立の核となったと考えられている。中世の郷村の形態は在家を核とし従属した人々、分家した宅地を配して構成されたと考えられ、それが環濠を形成してゆくようである。吹屋遺跡周辺では前橋市鳥羽町南城、高崎市日高町、中尾町、新保町、正観寺町などに環濠集落が見られる。

(2) 古　地　形

吹屋遺跡は高崎市中尾町にあり、立地は前橋台地の形成の縁辺にあたる。水田地帯となる低地帯は日高沖積谷と称された谷地形の最深部右岸に相当している。前橋台地は約25,000年ほど前に榛名山東麓から麓端に広がる相馬ヶ原扇状地形上に集塊質凝灰岩や凝灰角礫岩などからなる前橋泥流層の堆積によって、母胎形成された台地をさしている。この前橋泥流層をはさんで上、下層に前橋第1・2礫層があり、また第2礫層下に YP 層（板鼻黄色軽石層）などが

日高遺跡の調査所見から得られている。さらに日高遺跡では前橋泥流層の第2礫層や板鼻黄色軽石層上にシルト質の相馬ヶ原新期扇状地層が堆積しており、この新期扇状地層はシルト扇状地ともよぶべき特異な様相を呈し、従来の扇状地形成論では成立しないとされ、台地形成と谷地形成とが同時になされることの矛盾が[20]問われている。

この日高遺跡での所見を基に吹屋遺跡の井戸跡などの断面から見れば、黒色土を除いて、地表下約1.5mまでの間にシルト質土ないし、砂質土があり、相馬ヶ原新期扇状地土層と考えられ、その下方にやや礫を含む、前橋泥流層に相当すると考えられる層が20cmほど堆積している。

(3) 古　植　生

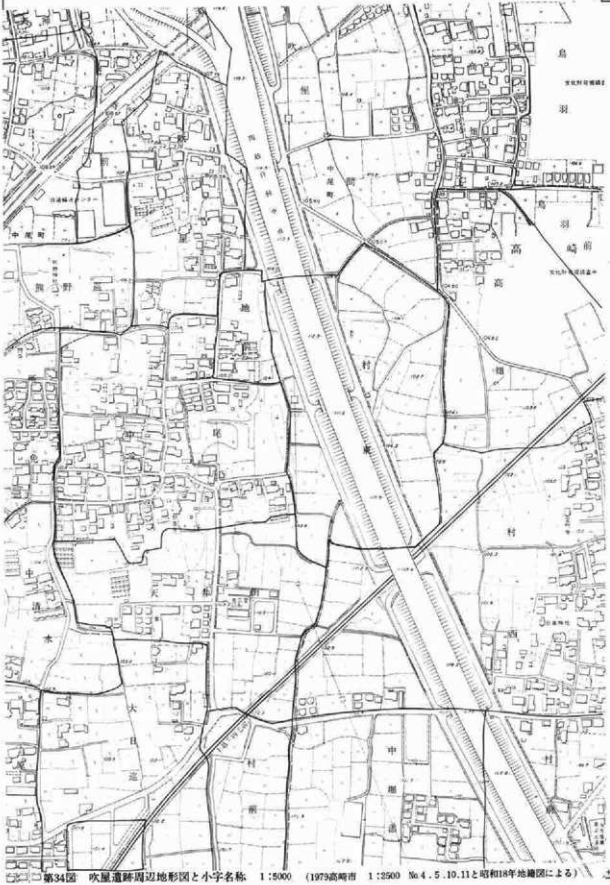
主体資料は花粉分析によるもので、近接地域の試料の掲示例に小八木遺跡、御布呂遺跡、芦田貝戸遺跡がある。現地形では3遺跡ともに標高100～110mにあり、吹屋遺跡とほぼ同じ標高にあり、隣接距離も最大2.5kmの位置である。古地形は相馬ヶ原新期扇状地形上にあり、当時もほぼ類似の環境にあったろうと考えられる。ここでは御布呂[18]、芦田貝戸[19]遺跡の成果に基づいて下記に若干の古植生を一覧した。

これらの試料はいずれも水田面からの試料のため、イネ科植物やオモダカ、ガマなどの水辺の植物類の花粉化石が含まれている。また現在などでもヨモギ属などは畦などで良く見かけ、畦地植物とされよう。気になるのは、水田雑草や水草よりも周囲の樹木群にあると思われる。B軽石下では、広葉樹林のほかにスギ、ツガ、マツ属などがあり、FPF－1下では先のFA層の堆積に伴い荒廃していたと考えがちだがスギ、マツ属などの針葉樹系が見られる。クリ、クマシデ属など広葉樹系があるのは良いであろう。FA直下では針葉樹系がやや少ない傾向にあり、広葉樹系の今でいう雑木林になっていたようである。C軽石下も、広葉樹林が発達していたようである。このように見ると、吹屋遺跡周辺では長きにわたり広葉樹林系の樹木が多く育成していたと考えられる。ここでことわっておかなければならないのは、水田土壌中の試料は、水田水系によって上流や水源地から運ばれる可能性を持っており、水田を除外した地区の試料が必要となろう。

	B軽石下	FPF－1火山灰下	FA 火 山 灰 下	C 軽 石
御布呂	ヨモギ属を優先とする草地で周囲にコナラ亜属、マツ属などがわずかに育成する。(温帯)	イネ科を主とし、キク亜科、ヨモギ属からなる草地。シダ類はFA下より少ない。近くにスギ、マツ、クリ、クマシデ属などの樹林からなる林地が推定。(温帯)	イネ科を主とし、ヨモギ属、スゲ科などの草地類が繁茂していた。水草にオモダカ類がある。周囲はコナラ属を主とする林地で針葉樹はC下より少ない。	イネ科を主とし、スゲ科、ヨモギ属などの草本からなる草地。ガマ類が検出され、水田耕作の証しか。コナラ亜属、ハンノキ、シラカバ、クマシデ、ケヤキ、ツガ属などの広葉樹林地。
芦田貝戸	イネスゲ科、ヨモギ属を主とする草地で、スギ、ツガ属などが周囲に育成。(温帯)	ヨモギ属が多い草地で、わずかに広葉樹がある。	イネ科が多くヨモギ属の多い草地であり、コナラ、シラカンバ、ハシバミ、ブナ属などの広葉樹が周囲にあり、モミ、ツガ属などの針葉樹がわずかに育成。	ヨモギ属、イネ科、キク亜科、シダ類などが育成する草地、周囲はコナラ亜属を中心とする広葉樹が育成。

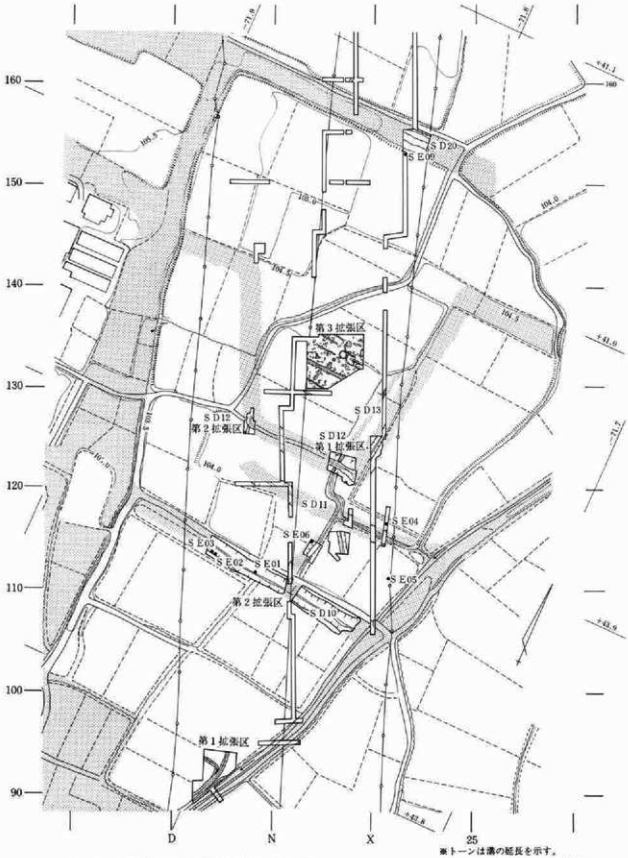
第11表　周辺遺跡の花粉分析　　注12・14を要約

(1) 谷藤保彦「各時代の遺跡分布—縄文時代」『月報鳥羽遺跡№13』1980
(2) 杉原荘介「竜見町式土器について」『考古学10巻10号』（東京考古学会）1939
(3) (2)に同じ
(4) 佐藤明人・真下高幸・平野進一・大江正行「群馬県高崎新保遺跡の調査」『考古学ジャーナル』1978
(5) 平野進一・大江正行・中沢悟「群馬県高崎市日高遺跡の調査」『考古学ジャーナル№152』1978
(6) 『正眼寺遺跡Ⅰ』（高崎市教育委員会）1979
『正眼寺遺跡群』（高崎市教育委員会）1980
(7) 『引間遺跡』（高崎市教育委員会）1979
(8) 『元島名遺跡』（高崎市教育委員会）1979
(9) 『鈴ノ宮遺跡』（高崎市教育委員会）1978
(10) 細野雅男「高崎市熊野堂遺跡の水田址」『月刊文化財』1978
(11) 『小八木遺跡発掘調査報告（Ⅰ）』（高崎市教育委員会）1979
『小八木遺跡（Ⅱ）』（高崎市教育委員会）1980
(12) 『芦田貝戸遺跡』（高崎市教育委員会）1979
『芦田貝戸遺跡Ⅱ』（高崎市教育委員会）1980
(13) 『矢島遺跡・御布呂遺跡』（高崎市教育委員会）1979
(14) 『御布呂遺跡』（高崎市教育委員会）1980
(15) 『三ツ寺遺跡現地説明会資料』（財群馬県埋蔵文化財調査事業団）1981
(16) 中村喜夫「王山古墳」『群馬総社古墳群』（財観光資源保護財団）1977
(17) 『山王廃寺跡第3次発掘調査概報』（前橋市教育委員会）1977
(18) 井上唯雄・都丸肇「保渡田遺跡」『考古学ジャーナル№157』1979
(19) 山本良知「宮田畦畔遺構調査概報」『時報第25号』（群馬大学史学会）1961
(20) 外山和夫「第1部　発掘と調査」『日本考古学年報』1980
能登健・石坂茂「岡道遺跡」『発掘された古代の水田』（群馬県立歴史博物館）1980
(21) 川原嘉久治「上野国府書誌」『月報鳥羽遺跡№16』1981
(22) 『寺ノ内遺跡』（高崎市教育委員会）1979
(23) この論証を進めたのは石川正之助が「22地区」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報1』1973において である。
(24) 群馬郡『上野国郡村誌1』太政官の「皇国地誌編纂例則」（明治八年六月五日達）により編集され内務省地理局に提示された稿本
(25) 山崎一『群馬県古城屋址の研究　上巻』1971
(26) 沢口宏「日高遺跡の地形環境」『日高遺跡Ⅰ』（高崎市教育委員会）1979
(27) （群馬県教育委員会）『群馬県遺跡台帳』1973

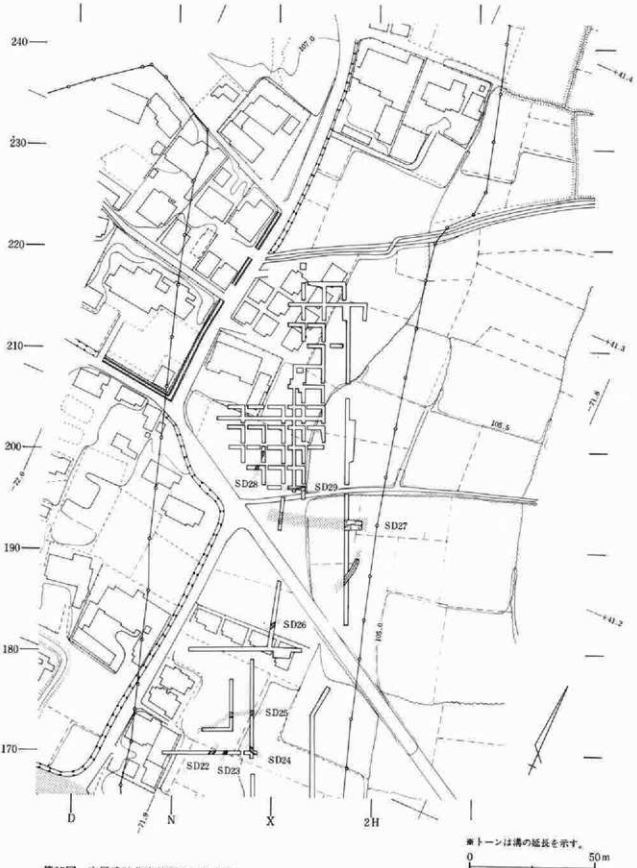


第34図　吹屋遺跡周辺地形図と小字名称　1:5000　(1979高崎市　1:2500　No.4.5.10.11と昭和18年地籍図による)

第35図　調査区設定図　1：2500



第36図　吹屋遺跡南半部調査区設定図　1：1500



第37図　吹屋遺跡北半部調査区設定図　1：1500

6　検出した遺構と遺物

(1)　第 1 拡 張 区 (第39図・写真25・26)

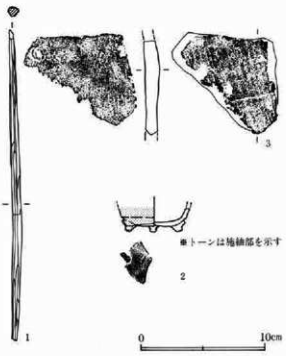
第1拡張区F～J－88～93区に位置する。調査前は畑地であり、南東側には水路が存在していた。調査は、表土剝ぎを重機を用いて行ない、標高約102.8m前後から人力によって排土した。

遺構は、9条の溝状遺構を主とするもので、掘立柱穴など、他遺構を見ることはできなかった。この溝状遺構の新・古の関係では、発見レベルが、SD01が最も高く、SD06が最低レベルで検出されている。重複順では、切り合い関係からSD01がSD03を切っており、さらにSD01がSD02を切っていた。またSD06を切って存在した。この関係は発見レベルの所見と共通する。これら溝状遺構の規模は下記のとおりである。

SD01	最大幅	1.6 m	深さ	1.28m
SD02	最大幅	0.8 m	深さ	0.32m
SD03	最大幅	1.15m	深さ	0.32m
SD04	最大幅	0.19m	深さ	0.2 m
SD05	最大幅	0.88m	深さ	0.28m
SD06	最大幅	1.77m	深さ	1.76m
SD07	最大幅	0.8 m	深さ	0.3 m
SD08	最大幅	0.76m	深さ	0.92m
SD09	最大幅	1.44m	深さ	1.36m

各溝の埋没状況は、SD05・SD06・SD09の埋土の一部に地山の黄灰色ブロックを含んでおり、人為埋没の可能性がある。特にSD06は埋土の中半以上が地山ブロックを含んでいた。

出土遺物は少量で下表のとおりである。



第38図　第1拡張区出土遺物　　1：3

図・写真No.	土器・器種(器種)	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	概　要
1	木製品(箸)	SD06底面直上	長25.0cm 最大幅 0.6cm	材質は広葉樹である。	外面は成形時の面ごしらえがあり、小刀によると思われる。形としては両端部まで遺存するが片側は欠くれだっている。	
2	施釉陶器(香炉)	I－92中世面に近接 SD01覆土	底径3.5cm 器高 18＋αcm	灰雑鉱物粒なし。硬質。釉淡緑色。	底部に轆轤による糸切り痕あり。底部際に脚が付く。底部と外面の底面際および内面に施釉なし。釉調は灰釉で淡緑色をおびる。内・外面に轆轤目あり。内面に横撫である。	瀬戸焼。
3	焼締陶器(甕)	耕作土	体部片	白色鉱物粒多い。赤褐色。焼締。	内面に粘土紐作り痕と指などによる圧痕あり。内・外面に指などによる圧痕あり。	常滑焼か。

第12表　第1拡張区出土遺物一覧

吹屋遺跡

① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。上面はやや酸化気味。
③ 砂質の黒褐色土。
④ 砂質の黒褐色土。
⑤ 砂質の黒褐色土。
⑥ 砂質の黒灰色土。
⑦ 粘性の黒褐色土。地山ブロック含む。

① 黒灰色地山ブロックを多く含むシルト質の黄灰色土。
② シルト質地山ブロックを主とする黄灰色土。
③ 粘性の暗褐色土と砂質土が互層をなす。
④ 砂質の黒褐色。

① 砂質の黒褐色土。
② 地山のシルト質黄灰色ブロックを多くまじえる砂質の黒褐色土。
③ 砂質の黒褐色土。

① 耕作土。
② 砂質の黒褐色土。
③ 砂質の黒褐色土。
④ 地山のシルト質黄灰色ブロックを多く含む黒褐色砂質土。
⑤ 地山のシルト質黄灰色ブロックを主とする層。
⑥ 黒褐色粘性土と砂質土が互層をなす。

上図番号は第83図に同じ

第39図　第1拡張区実測図　1：160

(2) 第 2 拡張区（第41図・写真28）

第2拡張区はF～V－105～115区に位置する。この拡張区は吹屋遺跡を調査の必要性ありと認めた外観上からも明らかな堀切状の凹みを呈した場所である。調査前は周辺の桑園よりも一段下り、水田となっていた。調査は堀切状の凹みにしたがって、埋没土の4分3以上を重機で除去し、以下を人力排土した。東西に長い調査区の中ほどに土層観察用のセクションベルトを置いた。

遺構はSD10とした堀切遺構とSE01～03までの3基の井戸遺構がある。新旧関係と発見面レベルは、SD10の埋没土よりも井戸遺構の方が古く、SD10の埋没土除去後に3基の井戸遺構を検出している。これらの遺構規模は下記のとおりである。

SD10	最大幅　5.45m	深さ1.56m
SE01	直径0.9 m(最大幅0.96m)	深さ1.39m
SE02	直径1.03m(最大幅1.51m)	深さ1.27m
SE03	直径0.84m(最大幅1.39m)	深さ1.12m

SD10（第41図、写真29）

SD10は、およそN84°40′Wの走行がある。調査区の中央にもうけられた土層断面によれば、数次の掘り直しが認められ、特にO－109以東では石垣積による現水路が、SD10と軸を一にしてもうけられていた。埋没土は現、近代陶磁類の細片を含んでおり、O－109以東では溝底面のほとんどが、近世遺物を混える埋土に接していた。したがってO－109以東の溝底に掘られた小溝の多くは近世に構築されたと見られる。O－109以西の埋没土状況を第85図上に従って説明すれば、⑤が近世磁器を含んでおり⑥・⑦・⑧がそれ以前の堆積と見られるものの出土遺物はなかった。土層の質感からすれば中世的であった。このうち⑦の除去中に3基の井戸の検出があった。SD10の北側にそって幅約1mで犬走り状の平坦部が接走し、しかもその上面の覆土は極めて硬く締っていた。その上面、約1mの間層を置いて現農道が直上を同じ位置に通る。

SE01（第40図、写真30）

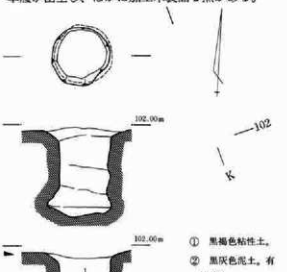
SE01はK－102に位置する。井筒部は直筒的で底面にあぐりがある。埋没土は大きく3層に分離でき、③に砂質土が入り、最上層の①は泥土質であった。出土遺物は無かったが、③中に有機物がわずかに入っていた。

SE02（第42・43図、写真31）

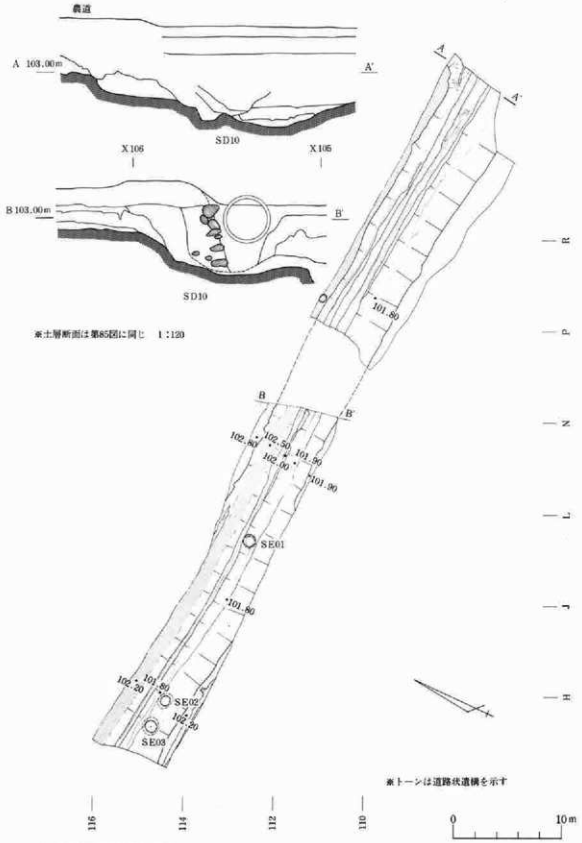
SE02は他の2基の井戸跡と同様に、SD10の最下層に構築されていた。井戸の形態は直筒的であり底面は平らである。井筒部中途の2個所にあぐりが見られる。埋土は上面の①・②中に地山ブロックが多く含まれ、埋土に際し人為埋没した可能性がある。出土遺物として、中程から漆塗小皿の出土がある。

SE03（第44・45図、写真32）

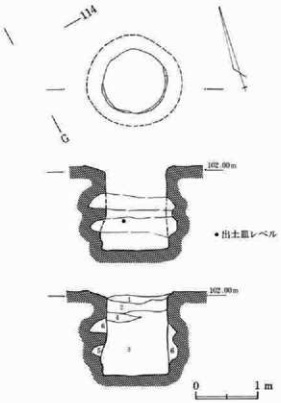
SE03の井戸形態は、直筒的な形態であったことが土層断面の⑤の酸化層部分から、さらに①は地山ブロックをまじえているため、埋没に際し人為的に埋填した可能性がある。出土遺物として、中位から板草履が出土し、ほかに加工木製品2点がある。



第40図　SE01実測図　1：60



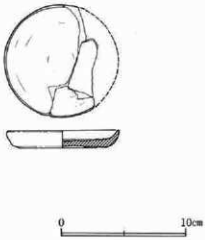
第41図　第2拡張区実測図　1:333



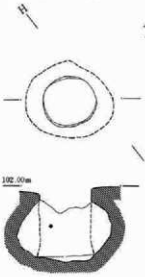
第42図　SE02実測図　1：60

① 地山ブロックを主とする。
② 黒褐色砂質土、同色泥土中に地山ブロックを含む。
③ 有機物を多く含む黒褐色泥土。
④ 砂質土。
⑤ 酸化気味の井筒部分の板跡。
⑥ 地山と泥土との互層。
■ ①②は地山ブロックを含むため人為堆積か。

遺物観察はP89にあり

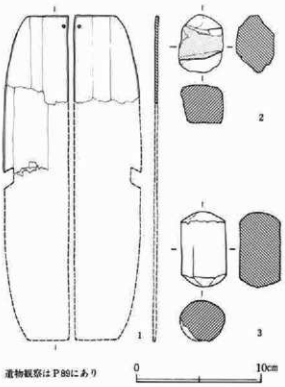


第43図　SE02出土遺物　1：3



① 黒褐色砂質土、と同色泥土を主とする。
② 黒褐色砂質土。
③ 黒褐色砂質土と同泥土で①より砂質。
■①～③木・草本の有機物繊維を多くまじえるため自然堆積か、地山ブロックの混入も少ない。
④ 崩落土で黒色粘性土が互層をなす。
⑤ 酸化気味となり井筒を示す。
◣ 井戸跡発見面レベル。
● No.1出土レベル

第44図　SE03実測図　1：60



遺物観察はP89にあり

第45図　SE03出土遺物　1：3

(3) 第 3 拡 張 区 (第46図・写真34)

第3拡張区Q～V－129～134区に位置する。拡張の目的は100～140区間の館状遺構の南北辺・東西辺の中心地区であること。東方に設定したYライントレンチ135～137間に（第36図1）に掘立遺構が検出されたことなどからこの地区に館状遺構の中枢部が想定されたための拡張であった。なお約40,000㎡におよぶ吹屋遺跡の随所に設定したトレンチ内で検出された掘立遺構はYライントレンチ135～137間に限られる。

調査前の状況はW－133からT－130以南東側に水田があり、その他が畑地となっていた。

排土は重機を用いて検出面上約10cmまで除去し、以下、手掘とした。第46図は最終掘り上げ状況を図示したものである。10cm間隔で示した等高線の流れは南北に高く、東西に低い地勢を示している。拡張区東側にはSXとした不整形の竪穴状遺構が5個所にあり、SEとした井戸跡が2個所に近接する。掘立遺構は無数に広がりつつも、高所に集密する傾向にあった。掘立のまとまりについては、柱穴の形態の一致、柱間の共通性を規準にしたが結局は柵列としての把握にとどまった。現地で確認し得た結果は柵列はSA01～08までの8列であった。SDとした溝状遺構はSD28～34の7条が認められ、特に東西走行が多かった。SKとした土坑はSK01・02が存在した。

これら遺構の重複および、新・古の関係は直接重複が少なく、余り明瞭でないが、中世面の検出がなされたことから、総体傾向をつかむことができた。SX群と柱穴群は、発見面に若干の重複がありSX01の構築前か構築時に掘立柱穴が設けられ、それ以降も掘立が構築された。それは第46図のとおりである。SX02・03内柱穴はSX02・03の構築以前か構築時である。埋没土上面から掘り込んだ柱穴は発見できなかった。このことから掘立の一部はSX01など古い段階のSXに先行か並行して構築され、さらに掘立は、SX01の埋没後も構築され、さらに掘立が余り築かれなくなった段階にSX02・03などが設けられたと類推された。掘立柱穴と竪穴状遺構の構築は同時でなく、その構築が交互にくり返されたようで共に連続した時代性を物語るであろう。井戸跡と掘立群の関係はSE07の場合、第46図のとおり掘立が新しく、井戸が古い。SE08では、発見面上に柱穴が見られなかったが、柱穴群が薄くなる個所であるため、新・古の判断は難しい。溝と柱穴群との関連では、SD14を切る柱穴は数穴しかなく、この調査区の中で最も新しいと考えられた。このほか重複は、SD19がSD14に切られ、SK01がSD14に切られ、SD17がSK02によって切られている。SD16・17と柱穴群との関連では、柱穴群の方がSDを切って存在している。以上、重複と新・古の傾向をまとめると下記のとおりである。

新・古傾向

SX01→掘立群→SX02・03→掘立群

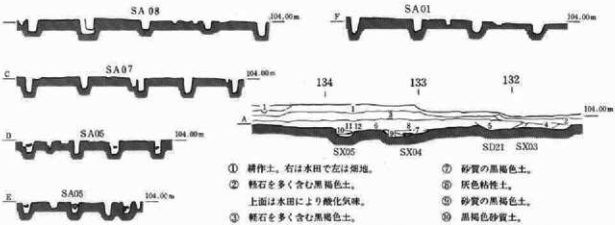
\SA02/　　\SD14/

\SE07/　　\SD19/　\SK01/

\SK02/　\SA07・08/

\SD17/

これらの遺構は、館状遺構の中に中枢的施設があったとするなら、柵列をもって中枢的な遺構とする訳にはゆかないであろう。しかしながら、他の柱穴群は当初のトレンチ135～137間に限られる。このため残された地域内に中枢的施設があると考えた場合、最も可能性の高いのが、この拡張区の北接地域であろう。北接地域は、水田化しこの拡張区より一段低い地勢となっている。そこに設定したトレンチでは、水田耕作による攪乱面下が、直接の地山層であった。このため第3拡張区の北接地域に中枢的施設があったとしても、水田開墾により平夷された可能性がある。



① 耕作土。右は水田で左は畑地。
② 粒石を多く含む黒褐色土。
上面は水田により酸化気味。
③ 粒石を多く含む黒褐色土。
④ 黒褐色泥土と黒褐色砂質土が混り合う。
⑤ 木炭粒を多く含む砂質の黒褐色土。
⑥ 木炭粒を含む砂質の黒褐色土。
⑦ 砂質の黒褐色土。
⑧ 灰色粘性土。
⑨ 砂質の黒褐色土。
⑩ 黒褐色砂質土。
⑪ 木炭粒を主体とする層。
⑫ 粘性の黒褐色土と砂質の黒褐色土。

第46図　第3拡張区実測図　1：160

柵列遺構（第46図）

SA01

SA01はU・V－134に位置する。規模は7.68＋αmの走長があり、東、西延長ともに未掘地に延びる。柱間は西より2.48m＋2.48m＋2.72mである。軸方向はN95°30′Wである。掘り方形態は隅丸方形である。

SA02

SA02はS・T－132・133に位置する。規模は9.28mの走長があり、4間を数える。柱間は西より2.4m＋2.24m＋2.24m＋2.4mである。軸方向はN96°30′Wである。掘り方の形態は柵軸に合せた隅丸方形である。重複はSE07より新しい。

SA03

SA03はS～U－131～132に位置する。規模は10.72mの走長があり、5間を数える。柱間は西より2.16m＋2.04m＋2.24m＋2.24m＋2.04mである。軸方向はN93°30′Wである。掘り方の形態は柵軸に合せた隅丸方形である。

SA04

SA04はR～T－130～131に位置する。規模は7.68＋αmの走長があり、4間を数えるが東延長は未掘地に入る。柱間は西より1.28m＋2.24m＋2.08m＋2.08mである。軸方向はN91°30′Wである。掘り方の形態は隅丸方形であるが柵軸は不一致である。

SA05

SA05はQ～S－131～134に位置する。平面形は直列柵でなく2個所、鉤状の曲りを呈す。規模は西北隅より1.12m＋0.88m＋2.24m＋0.48m＋1.28m＋1.76mである。総間数8間である。軸方向はN90～98°Wである。掘り方は柵軸に合せた隅丸方形で、掘り方中位に人頭大の扁平な川原石を据えている。（写真37）川原石を根固めに用いた建物跡としてまとめる努力はしたものの相対する柱穴が得られず柵跡と考えた。

SA06

SA06はQ～S－130～133に位置する。規模は8.64mの走長があり、柱間6間を数える。柱間は北より1.24m＋0.64m＋2.24m＋2.24m＋0.8m＋1.44mである。掘り方形態は柵に合せた隅丸方形である。軸方向はN8°30′Eである。掘り方規模は他のSAより小形である。重複はSD14よりも新しいことから第3拡張区の中では最も新しい柵列として推考される。SD14の埋土を切る柱穴は数穴しか確認されていない。

SA07

SA07はR～S－132～134に位置する。規模は8.64mの走長があり、4間を数える。柱間は北より2.08m＋2.24m＋2.08m＋2.24mである。軸方向はN6°30′Eである。掘り方の形態は軸に合せた隅丸方形である。重複はSD16よりも新しい。

SA08

SA08はR～S－132～134に位置し、SA07の西に並行する。規模は9.92mの走長があり、4間を数える。柱間は北より5.04m＋2.48m＋2.4mである。軸方向はN0°である。掘り方の形態は軸に合せた隅丸方形である。重複はSD17よりも新しい。

溝状遺構（第46図）

第3拡張区の溝状遺構はSD14が規模がやや大きく走長もあり、一定区画を画する機能を有していたと考えられ、他は小溝が主体を占めている。拡張区の北半に、SD16・17・18があり溝の終始がほぼ同じ位置にあり、規模、形態、掘り方なども近似するので、同じ機能の基に掘られたものであろう。

SD14（写真34）

SD14はQ～U－130～132に位置し、その延長と考えられる同規模の溝がY－128・129トレンチ内で、さらにP－133トレンチ内でも検出されている。規模は最大幅2.4m、下端幅0.8mである。軸方向はN84°Wである。溝底の傾きは東に低い。埋土は大きく2層に区分でき、上層は砂質土で、下層は地山ブロックを主体とし、人為埋土の可能性を示す。下層の最下位に木炭粒と灰を主とした間層がR－131・132に見られた。新古の関係では、埋土上面に重複していたのはSA06の1柱穴と、数穴であった。このことは、第3拡張区における中世遺構の中でSD14が最も新しい段階に相当していたことを物語るであろう。

SD15

SD15はQ・R－130に位置する。幅0.35mを計る。溝底の傾きは東走し、軸方向はN87°Wである。埋土は砂質土である。重複関係は1柱穴がSD15を切る。

SD16・17・18

SD16～18は拡張区の北半にあり、R～T－133～134に位置する。規模はSD16が総長3.2m、幅0.2m、軸方向N94°W、SD17が総長3.3m、幅0.25m、軸方向N92°W、SD18が総長3.95m、幅0.22m、軸方向N87°Wである。3例の掘り方は凹形を呈し、幅の割りに深く、しっかりしている。埋土は砂質土でなく粘性の黒褐色土でB軽石を主体とした砂質土と大きく異なり、古代の堆積である。方向性、規模、形態など同じ機能と考えられ、しいて云えば平安時代墳の畑跡の可能性も考える必要があろう。

SD19

SD19はR－130・131に位置する。規模は4.2＋αm幅0.3mで、軸方向N13°Eである。形態は断面形、凹状で浅い。埋土は砂質であった。重複はSD14に北側を切られていた。

SD21

SD21はU・V－132・133に位置する。規模は2.6m、深さ0.2mで、軸方向N97°Wを計る。形態は部分的に異なり、一率でない。埋土は地山ブロックを多く含み砂質であった。

機能不明遺構（第46図）

SK01・02

SK01・02は形態、埋土がともに近似するため、ほぼ同じ機能に基ずくものと考えられる。土坑は掘り方が不整形で、柱穴と区分しがたいものが相当数存在したが、まとめに相当な労力を要するため、本書に、記載はしなかった。なお、不整形土坑は、第3拡張区の東半に多い傾向がある。

SK01

SK01はS－131・132に位置している。規模は長さ4.3m、幅0.35mで、軸方向N7°Wを計る。掘り方は浅いが凹状に掘られている。埋土は砂質土である。重複はSD14によって切られている。

SK02

SK02はR・S－134に位置している。規模は長さ3.1＋αm、幅0.8mで、軸方向N18°Eを計る。北端が未掘地に入る。掘り方は深く、凹状に掘られ、立ち上りが部分的に内傾する。埋土は砂質土である。重複はSD17を切ってSK02が存在する。平面形態はSK01に近似している。

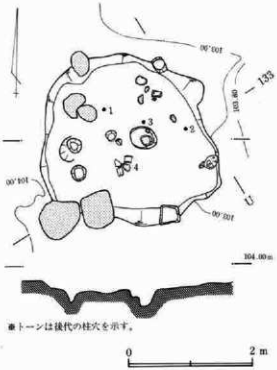
吹 屋 遺 跡

SX01（第47図、写真39）

SXはT－132～133に位置している。第３拡張区の中央部である。竪穴状遺構群のうち最西の高所にある。発見面は、標高106.40m前後で、中世的な砂質土層が全体を覆っていた。さらに精査の結果、SX01埋没後に５穴の柱穴が切っていることが判明した。第47図のとおりである。

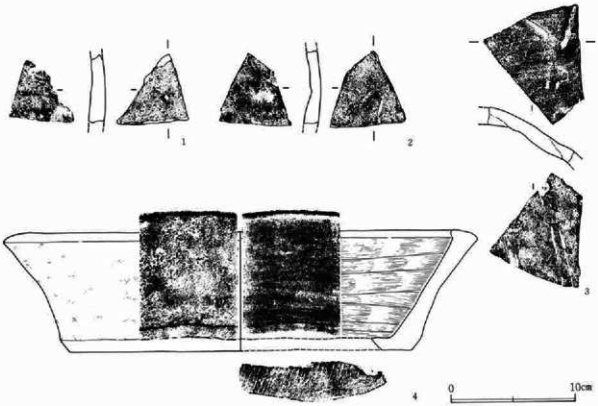
調査の結果、平面形の最大長3.15mで、深さ0.21mの規模を持つ不整形な平面であった。立ち上りは南辺でほとんど段差がなく、西側部で明瞭であった。立ち上りは余り急でない。底面は、若干の凹凸があり必ずしも平坦でなく、硬い床面状でもなかった。柱穴は底面に５個所あり、立ち上り部に２個所あった。いずれも、SX01に伴うか、それ以前に存在したものである。

出土遺物は第48図が、ほぼ底面に接して存在し、このほか拳大の川原石が、４点出土している。遺物の出土状態は、散在的であったが、川原石の出土はある程度のまとまりがあった。



※トーンは後代の柱穴を示す。

第47図　SX01実測図　1：60



第48図　SX01出土遺物　　1：3

図・写真No.	土器種（器種）	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘　要
1	焼締陶器（甕）	底面直上	体部小片	白色鉱物粒多い。褐灰色。	内面に成形時の指などの圧痕あり。割れ口に粘土紐作り痕あり。内面に指などによる横撫で痕あり。外面に板状工具による櫛目条痕あり。	常滑焼。
2	焼締陶器（甕）	底面直上	体部小片	白色鉱物粒を含む。褐灰色。	内面に成形時の指などの圧痕あり。割れ口に粘土紐作り痕あり。内面に指などによる横撫で痕あり。外面に板状工具の圧痕あり。	常滑焼。
3	焼締陶器（甕）	底面直上	体部片	夾雑鉱物粒を含む。赤褐色。	内面に成形時の指などの圧痕あり。内面に粘土紐作り痕あり。内面に指などによる撫で痕あり。外面に板状工具による櫛目条痕あり。	常滑焼。
4	軟質陶器（盤）	底面直上	口径38.4cm 器高9.61cm	砂を多く含む。褐灰色。	小片ながら、有孔盤形と考えられる。口縁部内面にわずかながら返りあり。体部下方に浅い稜部あり。体部外面に指頭圧痕あり。底面に糸切り痕あり（器形の大きさから考えて静止の糸切りか）。内面に刷毛目あり。糸切り周辺に、再調整あり。	在地製品。

第13表　SX01出土遺物一覧

SX02（第49・50図、写真39）

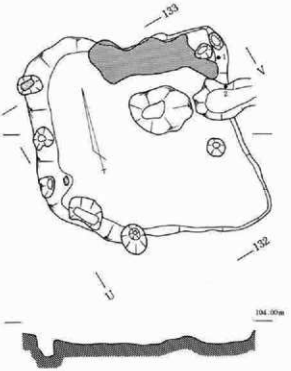
SX02はU－132・133に位置している。第3拡張区内ではやや南東寄りの低所にある。規模は平面形の最大長4.42mの深さ0.18mを計る。形態は不整形である。立ち上りは南東部側で浅く不明瞭となり、山寄せとなった南西部は、しっかりと立ち上る。発見面は標高103.9m前後で、中世的な砂質土に覆われていた。この覆土上面を整査したが埋土を切る柱穴を見いだすことはできなかった。埋土上方から見えはじめたのが粘土塊であった。粘土塊はSX02の北辺に集積（第50図トーン）され、灰色の地山層であった。SX02の底面は凹凸があり、平坦ではなかった。また床面状の硬さもなかった。柱穴は、底面と立ち上り面において9個所検出され、いずれもSX02の構築時か、それ以前の存在と見なされた。

出土遺物は底面に伴うものではなく、立ち上りに接して第50図1があり、SX02に伴うものか不明であるが第50図2が溝中埋土から出土している。

SX02は、SX01・03と近接しているが、重なっていないため、新・古の関係、並存関係など明らかでない。しかし、SX01の立ち上り東辺と、SX02の西辺とはほぼ同じ方向性にあり、相互の間に有機的な関連性があるものと考えられる。

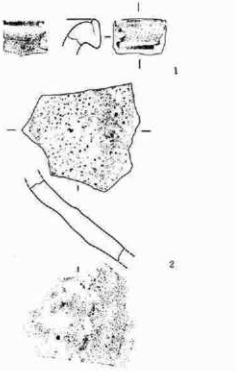
図・写真No.	土器種（器種）	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘　要
1	焼締陶器（甕）	立ち上り面遺構共伴	口縁部小片	白色鉱物粒を多く含む。赤褐色。	内面にわずかな返りを有する口縁部で、自然釉がおよぶ。内・外面に横撫で痕あり。	常滑焼。
2	焼締陶器（甕）	溝中埋土で共伴関係不良	口縁部小片	白色鉱物粒多く含む。暗灰色。	内面に細作り痕と、指などによる圧痕あり。外面は自然釉のため不明瞭。内面に手による横撫で痕あり。	常滑焼。

第14表　SX02出土遺物一覧



※トーンは粘土を示す。

第49図　SX02実測図　　1：60



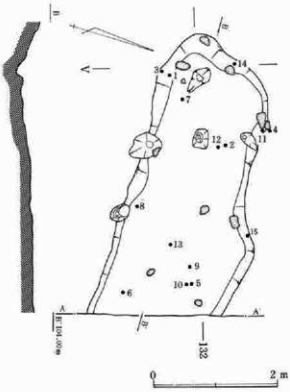
第50図　SX02出土遺物　　1：3

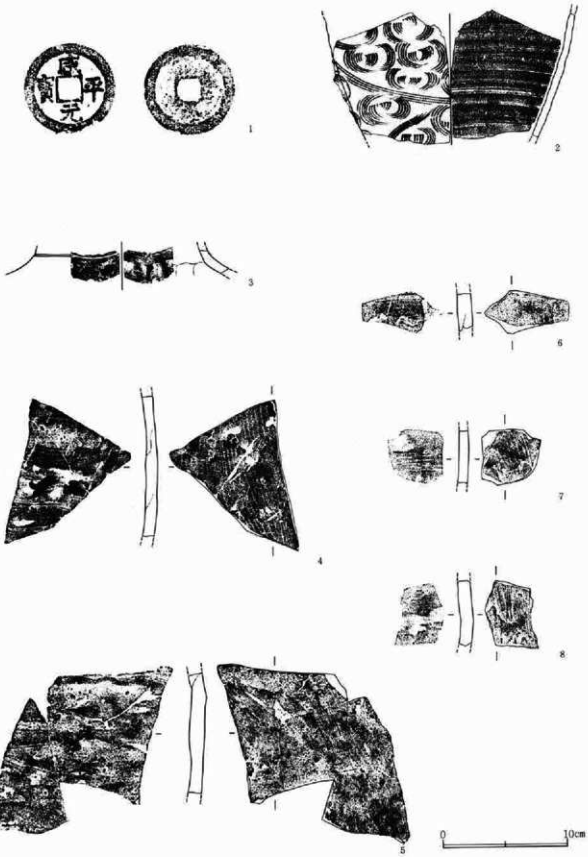
SX03（第51～53図、写真40）

SX03はU、V－131～132に位置する。規模は隅丸の長方形を呈し、最大長4.75＋αmを測る。深さは0.25mである。立ち上りは北側の低部で浅く、山寄せ側の南辺では、しっかりと立ち上る。発見面は、標高103.8m前後で、中世的な砂質土に覆われていた。埋土上面から図中の柱穴の掘り込みは見られなかった。底面は平坦であった。遺物の出土量は多いが散在的出土で、石の出土はいずれも底面より浮く。

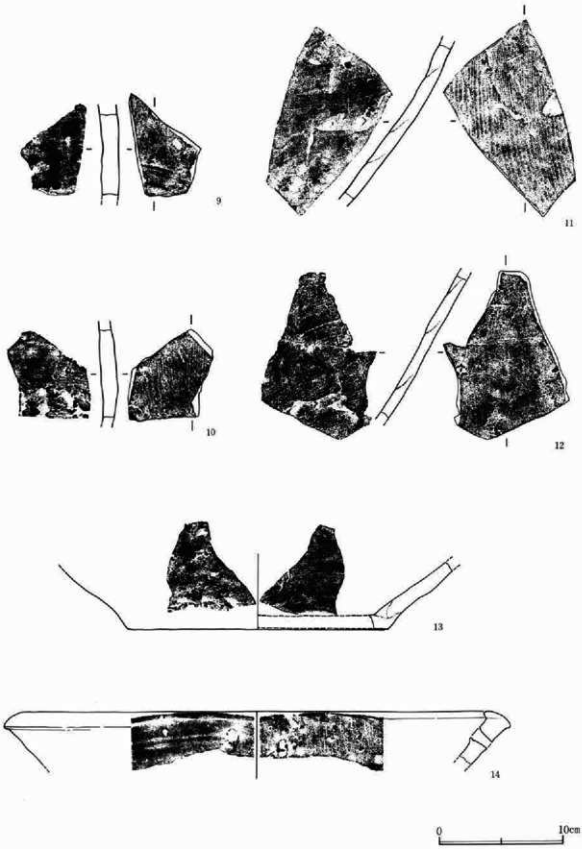
① 耕作土。
② 水田酸化層。
③ 水田グラ化層。砂質。
④ 黒色土。砂質、
⑤ 黒色土。砂質、
⑥ 木炭粒を混える黒色砂質土。

第51図　SX03実測図　　1：60





第52図　SX03出土遺物　　1：3　（1のみ 1:1）



第53図　SX03出土遺物　　1：3

図・写真No.	土器・陶器（器種）	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘要
1	古銭。	埋土上部。	直径2.4cm	材質は銅で緑青色を呈し、遺存度は良いが一部周縁部を欠損する。縁は平縁で、「咸平元宝」と判読できる。同銭は北宋代で998年の初鋳である。		
2	青磁（梅瓶）	立ち上り。	体部片	夾雑物なし。乳黒色。	外面に青白磁色の施釉あり。釉面に細貫入あり。外面に櫛書き劃文あり。流水文又は減文と水流文とで構成され、櫛目の単位は5～6条である。内面に施釉はなく露胎となっている。内面は工具による発達した轆轤目あり。成形時のものか。器形は全体に丸みをおびる。	龍泉窯系か景德鎮窯系
3	焼締陶器（壺）	底面直上	頸部小片	夾雑物多い。灰色。	頸部に1条の沈線が巡り体部に接する部分が平らなため鏡壺か。内面は指などによる圧痕あり。内面に横撫で痕あり、外面は自然釉のため器表面が見えず。	常滑焼か渥美焼。
4	焼締陶器（甕）	底面直上	体部小片	白色鉱物粒多い。にぶい赤褐色。	内面に紐作りの接合痕あり。内面に指などによる圧痕あり。割れ口に紐作りによる接合面あり。外面に板状工具による櫛目条痕あり。内面は板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
5	焼締陶器（甕）	底面直上	体部小片	黒色鉱物粒多い。赤褐色。	内面に粘土紐による紐作り痕と指などによる圧痕がある。外面に自然釉と紐作り痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。内面に指などによる横撫で痕あり。	常滑焼。
6	焼締陶器	埋土中	体部小片	白色鉱物粒多い。灰色。	内面に紐作り痕と指などによる圧痕あり。外面板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
7	焼締陶器（甕）	埋土中	体部小片	白色鉱物粒多い。褐色。	内面に粘土紐作り痕と指などによる圧痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
8	焼締陶器（甕）	埋土中	体部小片	白色鉱物粒多い。褐色。	内面に粘土紐作り痕と指などによる圧痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
9	焼締陶器（大甕）	埋土中	体部小片	白・黒色鉱物粒含む。茶褐色。	内面に紐作りの接合痕あり。指などの圧痕がある。粘土紐作り。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
10	焼締陶器（大甕）	埋土中	体部小片	白色鉱物粒含む。茶褐色。	内面に紐作りの接合痕あり、指頭圧痕あり。粘土紐作り。外面に板状工具による櫛目あり。	常滑焼。
11	陶器（大甕片）	埋土中	体部片	白色鉱物粒含む。茶褐色。	内面に紐作りの接合痕あり。指頭痕あり。粘土紐作り。外面に板状圧痕による櫛目条痕あり。内面は横撫である。	常滑焼。
12	陶器（甕片）	埋土中	体部小片	白色鉱物粒多い。茶褐色。	内面に紐作り痕あり。指頭圧痕あり。外面、手による撫で痕あり。板状工具痕あり。	製作地不詳
13	陶器（甕片）	埋土中	底部小片	白色鉱物粒含む。灰色。	内面に指頭圧痕あり。割れ口に底部と体部との接合痕が明瞭。底部外面には、砂が付着する。内面には板状工具による横撫である。	製作地不詳
14	軟質陶器（鉢）	埋土中	口径41.0cm。	砂を多く含む。軟質。暗灰黄色。	口縁部内面に巡りあり。口縁端部が肥厚する。口縁部直下を内から外に1穴の穿孔あり。内・外面に横撫である。器表に擦しあり。	在地製品。

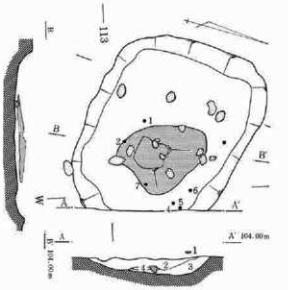
第15表　SX03出土遺物一覧

吹屋遺跡

SX04（第54図、写真40）

SX04はV－132、133に位置している。第3拡張区内で東端の低所にある。規模は、平面の最大長3.45＋αm深さ0.217mを測る。形態は隅丸方形である。四周とも、なだらかに立ち上る。発見面は標高103.8m前後で、中世的な砂質土に覆われていた。この埋土上面を精査したところ浅い小穴が南側に1個所認められた以外に別の掘り込みはなかった。底面は他の竪穴状遺構から比べれば平坦で、床面は特に硬くはなかった。底面から約3cm浮いて底面中央部に、地山の灰色土が集積されていた。おそらくは粘土として用いるための集積と見られる。

出土遺物は、7点の土器片が底面か、底面に近接し、散在的に出土した。このうち第55図7は粘土集積下から出土し、土器片の多くが粘土集積の底際に近いため、土器の置かれた時点と、粘土が置かれた時点との間に、若干の時間差があると考えられた。拳大の自然石の多くは、埋土上面からの出土で、卵大の石が粘土周辺から出土している。



① 土器。
② 酸化気味の黒褐色。
③ 砂質土。黒灰色。
④ 泥質土。酸化気味で黒褐色をおびる。

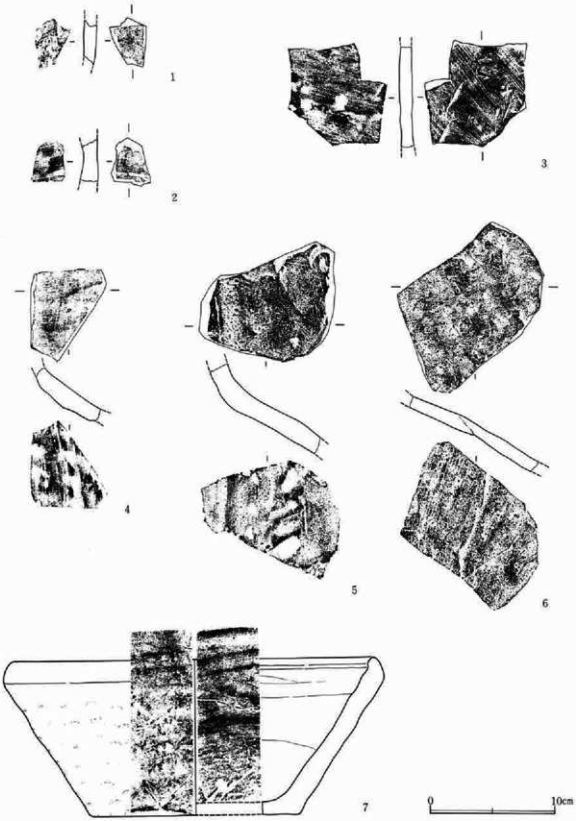
※トーンは粘土を示す。
濃いトーンは後代の掘り込みを示す。

0　2 m

第54図　SX04実測図　1：60

図・写真No.	土器種（器種）	出土位置	量　目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘　要
1	焼締陶器（甕）	埋土中	体部細片	白色鉱物多。赤褐色。	細片のため不明瞭。	常滑焼。
2	焼締陶器（甕）	底面直上	頸部小片	夾雑鉱物微。赤橙色。	細片のため不明瞭。内面に横撫である。	常滑焼。
3	焼締陶器（甕）	埋土中	体部片	白色鉱物粒多い。にぶい赤褐色。	内面に紐作り痕と指などによる圧痕あり。断面に粘土紐走行あり。外面に凹凸あり。外面に板状工具による櫛目条痕あり。内面に横撫で痕あり。	常滑焼。
4	焼締陶器（甕）	埋土中	頸部片	白色鉱物多。褐灰色。	内面に紐作り痕と指などの圧痕あり。内面に指による横撫で痕あり。外面に横撫である。	常滑焼。
5	焼締陶器（甕）	底面直上	頸部片	白色鉱物粒多い。にぶい橙色。	内面に紐作り痕と指などの圧痕あり。割れ口に紐作りによる粘土走行あり。内面に指による横撫で痕あり。外面に横撫である。	常滑焼。
6	焼締陶器（甕）	底面直上	頸部片	白色鉱物粒多い。灰赤色。	内面に紐作り痕と指などの圧痕あり。割れ口に紐作りによる粘土走行あり。内面に指による横撫で痕あり。外面に横撫である。	常滑焼。
7	軟質陶器（鉢）	底面直上	口径29.5cm 器高12.5cm	砂を多く含む。にぶい黄色。	外面に指などの圧痕あり。内面に擂鉢としての擦痕がある。内面上半に櫛目あり。底部糸切り。口縁部、内・外に横撫である。糸切りの周辺を再調整。	在地製品

第16表　SX04出土遺物一覧



第55図　SX04出土遺物　　1：3

SX05（第56・57図、写真40）

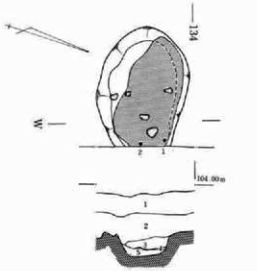
SX05はV－133に位置している。第3拡張区の北東隅にある。規模は最大長1.93＋αm、深さ0.96mである。平面形は楕円を呈す。この一群の竪穴状遺構の中では最も規模の小さいものである。形態、埋土、規模からすれば土坑の範疇かもしれないが、竪穴状遺構群中にあるためSXとして扱った。埋土は良く締った粘質の黒褐色土で他のSXと大きく異なり、その中程に木炭粒を主とする面が介存する。木炭粒の広がりはSX05の多くを覆うほど（第56図トーン）であった。

出土遺物は、埋土中から土器2点の出土があった。石類の出土は木炭粒面より上方である。SX05とSX04とは近接するが新・古の関係は明瞭でない。

SX05と他のSXを比較した時、形態、埋土、規模など差異は大きく、機能は異なる可能性が強い。

図・写真№	土器種（器種）	出土位置	量 目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘 要
1	焼締陶器（壺）	埋土中	体部小片	白色鉱物粒多い。暗赤褐色。	内面に紐作り痕と、指などの粘土紐痕あり。外面に粘土紐単位の凹凸あり。内面に板状工具による櫛目条痕あり。	常滑焼。
2	焼締陶器（壺）	埋土中	体部小片	黒色鉱物粒多い。灰赤色。	内面に紐作り痕と、指などの粘土紐痕あり。外面に粘土紐単位の凹凸あり。内面に板状工具による擦痕あり。外面に板状工具による櫛目条痕あり。	常滑焼。

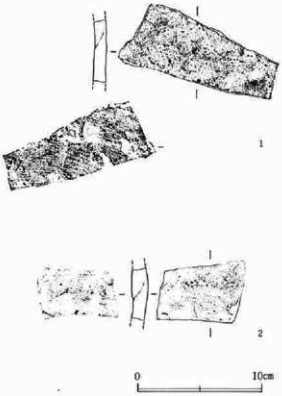
第17表　SX05出土遺物一覧



① 耕作土。
② 黒色土、砂質。
③ 黒色土、砂質。
④ 木炭粒層。（トーンは木炭粒の広がりを示す）
⑤ 黒色土、砂質で泥土ブロック混り。

0　　2 m

第56図　SX05実測図　1：60



0　　10cm

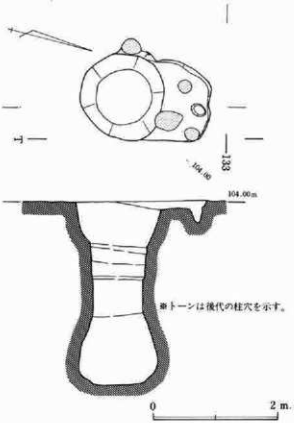
第57図　SX05出土遺物　1：3

SE07（第58～60図、写真38）

SE07はS・T－132に位置する。形態は断面形、鼓形を呈する。つまり井筒部上半がロート状に開き出し、底部が広がっているのである。規模は最大径2.06m、深さ2.90mである。井筒部の上面北側には隅丸形の掘り込みが付設されている。埋土は発見面レベルで、中世的な砂質土であったが、中位より上面は、人為的に埋土されたためか砂質土中に多くの地山ブロックを含んでいた。さらに下部は黒色泥質土であった。

このSE07と他遺構との重複はSA02がSE07の埋土上面を切り、3つの小柱穴も切って存在していた。井筒部北側にある幅1.32mの隅丸方形の掘り込みは、発見面レベルでは井筒部上面との間で新古の重複関係になく、併存していた可能性が高い。

出土遺物は木製品に限られ、いずれも地下水の湧水する井筒部下半の広がりの出土である。木製品は日常用具を主体とする良好な組合せが得られている。このほか、竹の細片が多量に含まれていた。



第58図　SE07実測図　1：60

SE08（第61～67図、写真38）

SE08はU－133・134に位置する。SD08は拡張区の北半部やや東にある。立地における中世的地勢からは北西よりの傾斜地変換部で西側に山寄せた恰好になっている。形態は井筒部上半がロート状に開き出し、下方に大きなあぐりが生じ、さらに井筒は直立せずに歪んでいた。規模は最大径2.12m、深さ3.03mである。

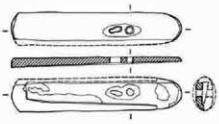
発見面レベルは標高104.50m内外で、埋土上面に別の掘り込みはなかった。埋土は上下2層に分離される。上層は、中世的砂質土で、上面部分を除き、大半に地山ブロックをまじえる。このため上層の多くは人為埋土された可能性が高い。下層は、井筒のあぐり以下に黒色泥土が存在し、底面直上にわずかながら砂質土が存在した。

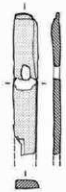
出土遺物は第61～67図に示したとおり、焼締陶器の多量の出土を見た。出土位置は、井筒部あぐり中位からあぐり上面にかけ集中的に出土した。下層の黒色土中からである。またあぐり中位から底にかけ人頭大の川原石数十個が出土し、おそらくは廃棄に伴うものであろう。出土陶器類と川原石との出土傾向は底に近ずくにつれ石が多く陶器類が少なかった。このほか底面際から竹の細片が多量に出土した。特異な遺物としては、カキ類と思われる二枚貝の片殻があぐり下方から出土している（第62図）。

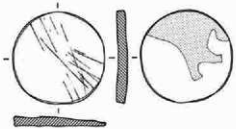
出土遺物は厨房具的な陶器類ではなく、貯蔵用陶器が多く、木製遺物は加工品を欠いている点に留意されよう。

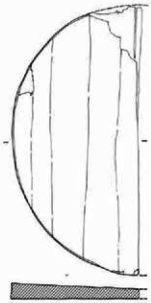
このSE08の機能であるが、ロート状に広がる井筒部上位は約40°の勾配と70cm前後の法を持っているため、通常の正位の水汲は困難な構築となっている。このことは、井桁の構築法と汲上法に関連があろう。またSE08周辺に遺構の集密度が少ないことも留意点となろう。

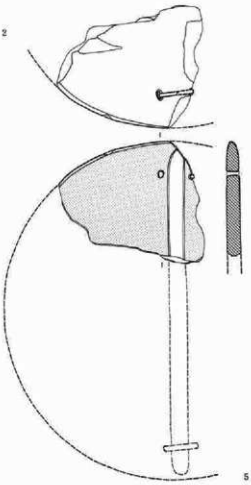
植物遺体には種子類が含まれており、桃実、ウリ、





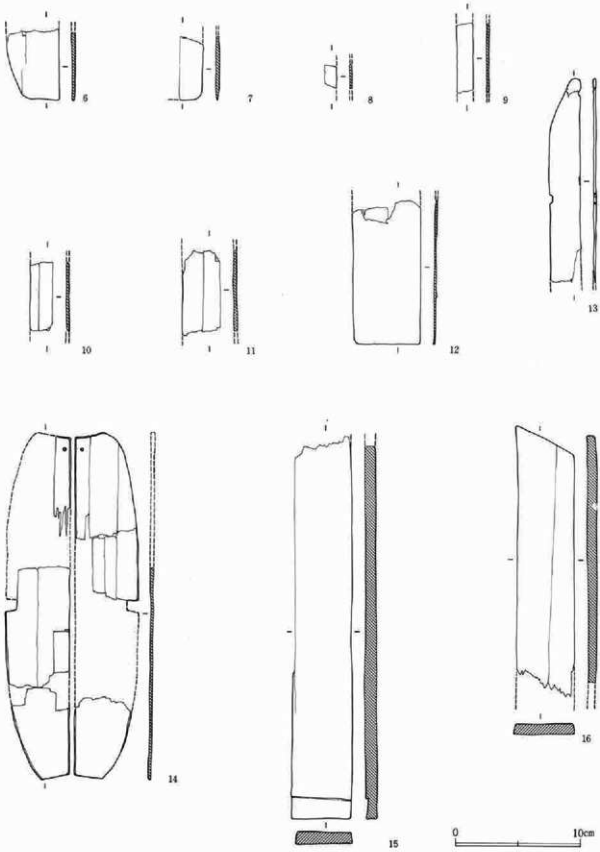






※トーンは炭化部分を示す

第59図　SE07出土遺物　　1：3



第60図　SE07出土遺物　　1：3

種別	図・写真番号	出土地	①並目②材質③木取	観察所見
塗り物小皿	第43図	ＳＥ02埋土〔第２拡張区〕	①直径8.7cm,器高1.3cm,②広葉樹,③柾目材順切り。	柾目材を平行に用いて刳り木し、木表は表面側である。刳り木後、鞠嵯挽し、内面底、体部の内・外面に削り目痕あり。全面に茶味おびる黒色漆が施きれる。欠損は調査時である。
板草履	第45図１	ＳＥ03埋土〔第２拡張区〕	①残存長25.9cm,厚0.27cm,②針葉樹,③板目材順加工。	柾目材でそのまま加工する。折り合せ部上方に直径約0.2cmの小孔を一対穿つ。編物の付着は認められない。耳の刳込みあり。欠損は旧時においてである。
不詳	第45図２	〃	①長4.5cm,径3.1cm,②広葉樹,③丸木材輪切加工。	太枝か小木の丸木を輪切し、加工したもので、樹皮下組織をとどめるのは表側のみで、図の裏側は削り取られる。周端部に削り痕あり、表側の樹皮下組織のみ炭化（図中トーン）し、削り目は炭化していないため、炭化後の加工である。
〃	第45図３	〃	①長6.0cm,径3.6cm,②広葉樹,③丸木材輪切加工。	太枝か小木の丸木を輪切し、加工したもので樹皮下の放射状組織を両端部を除いて認める。両端の削りは大まかであるが平均的な単位で削られている。欠損は調査時である。
刀柄	第59図１	ＳＥ07埋土〔第３拡張区〕	①長13.6cm,残存幅0.6cm,②広葉樹,③板目材。	形態は呑口短刀（雌用刀か）柄部差し裏片である。板目をやや斜めに木取し、精密加工したもので、茎穴を除いて削り目は見えない。柄部中央に目貫目釘・目釘穴と思われる穴が２穴あり、その周囲の外面には手ずれの擦痕がないため、旧時には目貫を装着していた可能性あり。茎穴は縦平であるため刀身は片刃か、平造と考えられる。茎内の図中細線は鎺付着部分を示し、旧時における刀身の痕跡か、呑口端に鞘の当り痕は不明瞭。欠損部分は旧時においてである。
曲物底板（杓子か）	第59図２	〃	①径7.2cm,厚0.75cm,②針葉樹,③柾目材順加工	削り跡痕をとどめず精加工である。片面にやや長身の刀物傷があり、片面に炭化した（図中トーン）があるが側部にはおよんでいないため使用時の焦跡。
不詳	第59図３	〃	①残存長9.6cm,幅0.6cm,②針葉樹,③柾目材順加工	用途が不明瞭な木製遺物。削り目痕は不明瞭であり、小穴が穿たれているが穴の工作は粗雑。片面のみ炭化（図中トーン）している。欠損は調査時による。
曲物底板	第59図４	〃	①径21.5cm,厚1.2cm,②針葉樹,③柾目材順加工	均削りと考えられる削痕を両面に残し、側部にも細かな削り目が部分的に残るがほんのわずかである。円形整形は少なくとも均削り後である。欠損部は旧時においてである。
鍋蓋	第59図５	〃	①推定直径26.9cm,厚1.0cm,②広葉樹,③柾目材順加工	加工痕は不明瞭である。片面が炭化し（図中トーン）、摘手跡が焦げて残っているため、炭化側が表、反対側が裏となる。摘手端部に近い位置に縛止め用の小穴が２つ穿たれており、裏面に縛止め材の一部が残存する。厚みの取り方は比較的均一になされている。欠損部は旧時においてである。
板草履	第60図６	〃	①現存最大長5.7cm,厚0.3cm,②針葉樹,③柾目材順加工	残存形態からすれば板草履の半身下半部である。加工痕は不明瞭。厚さの取り方は均一でない。欠損部は旧時においてである。
板草履か	第60図７	〃	①現存最大長5.1cm,厚0.3cm,②針葉樹,③柾目材順加工	残存形態からすれば板草履片のようにも見える。加工痕は不明瞭。厚さの取り方は均一でない。欠損部は旧時においてである。
〃	第60図８	〃	①現存最大長1.8cm,厚0.24cm,②針葉樹,③柾目材順加工	細片のため明言はできないが、同じ系統の樹種と板の厚さの取り方からして、板草履片の可能性がもたれる。厚みの取り方は均一である。欠損は旧時においてである。
〃	第60図９	〃	①現存最大長5.3cm,厚2.7cm,②針葉樹,③柾目材順加工	同上

SE07ほか出土木製遺物一覧

種　別	図・写真番号	出土地	①量目②材質③木取	観　察　所　見
板草履か	第60図10	SE07埋土（第3柜掘区）	①現存最大長5.4cm。幅2.7cm。②針葉樹。③柾目材順加工	細片のため明言はできないが、同じ系統の樹種と板の厚みの取り方からして、板草履片の可能性がもたれる。厚みの取り方は均一である。欠損は旧時においてである。
〃	第60図11	〃	①現存最大長6.3cm。幅3.3cm。②針葉樹。③柾目材順加工	細片のため明言はできないが、同じ系統の樹種の板の厚みの取り方からして、板草履片の可能性がもたれる。厚みの取り方はやや不均一である。欠損の大半は旧時においてであるが図中上半は調査時点である。
不　詳	第60図12	〃	①現存最大長9.8cm。幅0.3cm。②針葉樹。③柾目材順加工	割れ口を除き、両側部・片小口部を残す柾目割取り材である。側部・片小口部の加工は丁寧で削り跡はほとんど見られない。表・裏の加工痕は不明である。厚みの取り方はやや不均一である。欠損は調査時点である。
板草履	第60図13	〃	①現存最大長16.0cm。幅0.3cm。②針葉樹。③柾目材順加工	小形の板草履半身片である。下半の一部を欠損し、両側部・片小口部を残す柾目割取り材である。平部・側部・小口部の加工痕は不明瞭である。両側部にそれぞれ、割込み部があり、削り痕が覗える。図左側部にはコの字状、右側部はくの字状の形の割込みとなる。厚みの取り方は上半は整っているものの、下半はやや不均一である。調査時点において編物の付着は認められなかった。欠損部分は、先端は調査時に損傷したものの他は旧時における欠損である。
〃	第60図14	〃	①推定全長27.5cm。最大厚0.3cm。②針葉樹。③柾目材順加工。	復元しうる唯一の板草履である。両身が重なって出土した。通半以上残存する。木取りは柾目にそって順割取りした薄材であるが平・側部ともに加工痕は不明瞭である。側部の割り込み部に刀物傷がわずかに残る。側部割込みは内上りの方形を呈している。平部上方隅に小穴が一対穿たれている。合せ側面には鎬部が立っており、側部はやや丸味をおびる端部となる。厚みの取り方は全体的に整っているが、先端側がやや厚みを持つ。調査時点において編物の付着は認められなかった。欠損部分は左側が調査時点に、右側は、腐蝕気味であった。
組物部材	第60図15	〃	①残存長30.5cm。最大厚0.9cm。②針葉樹。③柾目材順加工	片側平に受けの割込みが施された組物の部材である。木取りは、柾目材を順に加工したもので両側部、小口面に割込部分に削り目が見える。断面は台形となり、厚さの取り方は均一である。欠損部は旧時におけるものである。
組物部材か	第60図16	〃	①残存長19.6cm。最大厚0.7cm。②針葉樹。③柾目材順加工	片小口を斜に落した、組物の部材とも思える木製遺物である。木取りは柾目材を順加工したもので両側部・小口面に削り目が見える。断面は台形となり、厚さの取り方は均一である。欠損は旧時におけるものである。
板　材	第77図1	SE06埋土	①残存長23.4cm。最大幅2.5cm。②広葉樹。③板目材加工。	用途が不明瞭な木製遺物である。木取りは板目材加工したもので平部と片側部をとどめ、同小口・片側部を失う。削り目は大まかであるが側部に認められる。側部・平ともに面ごしらえは平でなく、厚みも均一でない。欠損部分は調査時点におけるものである。
〃	第77図2	〃	①残存長11.5cm。最大幅2.1cm。②広葉樹。③板目材加工。	上記と同じ材質で同一物かもしれない。用途が不明瞭な木製遺物である。木取りは板目材を加工し、平部と片側部をとどめる。片側部は鋭利な面を削り出し、刃物痕がわずかに残る。欠損部分は調査時点である。
植物門	第79図2	SE09	①長16.0cm。最大幅4.2cm。②みだれたけ	木に接する部分は古びがなく、人為による剝ぎ取りである。旧時に加工痕はない。みだれたけはきるのこしかけ科。

第18表　SE07ほか出土木製遺物一覧

ムギ、コメの種子が認められた。

コメ・ムギ類については佐藤敏也氏に鑑定していただいた。その際、同時に鑑定した遺跡例に佐波郡境町に所在する小角田前遺跡（上武道建設）例、隣接地の日高遺跡例があり、一傾向が示された。

8号井戸址から3粒のコメ、5粒のムギの種子がある。ムギについては小麦とはだかムギの可能性のある大麦であった。コメについては円味をおび時代の若い米の特徴をあらわしているとのことであった。氏の鑑定報告文は

1982(群馬県埋蔵文化財調査事業団)『日高遺跡』を参照されたい。

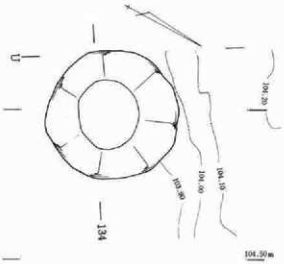
米

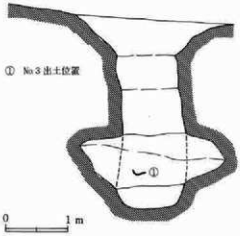
No	粒長	粒幅	粒厚	粒長/粒幅	粒長×粒幅	備考
1	4.40	2.70	1.60	1.62	11.88	粒頂部一部欠
2	4.40	2.30	2.20	1.91	10.12	焼太り一部変形
3	4.90	2.60	1.70	1.88	12.74	〃

麦

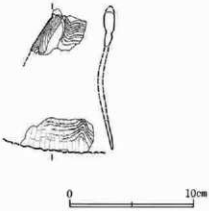
No	粒長	粒幅	粒厚	粒長/粒幅	粒長×粒幅	備考
1	6.70	3.00	2.50	2.23	20.10	ハダカムギ
2	6.10	3.00	2.50	2.03	18.30	〃
3	6.30	3.00	2.10	2.10	18.90	〃
4	6.20	3.10	2.10	2.00	19.22	〃
5	5.00	2.90	2.20	1.72	14.50	〃
6	4.90	2.70	1.60	1.81	13.23	小麦
7	5.00	2.00	1.20	2.50	10.00	ハダカムギ
8	—	2.20	2.00	—	—	破片
9	6.45	2.80	2.00	2.30	18.06	ハダカムギ胚小
10	5.00	2.70	2.10	1.85	13.50	〃
11	4.40	2.40	2.00	1.83	10.56	ハダカムギ胚中

佐藤氏附表　吹屋遺跡8号井戸出土米・麦計測値

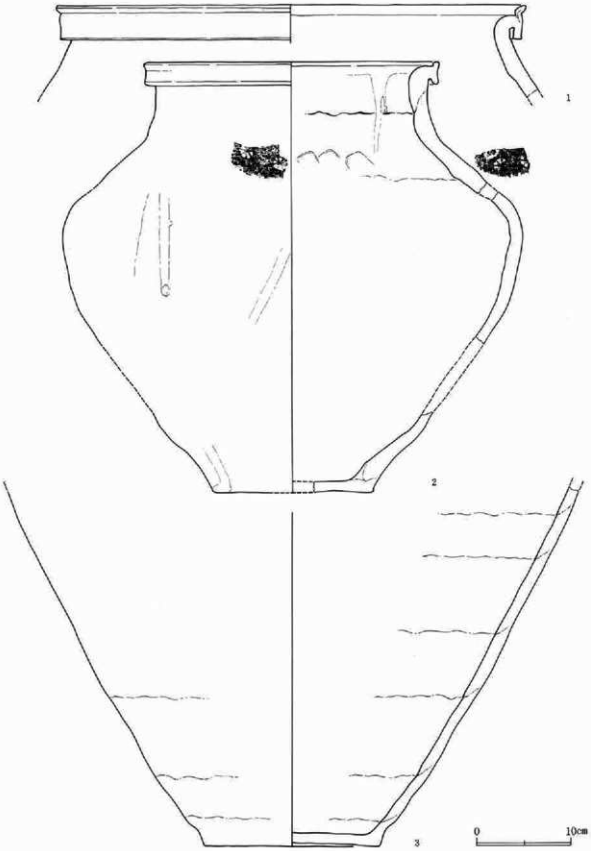




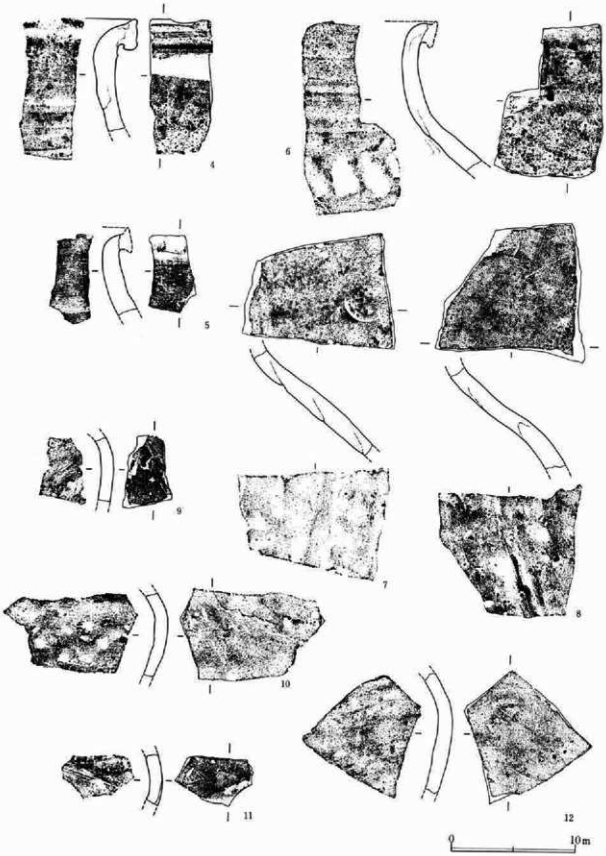
第61図　SE08実測図　1：60



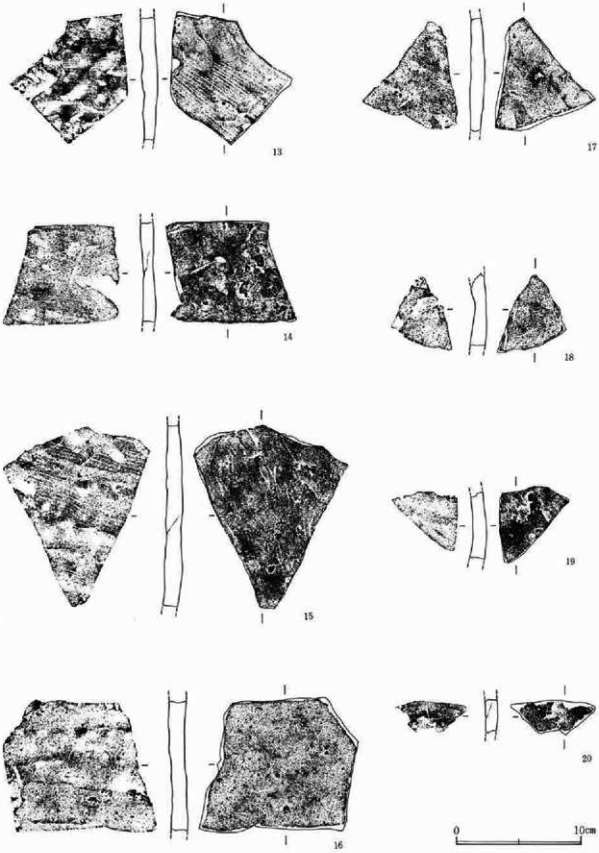
第62図　SE08出土遺物　1：3



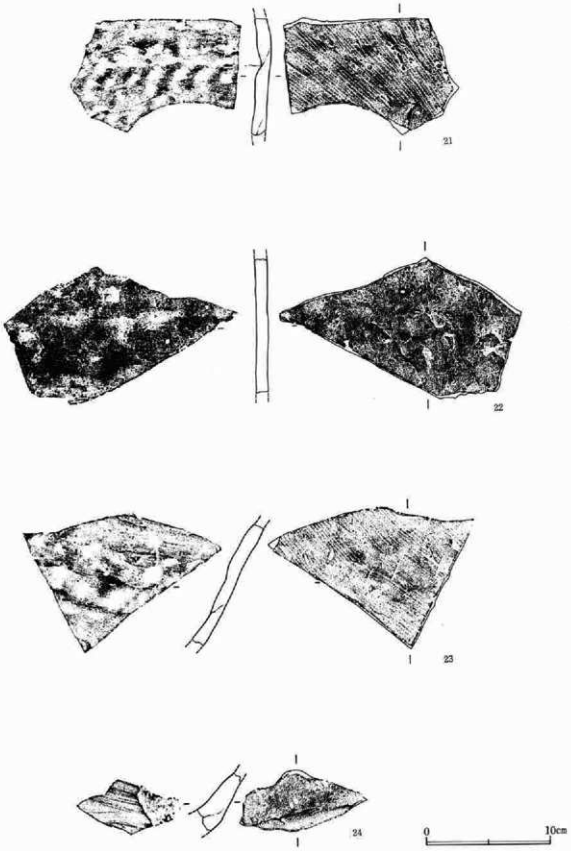
第63図　SE08出土遺物　　1：4



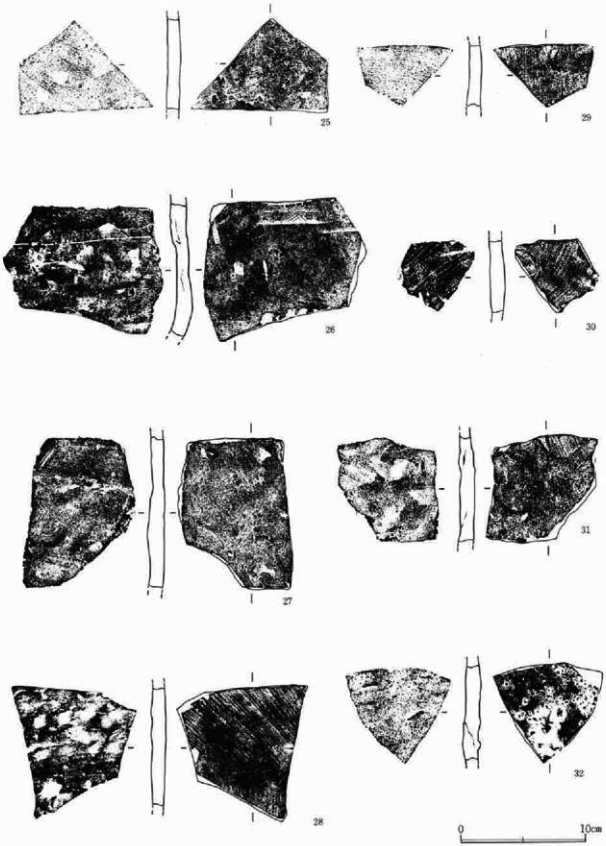
第64図　SE08出土遺物　　1：3



第65図　SE08出土遺物　　1：3



第66図　SE08出土遺物　　1：3



第67図　SE08出土遺物　　1：3

図・写真No.	土器種(器種)	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘要
1	焼締陶器(甕)	埋土下方	口縁部片	白色鉱物粒を多く含む。暗赤褐色。	外面に浅い凹凸あり。内面に指などの圧痕あり。自然釉。内・外面に横撫であり。	常滑焼。
2	焼締陶器(甕)	埋土下方	口縁部片	白・黒色鉱物粒多い。赤褐色。	外面に指の圧痕。内面は紐作り痕と指などによる圧痕あり。自然釉。肩部に菊花文2単位印文あり。内・外面に横撫であり。	常滑焼。
3	焼締陶器(甕)	埋土下方	底径14.2cm 器高26.5+αcm。	白色鉱物粒多い。暗赤褐色。	内面に紐作り痕と指と掌などの圧痕あり、外面も指などの圧痕あり。内・外面に横撫であり。	常滑焼。
4	焼締陶器(甕)	埋土下方	口縁部片	夾雑鉱物粒多い。灰色。	割れ口に紐作りの接合痕あり。内面に紐作りの接合痕と指などの圧痕あり。自然釉あり。内・外面に横撫であり。	常滑焼。
5	焼締陶器(甕)	埋土下方	口縁～頸部片	夾雑鉱物粒多い。暗赤褐色。	割れ口に紐作りの接合痕あり。内面に紐作りの接合面と指などの圧痕あり。自然釉あり。内・外面に横撫であり。	常滑焼。
6	焼締陶器(甕)	埋土下方	口縁～頸部片	夾雑鉱物粒多い。暗赤褐色。	外面に叩痕らしきわずかな凹みあり。自然釉あり。内・外面に横撫で痕あり。	常滑焼。
7	焼締陶器(甕)	埋土下方	頸部直下片	白色鉱物粒多い。暗緑灰色。	外面の状態は厚い自然釉のため不明瞭。内面は明瞭に紐作りの接合痕と、指などによる圧痕あり。内面に手による擦痕あり。	常滑焼。
8	焼締陶器(甕)	埋土下方	頸部直下片	白色鉱物粒多い。暗緑灰色。	外面に大まかな凹凸あり。内面は紐作りにより粘土の接合面と指などの圧痕あり。自然釉。内面に手による大まかな撫で痕あり。外面は横撫で痕あり。	常滑焼。
9	焼締陶器(甕)	埋土下方	肩部小片	白色鉱物粒多い。褐色。	外面に自然釉あり。内面は紐作りによる接合痕と、指などの擦痕あり。内面に手による撫で痕あり。	常滑焼。
10	焼締陶器(甕)	埋土下方	肩部片	白色鉱物粒多い。褐色。	割れ口に紐作りによる接合痕あり。内面に紐作りの接合面と指などの圧痕あり。自然釉あり。内面に横撫で痕あり。	常滑焼。
11	焼締陶器(甕)	埋土下方	肩部片	白色鉱物粒多い。褐色。	割れ口に紐作りの接合痕あり。内面に指などの圧痕あり。内面に横撫で痕あり。	常滑焼。
12	焼締陶器(甕)	埋土下方	肩部片	白色鉱物粒多い。黒褐色。	割れ口に紐作りの接合痕あり。内面に指などの圧痕と紐作り痕あり。外面に自然釉あり。内面に横撫で痕あり。	常滑焼。
13	焼締陶器(甕)	埋土下方	体部小片	夾雑鉱物微。にぶい赤褐色。	内面に紐作り痕と指・手などによる圧痕あり、外面紐作りの接合面があり、表面がいく分ハゼる。内面指による横撫で痕あり。外面板目状工具による櫛目条痕あり。	常滑焼。
14	焼締陶器(甕)	埋土下方	体部片	白色鉱物粒多い。暗褐灰色。	内面に紐作りの接合痕あり。指などの圧痕がある。内面に指などの圧痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。内面に板状工具による櫛目条痕あり。	常滑焼。

SE08出土遺物一覧

図・写真No.	土器種（器種）	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘要
15	焼締陶器（甕）	埋土下方	体部片	夾雑鉱物多い。明赤褐色。	内面に紐作り痕と指などの押えによる圧痕あり。外面に紐作り単位の凹凸あり。内面に手と板状工具による擦痕あり。外面板状工具による櫛目あり。	常滑焼。
16	焼締陶器（甕）	埋土下方	体部小片	白色鉱物粒多い。赤灰色。	外面に自然釉がおよぶ。成形は不明瞭。内面に紐作り痕と指などによる指頭圧痕あり。内面に指などによる擦痕あり。	常滑焼。
17	焼締陶器（甕）	埋土下方	体部小片	白色鉱物粒多い。赤灰色。	内面に紐作り痕と指などによる圧痕あり。夾雑鉱物が多い為、外面焼ハゼあり。内面に指などによる擦痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
18	焼締陶器（甕）	埋土下方	体部小片	白色鉱物粒多い。にぶい赤褐色。	内面に紐作りの接合痕あり。指などの圧痕がある。外面に２次的な焼成による色調の変化あり。内面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
19	焼締陶器（甕片）	埋土下方	体部小片	白色鉱物粒多い。明赤褐色。	内面に紐作りの接合痕があり、割れ口にも粘土紐による走行が見られる。内面に指などの圧痕がわずかに残る。内面に指などによる擦痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
20	焼締陶器（甕）	埋土下方	体部小片	白色鉱物粒多い。赤灰色。	内面に紐作りの接合痕あり。指などの圧痕あり。外面に若干ススが付着する。内・外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
21	焼締陶器（甕）	埋土下方	体部片	白色鉱物粒多い。灰赤色。	内面に粘土紐作り痕と指などの圧痕あり。割れ口に紐作りの粘土走行あり。外面に板状工具による櫛目条痕あり。内面に手などによる横撫で痕あり。	常滑焼。
22	焼締陶器（大甕）	埋土下方	体部片	白色鉱物粒多い。赤黒色。	内面に粘土紐による紐作り痕と指などの圧痕あり。断面に粘土紐作りの走行あり。内面に手などによる擦痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
23	焼締陶器（大甕）	埋土下方	体部片	夾雑物多い。にぶい赤褐色。	外面に自然釉あり。内面に指などによる圧痕と紐作り痕をとどめる。割れ口に粘土紐作り走行あり。内面に指などによる横撫で痕あり。外面に板状工具による櫛目あり。	常滑焼。
24	軟質陶器（鉢）	埋土下方	体部小片	砂を含む。暗灰色。	外面に撫であり、指などの圧痕あり。この小片は底部から体部に接する部分を僅かに残す。断面に紐作り痕あり。外面は指などによる横撫で痕あり。内面に指などによる顕著な横撫で痕あり。	在地製品。
25	焼締陶器（甕）	埋土下方	体部片	白色鉱物粒多い。褐灰色。	内面に紐作り痕と指などの圧痕あり。外面に指などの圧痕が僅かに残る。外面に板状工具による擦痕あり。内面に横撫で痕あり。	常滑焼。
26	焼締陶器（甕）	埋土下方	胴部片	白色鉱物粒多い。暗赤褐色。	外面に僅かな凹凸あり。内面に紐作り痕と指などの圧痕あり。内面に板状工具による擦痕と指による横撫であり。外面に手による撫で痕と判読不明の文字入りの押き目あり。	常滑焼。

SE08出土遺物一覧

図・写真No.	土器種(器種)	出土位置	量 目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘 要
27	焼締陶器(甕)	埋土下方	体部片	白色鉱物粒多い。赤褐色。	内面に紐作り痕と指・手掌などの圧痕あり。内面に手などによる横撫で痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。	常滑焼。
28	焼締陶器(甕)	埋土下方	体部片	白色鉱物粒微。灰褐色。	内面に紐作り痕と指などによる圧痕あり。紐作りの単位は約3cmである。内面に手などによる撫で痕あり。外面に櫛目整形痕あり。	常滑焼。
29	焼締陶器(甕)	埋土下方	体部小片	夾雑鉱物多い。暗灰色。	外面に強かな凹凸あり。内面は自然釉がかかり成形不明瞭。割れ口に紐作りによる接合痕あり。外面に板状工具による櫛目あり。	常滑焼。
30	焼締陶器(甕)	埋土下方	体部小片	夾雑物多い。褐灰色。	割れ口に紐作り痕あり。外面に板状工具による擦痕あり。内面に板状工具による櫛目状条痕あり。	常滑焼。
31	焼締陶器(甕片)	埋土下方	体部片	白色鉱物粒多い。にぶい赤褐色。	内面に紐作り痕と指などの圧痕あり。内面に板状工具による擦痕あり。外面に板状工具による櫛目条痕あり。	常滑焼。
32	焼締陶器(甕)	埋土下方	体部片	白色鉱物粒多い。赤褐色。	内面に紐作り痕と指などの圧痕あり。外面、自然釉あり。内面に指などによる横撫で痕あり。外面は自然釉のため不明瞭。	常滑焼。

第19表 SE08出土遺物一覧

第３拡張区の覆土層出土遺物（第68図、第20表）

第３拡張区の遺構埋没土を除く、上層から出土した遺物の中で、遺構とのかかわり、遺構の性格を示唆すると思われる遺物類について取り上げたい。

なお遺物観察内容は次表のとおりである。

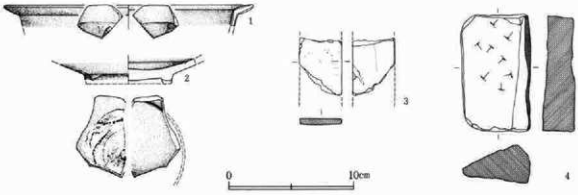
舶載陶磁器片は第68図１・２の２片がある。２は白磁碗片でV—135から出土し、SA01の東辺にあたる。出土時点は、凹地部分に存在するSA群の輪郭線を把握すべく、覆土の砂質土面を精査中に出土した。SA群の周辺の遺構検出面は当時の生活面そのものであったが出土高は、SX05などに直結するものではなく、浮いた状態であった。

２片の舶載磁器片は遺構には直結しないものの、館の存続中に使用されていた可能性は高い。

第68図１は青磁鉢片であり、砧手で出来のすぐれた個体であり、館、掌握者の財力を偲ばせる。出土位置、発見面は２に近接し、対する所見も同様である。

第68図３は粘板岩製の小砥石である。V—132凹地面から出土し、つまり当時の生活面に近く、SD01、02などと関連した可能性が強い。側部は直線的であり本来は、その幅を単位とした長身の砥石と考えられる。平は平滑で合せを施している。質は現代の軟質の名倉砥に近く、こっぱであることを考えれば精処理砥である。

第68図４は砂岩の砥石で面拵がなされており、中世としては特殊な砥石である。３・４は、後章においてSX群の性格を工房跡としたが、この砥石の用途からしてもそのことが示唆される。

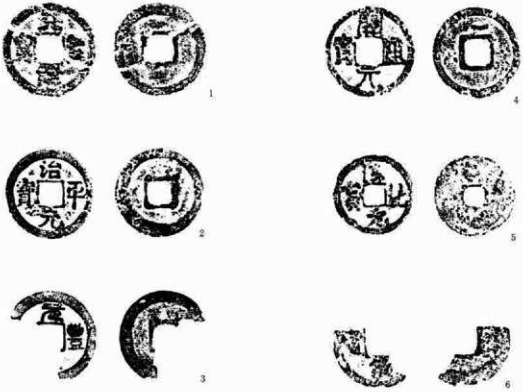


第68図　第３拡張区出土遺物　1：3

※トーンは自然面を示す

図・写真No.	種	出土位置	量　目	素　地	器形・技法の特徴	摘　要
1	鉢 （青　磁）	第３拡張区 V—134 標準II層	推定口径 20cm	胎土、白色 粒、淡緑色	砧手を呈する上手の青磁で、内・外面に施釉。釉は厚く、細気泡を含むため濁する。外面には鎬手蓮弁の刻文があり、口縁端部は雲口化する。	龍泉窯 14世紀
2	碗 （白　磁）	第３拡張区 V—135 標準II層	推定底径 6.9cm	胎　土 淡灰色	透明釉を薄く施釉した白磁碗で、外面高台際が露胎となる。高台端部を欠く。高台内面は施釉なし。内面に刻文の圏線あり。	舶載 13世紀
3	砥　石 再　利　用 こっぱ砥	第３拡張区 V—132 標準II層	長さ 4.3cm 幅　3.3cm	粘板岩 淡黄灰色	第68図３の右が裏面で研磨痕跡。表面には研磨痕と刃物傷によって生じた擦痕がある。擦痕は勝手下りとなる。側部は本来の旧痕をとどめている。本例はこっぱ砥石	こっぱ砥石 右利。
4	砥　石	第３拡張区 V—135 標準II層	長さ 9.2cm 幅　5.5cm	砂　岩 淡黄褐色	第68図４のトーンは原石面を示す。表面、側部の一部、裏面に使用痕あり。擦痕は表裏とも勝手下りのわずかな凹みがあり、全体が平らであるので合せの砥石を用いている。	右利用。

第20表　第３拡張区覆土層出土遺物一覧



第69図　古銭拓影図　　1：1

図番号	出土地	古銭名称	時代	初鋳年代	遺存度	摘要
1	J－92	天聖元宝	北宋	天聖元年(1023)	完形	第1拡張区出土
2	S－131	治平元宝	北宋	治平元年(1064)	完形	
3	S－134	元豊通宝	北宋	元豊元年(1028)	欠	
4	U－133	開元通宝	唐	武德四年（621）	完形	背面に「一」銘あり。
5	V－133	淳化元宝	北宋	咸平元年（998）	完形	
6	Q－134	□□□宝	不詳	不詳	欠	

第21表　第1・3拡張区出土古銭一覧

第21表は第3拡張区出土の古銭を掲げたが、第69図1のみ第1拡張区から出土した。

2～6はいずれも遺構に伴ってではなく、第3拡張区東側凹みを埋めていた砂質土中から遺構検出面に至る間で出土した。

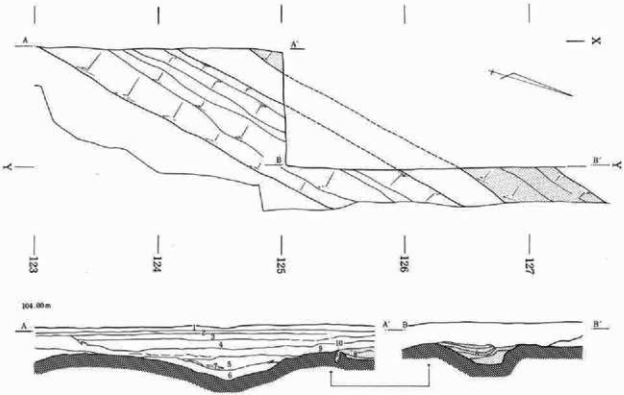
遺存状況は、埋没の土質が砂質土のためか不良である。

村東館址を8－(1)で14世紀前半に主体機能があったとしたが、出土古銭はいずれも北宋以前であるため、館址との関連において共在した可能性があり、出土層位からも同様のことが云える。

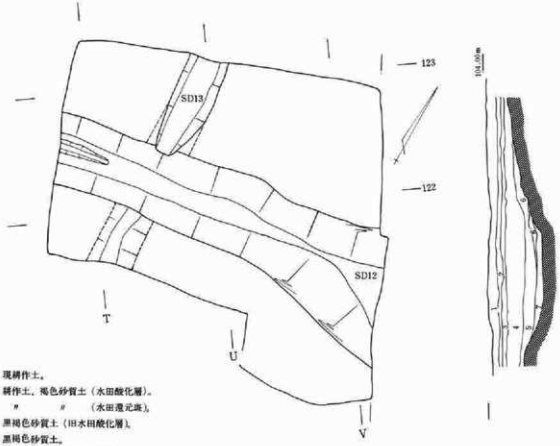
(4)　SD12についての拡張区

SD12は試掘におけるX～Y－105～138トレンチで検出され、中規模の堀切遺構と判断された。しかも、第70図のとおり、SD12に西接して若干の高まり、および小溝中をしっかり築土した土塁状遺構を伴っていた。土塁状遺構はその頂部に土層断面注記10に見る枕状の痕跡が残されていた。

吹屋遺跡の各所にもうけられた試掘トレンチで、上記の所見は、その追求を最も必要とした。このため、SD12の追求のため、SD12－第1拡張区、SD12－第2拡張区、SD12－第3拡張区（L・M－143・144）を設定した。

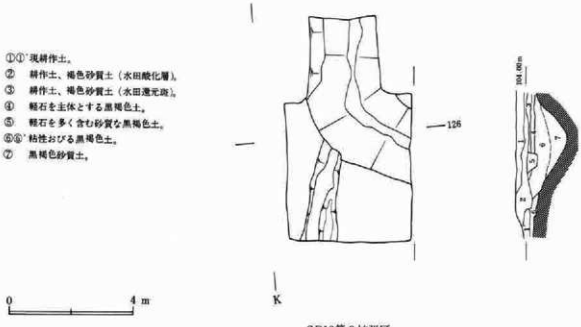


第70図　SD12試掘時実測図　1：120



① 現耕作土。
② 耕作土、褐色砂質土（水田酸化層）。
③ 〃 〃 （水田還元斑）。
④ 黒褐色砂質土（旧水田酸化層）。
⑤ 黒褐色砂質土。
⑥⑥' 軽石を多く含む黒褐色砂質土。
⑦ 粘性おびる黒褐色土。

第71図 SD12第1拡張区実測図 1：120



①①' 現耕作土。
② 耕作土、褐色砂質土（水田酸化層）。
③ 耕作土、褐色砂質土（水田還元斑）。
④ 軽石を主体とする黒褐色土。
⑤ 軽石を多く含む砂質な黒褐色土。
⑥⑥' 粘性おびる黒褐色土。
⑦ 黒褐色砂質土。

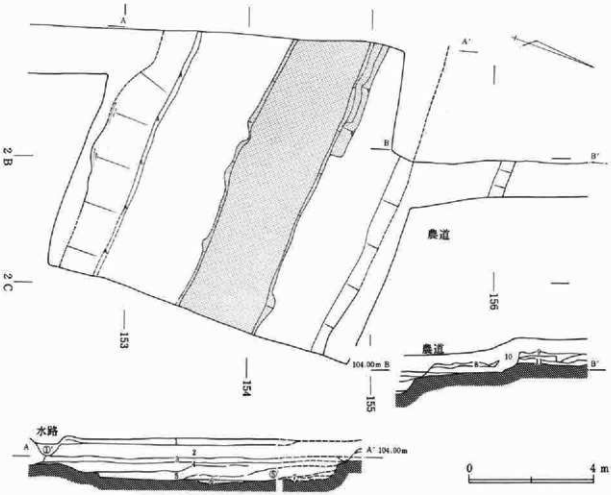
SD12第2拡張区

第72図 SD12第1・2拡張区実測図 1：120

SD12—第1拡張区（第71図、写真26）

SD12—第1拡張区はS～V—120～123区に設定した。調査前は水田であった。試掘の結果からはSD12がこの設定区で西方へ曲ることが想定でき、その曲りとなる隅部を探すべく拡張区を設定した。

結果は、大きく曲り込む隅部がV—121にあり、試掘のYライントレンチでの断面形がU字状を呈していたものが、この調査区に至ってU字状からV字状に変化することが判った。しかし、Yライントレンチで SD12に西接して土壙状遺構が伴っていたが、この拡張区土層断面に見ることはできなかった。またSD12と交叉するSD13が検出された。その重複については、表土、埋土の多くを重機で剝ぎ取ったため、明らかでない。次にこの走行を生かし、SD12—第2拡張区を設定した。



①⑪/水田耕作土。
②　黒褐色、砂質土。
③　黒褐色、粘性土。
④　黒褐色で砂質土をラミナ状にまじえる。
⑤⑤'/黒褐色粘性土を主にわずか砂質層をはさむ。
⑥　ロームブロックを多くまじえる黒褐色粘性土（トーン）。
⑦　ロームブロック、砂質土を多くまじえる黒褐色土。
⑧　火山灰を多くまじえる砂質土（浅間山絵図の入軽石か）。
⑨　軽石粒を多く含む黒褐色土。
⑩　黒色土。
⑪　ローム層、黒色土漸移層。

第73図　SD20拡張区　1：120

SD12—第2拡張区（第72図、写真27・28）

SD12—第2拡張区はK・L—125・126に設定した。第1拡張区におけるSD12の走行所見と、地勢に基づく判断によって、SD12がこの位置で曲ると想定しての設定であった。排土は表土および埋土の一部を重機によって除去し、他は人力による。

その結果、SD12の隅部は検出され、その延長が北西方向に向かうことが明らかとなった。

SD12—第3拡張区（第36図）

SD12—第3拡張区はL・M—143・144に、先の第2拡張区の所見と地勢による判断に基づき設定した。しかし、水田地帯にはすでに引水が行われており、調査対象地が耕作中の水田に接するため、湧水が顕著であり、SD12の北西隅を究められず調査を中断した。

(5) SD20についての拡張区

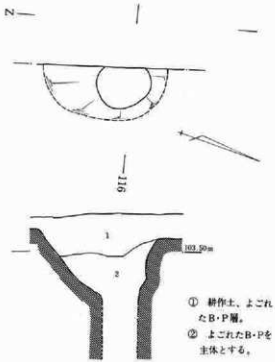
SD20（第73図）

SD20は館状遺構の北縁を画する堀切りである。調査前は堀切り成りに水田となり、明らかにこの直下に堀切り遺構の存在を直感させるものがあった。吹屋遺跡調査実施の理由づけになった個所である。

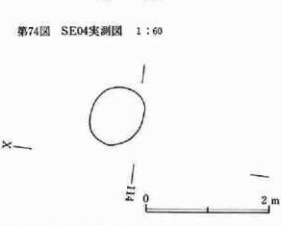
調査は底部の一部を除き、重機により排土した。その結果、幅9.6m、底幅2.6mの比較的浅い堀切りであることが明らかとなった。底面は平らであるがその中央部に浅い凹みがあり、内部に地山ブロックが築土されて硬化していた（第73図トーン）。立ち上りは北側が60°前後の急な勾配を有し、南側はゆるやかに立ち上る。さらに北側には幅約1.8mの犬走り状平坦部があり、通路として用いられたらしく硬化していた。埋土は第73図土層断面④上面まで、溝の埋土は掘り直しを示し、それより上方は水田耕作に伴う水平層と判断された。SD20について、さらに全面拡張を始めたが、排土中、周辺水田に引水され調査を中断した。その過程で、北縁の犬走り状平坦面はこの西数十mにわたり存在していた。

SE04（第74図）

SE04はZ—118・119に位置する。規模は直径2.0m、深さ2.3+αmである。形態は井筒上部が、ロート状に開き出し、井筒下方が筒形であった。埋土は上下2層に区分され、上方が砂質で下方がいく分締った砂質である。隣接地に水路があるため、表土1.2mで、湧水がいちじるしく、井筒部下の調査を断念した。なお1mのボーリング棒により、排土した1.2m以下、+1m以上の深さを確認している。



第74図 SE04実測図 1：60



第75図 SE05実測図 1：60

SE05（第75図）

SE05はY－113・114に位置する。関越道に伴う工事によって発見された。規模は直径0.93mであった。深さは、検出面より0.5mまで掘土したが、湧水がいちじるしいため、調査を中断した。なお、ボーリング棒により、それ以下、＋1m以上の深さがあることを確認している。

SE06（第76・77図、写真41）

SE06はQ・R－114に位置する。小拡張区の北東隅で検出された。規模は直径0.78m、深さ2.12mであった。形態は井筒部が直で、底面が丸底となっていた。埋土は2区分でき上層が砂質土で下層が粘性の黒色土であった。埋土下層から加工木が出土している。

SE06周辺のSE04、SE05の計3基は、他の井戸に比らべ、口径の小ささが特記される。

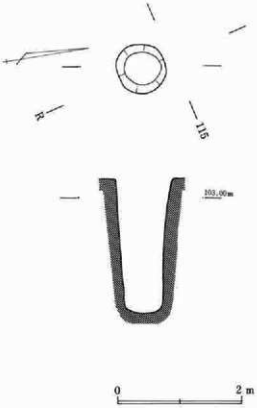
SE06出土の加工木は2点あり、このほか自然木小片、木根、竹小片などが出土している。

第77図1は加工木で、全長23.6＋αcm、最大幅2.5＋αcmを計る。加工面は側部、平の両面であり、それぞれ延長部分を欠いている。全体は2片に割れていたが接合できた。

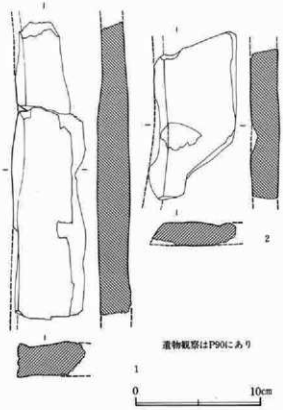
各部の面取りは不明瞭ではあるが大まかな削り痕が窺える。側部、平とに平らな面拵はされていない。木質種は、横断面側に道管がたくさんあるので広葉樹系に見える。用途不明である。

第77図2は加工木で、全長11.5＋αcm、最大幅2.2＋αcmを計る。加工面は側部、平の両面であり、それぞれ延長部分を欠いている。側部片端部は鋭利である。

各部の面取りは不明瞭ながら大まかな削り痕が窺える。側部、平とも平らに面拵されていない。木質種は、横断面側に道管がたくさんあるので広葉樹系と考えられる。用途不明である。



第76図　SE06実測図　　1：60



第77図　SE06出土遺物　　1：3

SE09（第78図、写真42）

SE09は２Ａ－153に位置している。SE09は試掘段階の２Ａ－154～155トレンチ調査によって検出された。調査前は水田であった。

規模は最大径1.51m、深さ2.0mで、比較的小規模な井戸跡である。

形態は、井筒部上面が大きく開き出し、中位は直胴的で、さらに下部に至って急に広がり、あぐり状となる。底部は丸底気味である。

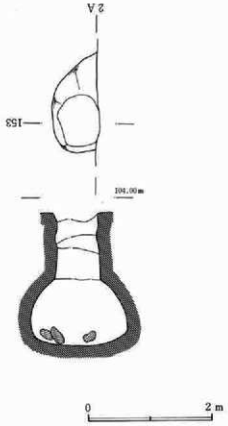
発見面は、B軽石を含まない第Ⅳ層の黒褐色土に至ってであった。SE01～08までが中世井戸跡であったのと異なる。発見面段階から、井戸の凹み内には人頭大の川原石が数個検出され、底部に至るまで川原石の出土は続いた。その状態は、石をもって埋塊したという程ではなく、散漫であった。埋土の質は上方が粗質な黒褐色土で、下方は粘性の強い黒色土であった。

SE09の出土遺物は、埋土中から緑釉陶器片とさるのこしかけの出土があった。埋土の質感は古代である。

第79図１は緑釉陶器、碗の体部から口縁部にかけての破片である。釉は透明に近い黄緑色で発色が極めて悪い。胎土に夾雑物は少ないがざんぐりしている。素地の発色はやや酸化し黄褐色を呈する。成形は体部外面にわずか轆轤目が立つ。口縁端部は丸みをおびる。内面の底際は、轆轤成形後に篦研磨がなされている。

第79図２井戸内底際から出土したものである。さるのこしかけ科の菌類である。形態は扁平で半円形を呈し、背面に樹幹に付いていた痕跡がある。表面は円滑であるが、裏面は細い多孔質となっている。量目は、最大幅16.0cm、最大厚4.2cmである。

なお部分的に欠損しているが、割れ口は古い。



第78図　SE09実測図　　1：60

第79図　SE09出土遺物　　1：3

(6)　トレンチ調査区

トレンチ調査により検出された溝、掘立遺構、東山道推定地、B軽石直下水田などがあり、一部において、古地形をも知ることができた。

溝状遺構

SD09（第39図）

SD09はP4の第1拡張区において検出されているが、さらに延長を知るべく補足調査した。第39図下がその土層断面である。№9～11までがSD06の埋没土であり、№1～3がSD09と同一に重複する現代水路とその堆積土である。第1拡張区とM～Q－95トレンチで得たSD09の所見はその走行において、水田地帯と畑地との間に生じた地形の変換部に一致し、北東へ走行すると考えられ、しかも規模は幅約5mが想定されることから、SD10以北では館状遺構の東縁を画するものと考えられる。SD09について遺物の出土はないが、埋土の質感は中世である。

SD11（第36図）

SD11は第36図のとおり4個所で走行を確認している。第83図にその一部を示した。形態は2段堀りとなっており、上幅約7mで、中程に幅0.7m、深さ0.6mの溝が入る。この2段堀の形態はX－115～118、Z－114～117トレンチ間には見られず浅い凹みとなる。軸方向はN1°Wである。埋土の質感は中世か近世初頭頃であろう。

SD13（第71・84図）

SD13はSD12－第1拡張区でSD12と交叉し、Y－129で現れる。SD12－第1拡張区とY－129で検出した。形態、規模も共通するため同一溝として捉えた。幅0.96m、軸方向N8°30′Wである。構築の時代はSD12に切られるため中世である。

SD22（第37図）

SD22はS－170で検出されたものの、他トレンチにその延長は見られず土坑であるかもしれない。幅0.6m、深さ0.3m、軸方向N1°40′Wである。埋土は砂質で、中、近世の所産と考えられる。

SD23（第37図）

170ライントレンチでSD22の東側に検出された。規模もほぼ同様で、この延長は他トレンチで検知されないため土坑であるかもしれない。幅0.6m、深さ0.5m、軸方向N4°Eである。埋土は砂質で、中、近世の所産と考えられる。

SD24（第37図）

V－170で検出された。この延長は他トレンチで検出されないため土坑であるかもしれない。幅0.8m、深さ0.5m、軸方向N5°Wである。埋土は砂質で中、近世の所産と考えられる。

SD25（第37図）

SD25はQ～T－172トレンチ、T－172～177トレンチ、V－169～179トレンチ間の3個所で検出された。いずれもB軽石が順堆積か、汚れた状態で堆積していた。このSD24の構築時点はB軽石以前にあり、T－173では地山まで掘られた構築面と、B軽石順堆積層下面まで20cm余りの間層が生じていた。形態は丸底気味で、幅0.68m、軸方向N26°30′Eである。

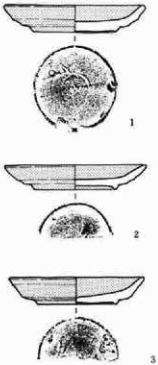
SD26（第37）

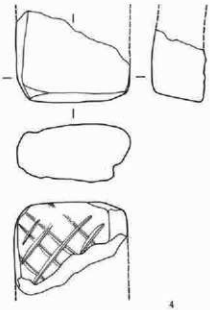
SD26はX－182、2E・2F－187～189において検出された。東方に向かい序々に規模を増す。規模は2E－192で4.25m、深さ0.6m、軸走行N13°～25°Eである。時期は平安時代で、10世紀段階の土器が若干出土している。

吹屋遺跡

SD28（第37図）

SD28はW−198・199区トレンチに存在し幅0.9m、深さ0.45m、軸方向N7°30′Eの走行がある。底の傾きは北下りとなり、W−200区内で開きだし、消えてしまう。埋土は砂質であった。W−199内で陶器皿片と鋳物型用具にかかわる小形ブロックの出土があり、一括遺物として注目される。





第80図　SD28出土遺物　　1：3

図・写真No	土器類（器種）	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	摘要
1	施釉陶器（皿）	埋土下方	口径11.5cm 器高2.2cm	夾雑物なし。石英粒。灰白色。	内面に僅かながら轆轤目あり。底面は削り出し高台。立ち上がり下半筐による再調整あり。	美濃焼。
2	施釉陶器（皿）	埋土下方	口径11.5cm 器高2.2cm	夾雑物なし。石英粒。灰白色。	内面に僅かながら轆轤目あり。底面は削り出し高台。立ち上がり下半筐による再調整あり。	美濃焼。
3	施釉陶器（皿）	埋土下方	口径11.0cm 器高2.2cm	夾雑物なし。石英粒。灰白色。	内面に僅かながら轆轤目あり。底面は削り出し高台。立ち上がり下半筐による再調整あり。	美濃焼。
4	鋳型関連遺物（土製品）	埋土下方	幅9.1cm	砂を多く夾雑する。茶褐色。	方型の粘土材で表面に斜格子の刻み目あり。小口面は丸成形されている。鋳型の型おさえか。	

第22表　SD28出土遺物一覧

SD29（第37図）

SD29は、X－126、2E－126の2個所のトレンチで検出された。幅0.7m、深さ0.4m、軸走向N27°Eである。時期は、平安時代でも10世紀段階の土器を含んでいた。

掘立柱穴群（第86図）

掘立柱穴は、吹屋遺跡全体にわたる膨大なトレンチを設定したにもかかわらず、Y－132～136間で検出された以外に検出されず、このことが、おびただしい柱穴群が検出された第3拡張区設定の動機を提供してくれた。第86図上では4個の柱穴があるが、うち3穴に柱痕が見られた。掘り方規模は余り大きくない。

このY－132～136間の柱穴群は、近接した距離から第3拡張区に存在した柱穴群の東延長上にあると考えられる。

東山道推定地（第86図）

東山道推定位置は諸説あり、吹屋遺跡内を通過する万願寺南縁農道もその一つであった。

この農道を2A－195で断ち割り、2E－195・196間で間際までトレンチを設定した。

その結果、2A－195では、現農道に北接して、近世磁器片を伴う小溝があり、それ以外に変化はなく、道路直下の硬化した砂質土も、古くから存続した形跡には見えなかった。検出された小溝は現水田、水路に近接し、おそらく近世以降の水路であろう。2E－195・196間では農道を切断しなかったが前者の所見と異なる様相が見られた。第86図中では中世溝と考えられる凹みが2E－197にあり、2E－195・196間にも同様な溝が現道を挟んで存在した。明言はできないが2E－195・196の状況は古代における道路的な痕跡があったとは見えず、中世以降の道としての可能性はあろう。

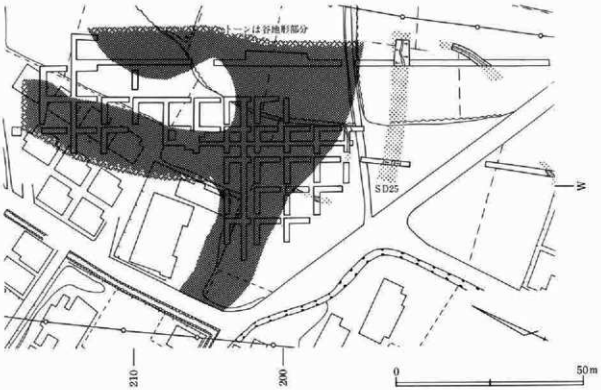
B軽石層下の水田遺構（第82図）

2E－184～215に設定した試掘トレンチにおいて2E－191～195、2E－198～208までの間に浅間山給源によるB軽石層（標準Ⅲ層）が厚い個所で10cmの層堆積を成していた。同時にB軽石が広域にある場合、通有の黒色粘性土（標準Ⅷ層）も認められた。この標準Ⅷ層はB軽石を欠く地域よりも広範に認められ、2E－184～215の大半に存在していた。中でも、2E－203、2E192において、5cm内外の高まりと幅約35cmの畦の高まりを確認した。この事実をふまえ、195～217にかけL字型トレンチを33本設定し検出に努め、部分的な拡張を計った。

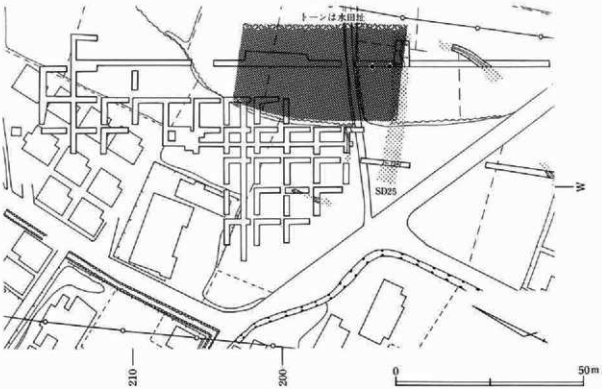
その結果、B軽石の広がりは、設定した33本のトレンチのほとんどに存在し、同時に直下に、黒色土の分布も全面に認めた。しかし、標準Ⅲ層上面にしっかりした畦状の高まりは認められず、幅の広い微妙な起伏を認めたに過ぎなかった。このL字状のトレンチの調査時点に2E－184～215の地域は、一段低い水田であったため、引水により水没してしまった。確かめるすべもなかったが、一段低い地形が、水田の有無の境目とすれば、標高106mの等高線以東に、B軽石直下の水田跡が存在した可能性が高い。

トレンチ調査に見られた火山灰層

トレンチ調査では、部分的に標準Ⅶ層であるC軽石、標準Ⅲ層であるB軽石などが認められたが、吹屋遺跡の中でそれらの火山堆積物が順良く堆積した個所がある。2E－198～210トレンチ間である。第87図では、上から浅間山給源によるB軽石層（標準Ⅲ層）、榛名山二ッ岳給源によるFA層（標準Ⅵ層）、浅間山給源によるC軽石層（標準Ⅶ層）があった。それぞれ火山灰層下特有の有機質の黒色粘性土も合せて認められる。B軽石を除くと、それぞれの火山堆積物は、地形成りに従って堆積しており、直下に水田跡存在の可能性は極めて低い。



第81図　弥生時代谷地形遺存範囲図　1：1,000



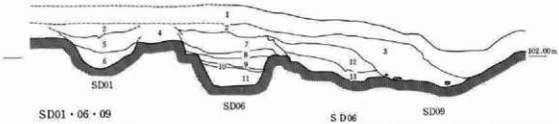
第82図　B軽石下水田の範囲想定図　1：1000　●は畦位置を示す

SD01

① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。上面はやや酸化気味。
③ 砂質の黒褐色土。
④ 砂質の黒褐色土。
⑤ 砂質の黒褐色土。
⑥ 砂質の黒灰色土。
⑦ 粘性の黒褐色土。地山ブロック含まず。

SD01・06・09

① 耕作土および表土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。
③ 砂と粘性土とが混る。暗灰色土。
④ 軽石を多く含む黒褐色土。
⑤～⑦は上記SD01に同じ



SD01・06・09

① 耕作土および表土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。上面はやや酸化気味。
③ 砂質の黒褐色土。下方は地山の淡灰色土ブロック含む。
④ シルト質の灰色土と砂質の黒褐色土とが混り合う。

SD01

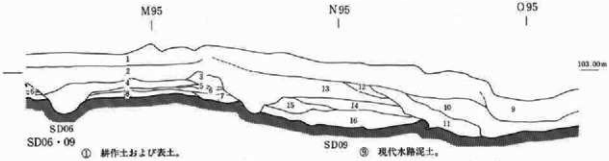
⑤ 砂質の黒褐色土。
⑥ 黒褐色粘性土と砂質黒褐色土とが混り合う。

S D06

⑦ 酸化気味の暗褐色ブロックを含む砂質の黒褐色土。
⑧ 上面がやや酸化し、地山ブロックを多く含む黒褐色土。
⑨ 砂と粘性の黒褐色土とが互層をなす。
⑩ 酸化気味の砂質土で褐色土。
⑪ 砂質土と粘性の黒褐色土とが互層をなす。

S D09

⑫ 砂質土と有機質を含む粘質土とが混り合う黒褐色土。
⑬ 砂とシルト質の灰色土とが混り合う淡灰色土。

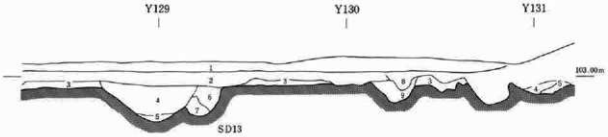


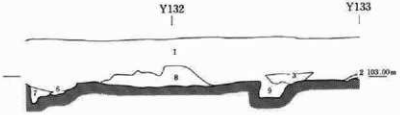
SD06・09

① 耕作土および表土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。
③ 粘性の黒褐色土。
④ 軽石を多く含む黒褐色土。
⑤ C軽石を多く含む黒褐色土。
⑥ C軽石を多く含む黒褐色土。
⑦ 黒色粘性土。
⑧ 黒色粘性土。
⑨ 現代水路泥土。
⑩ 砂質土と泥土とが互層をなす。
⑪ 細砂質と締った泥土とが互層をなす。
⑫ 軽石を多く含む黒褐色土。
⑬ 軽石を多く含む黒褐色土。
⑭ 酸化気味の黒灰色砂質土。
⑮ 軽石を多く含む黒褐色土。
⑯ 粘性の黒褐色土を主体とした有機質土。

0　2 m

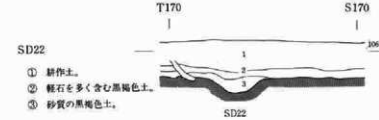
第83図　SD断面土層図　1：80





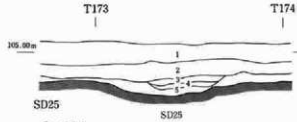
SD13

① 耕作土。
② 浅間山給源によるC軽石を多く含む黒褐色土。
③ ほとんど砂に近い黒褐色土。
④ やや酸化気味の砂質、黒褐色土。客土か。
⑤ 地山の黄灰色土ブロックを多く含む砂質の黒褐色土。客土か。
⑥ 黒色土ブロックを多く含む砂質の黒褐色土。客土か。
⑦ 木炭粒を多く含む砂質の黒褐色土。
⑧ 地山の黄灰色土ブロックを多く含む砂質の黒褐色土。客土か。
⑨ 砂質の黒褐色土。

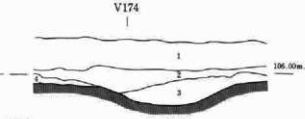


SD22

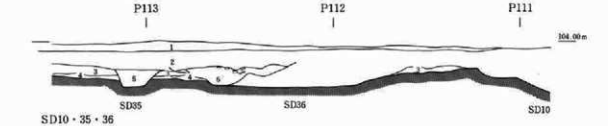
① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。
③ 砂質の黒褐色土。



① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。
③ B軽石を主とする砂質の黒褐色土。
④ B軽石層。順堆積層。
⑤ 粘性の黒褐色土。



① 耕作土。
② 下層はB軽石を主とし上層にしたがい少ない。砂質の黒褐色土。
③ 黒褐色粘性土。
④ 浅間山給源によるC軽石を多く含む砂質の黒褐色土。

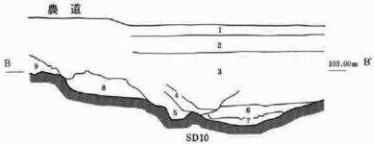


SD10・35・36

① 耕作土。
② 砂質の黒褐色土。上面は水田により酸化気味。
③ 浅間山給源のC軽石層と、B軽石の混る黒褐色土。
④ 浅間山給源によるC軽石を多く含む黒色土。
⑤ 砂質の黒褐色土。
⑥ 砂質の黒褐色土に地山の灰色ブロックを含む。

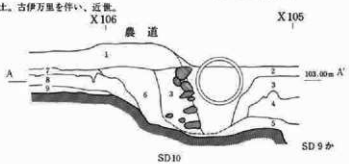
0 2 m

第84図 SD断面土層図 1:80



SD10

① 耕作土。
② B軽石を多く含む黒褐色土。上面は水田により酸化気味。
③ 泥土を主とした黒色土。近世、近代か。
④ 泥土を主とした黒色土。近世、近代か。
⑤ 砂質の黒褐色土。古伊万里を伴い、近世。
⑥ 砂質の黒褐色土。中世堀切埋没土。
⑦ 泥土を主とする黒色土。帯水の形跡か。中世堀切埋没土。
⑧ 砂質の黒褐色土。田畑のためか砂質土が互層をなす。
⑨ 黒褐色砂質土。

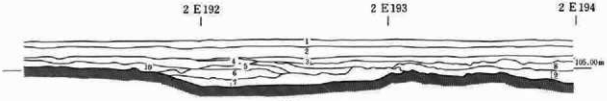


SD9・10

① 表土層。高まりの上面は現道。左は畑地。
② 現水路に伴う黒色泥土。
③ 粘質土と砂質土とが混り合う。石垣裏はひかえの客土か。
④ やや酸化気味で砂質の黒褐色土。
⑤ 砂を主とする淡灰色土。
⑥ 砂質の黒褐色土。
⑦ 軽石を多く含む黒褐色土。近世道の堆積土か。
⑧ 軽石を多く含む黒褐色土。近世道の堆積土か。
⑨ 粘性の黒褐色土。中世道の堆積土か。

SD11

① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。
③ 浅間山給源による、C軽石粒を多く含む黒褐色土。
④ 砂質の黒褐色土。



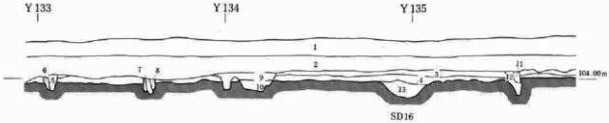
SD27

① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。上面は水田により酸化気味。
③ 浅間山給源によるB軽石層。崩壊堆積層。
④ 黒色粘性土。
⑤ 軽石をわずか含む粘性の黒褐色土。
⑥ 砂質の黒褐色土。水性堆積層。
⑦ 粘性の黒褐色土。
⑧ 砂質土と黒褐色粘性土との互層。水性堆積層。
⑨ 粘性の黒褐色土。
⑩ 粘性の黒褐色土。

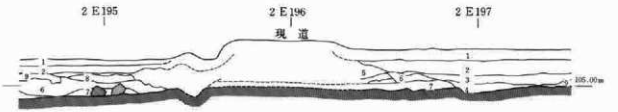
0　2 m

第85図　SD断面土層図　1：80

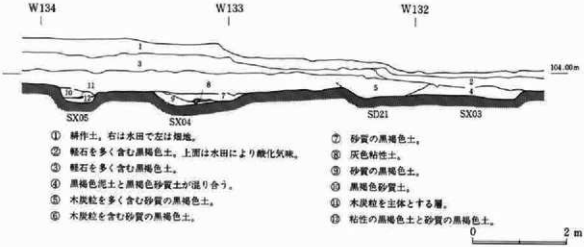
吹屋遺跡



① 耕作土。
② 砂質の黒褐色土。
③ やや締った砂質の黒褐色土。
④ 浅間山給源によるC軽石を多く含む黒褐色土。
⑤ 地山ブロックの少ない砂質の黒褐色土。
⑥ 地山の黄灰色粘性土ブロックを多く含む黒褐色砂質土。
⑦ 地山ブロックの少ない砂質の黒褐色土。柱痕か。
⑧ 地山の黄灰色粘性土ブロックを多く含む黒褐色砂質土。
⑨ 地山の黄灰色粘性土ブロックを多く含む黒褐色砂質土。
⑩ ⑨層中に木炭粒を多く含む砂質の黒褐色土。
⑪ 地山ブロックを含まず、木炭粒を多くまじえる黒褐色土。柱痕か。
⑫ 地山の黄灰色粘性土ブロックを多く含む黒褐色土。

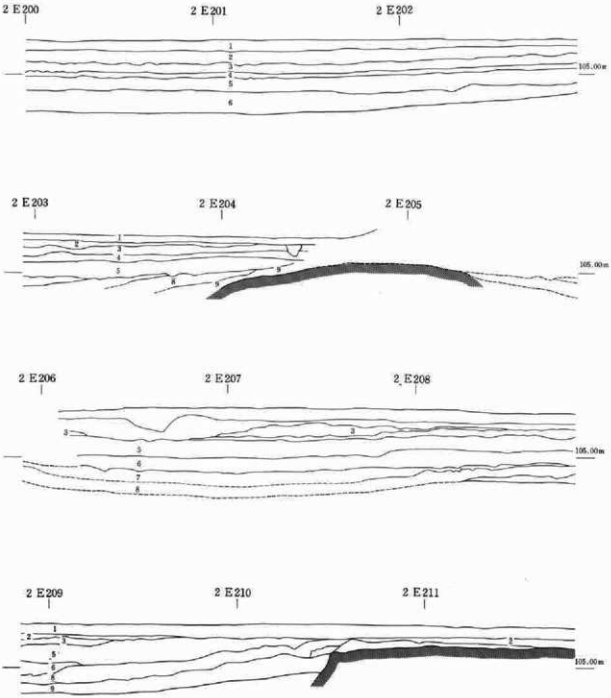


① 耕作土。
② 軽石を多く含む砂質の黒褐色土。水田のため酸化気味。
③ よごれたB軽石を多く含む。砂質の黒褐色土。
④ 砂を主とする淡灰色土層。
⑤ よごれたB軽石を主とする淡灰色土。堅く締まる。
⑥ 砂質土と黒褐色粘性土が互層をなしたり、混り合う土層。
⑦ 黒褐色粘性土。
⑧ B軽石層。堆積層。
⑨ 粘性の黒色土。



① 耕作土。右は水田で左は畑地。
② 軽石を多く含む黒褐色土。上面は水田により酸化気味。
③ 軽石を多く含む黒褐色土。
④ 黒褐色泥土と黒褐色砂質土が混り合う。
⑤ 木炭粒を多く含む砂質の黒褐色土。
⑥ 木炭粒を含む砂質の黒褐色土。
⑦ 砂質の黒褐色土。
⑧ 灰色粘性土。
⑨ 砂質の黒褐色土。
⑩ 黒褐色砂質土。
⑪ 木炭粒を主体とする層。
⑫ 粘性の黒褐色土と砂質の黒褐色土。

第86図 土層断面実測図 1：80



① 耕作土。
② 軽石を多く含む黒褐色土。上面は水田により酸化
③ B軽石層。順堆積。
④ 粘性をおびる黒色土。B軽石下の水田か。
⑤ 粘性をおびる黒褐色土。
⑥ 粘性をおびる黒褐色土。
⑦ 榛名山給源によるFA層。黄色。水性による二次堆積か。
⑧ 浅間山給源によるC軽石層。
⑨ 粘性の黒褐色土。
⑩ 黒色土と粘性の黒褐色土とが混る。

0　2 m

第87図　土層断面実測図　1：80

7 科学的検討

(1) 吹屋遺跡出土木材の樹種

群馬県高崎市日高町の日高遺跡に近接した中世の遺構遺跡で、ここから出土した木材15点について樹種の同定を行なった。その結果、13点がヒノキ類で、残りはクヌギ類、ケヤキそれぞれが1点ずつであった。以下に同定された標本のリストを附表1に示し、これらの樹種の簡単な記載とその顕微鏡写真を掲載した。これらの標本は既にポリエチレングリコール（PEG）によって保存処理がなされているため、同定に必要な十分な切片を作ることが困難な場合もあって、十分同定に耐え得るプレパラートが得られない場合もあった。なお、プレパラート作製法などについては日高遺跡の調査報告書を参照されたい。

1. ヒノキ類 Chamaecyparis ヒノキ科 図版Ⅰ－1～3（GFF－103）

垂直、水平両樹脂道を欠く針葉樹材で、夏材部は年輪界付近の数層の仮道管に限られる、放射仮道管も仮道管内壁の螺旋肥厚も欠き、放射柔組織の壁は薄く、分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個、樹脂細胞は夏材部に多く、水平壁は数珠状に肥厚している、などからヒノキ科のヒノキ属の材であることがわかる。この属にはヒノキとサワラがあり、木材としては材質がかなり違うが、組織学的には互いによく似ており、区別が困難なのでヒノキ類としてまとめておく。

2. クヌギ類 Quercus cf. acutissima Carruth. ブナ科 図版Ⅰ－6（GFF－90）

年輪の始めに大道管があり、そこから順次径を減じて晩材部では中型で丸い道管が放射方向に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性と複合放射組織がある、などからブナ科コナラ属のうち、クヌギ（Quercus acutissima）かアベマキ（Q. variabilis）の材であることがわかる。クヌギは広く全国の暖帯から温帯に、アベマキは関東南部以西の暖帯から温帯にかけて分布している。当遺跡の出土材が付近に自生したものを利用したものであるとすればクヌギの可能性が高いが、この両者は組織学的には区別が困難であるので、ここではクヌギ類としておく。

3. ケヤキ Zelkova serrata Thunb. ニレ科 図版Ⅰ－4～5（GFF－88）

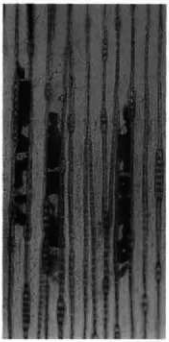
年輪の始めに大道管が一列に並び、晩材部には角ばった小道管が蜂巣状あるいは接線状に多数が集合する環孔材で、道管の穿孔は単一、内壁に明瞭な螺旋肥厚を持ち、放射組織は8細胞幅位になり異性、上下縁に大きな結晶細胞を持つ、などからニレ科のケヤキの材であることがわかる。PEG処理により晩材部の集合した道管に変形をきたしており、観察しにくい。

（鈴木 三男・能代修一）

標本番号	樹種	製品名
GFF－88	ヒノキ類	板草履 （第45図1）
89	ケヤキ	用途不詳 （第45図2）
90	クヌギ類	〃 （第45図3）
92	ヒノキ類	曲物底板 （第59図2）
93	ヒノキ類	不詳 （第59図3）
94	ヒノキ類	板草履 （第60図6）
95	ヒノキ類	〃 （第60図7）
97	ヒノキ類	〃 （第60図9）
98	ヒノキ類	〃 （第60図10）
99	ヒノキ類	〃 （第60図11）
100	ヒノキ類	不詳 （第60図12）
101	ヒノキ類	板草履か （第60図13）
102	ヒノキ類	板草履 （第60図14）
103	ヒノキ類	板材 （第60図15）

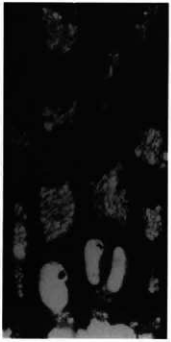
附表1 吹屋遺跡出土木材の樹種

1．ヒノキ類(GFF−103)
木口面×40



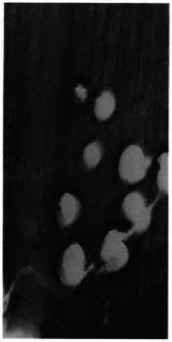
2．同　板目面×100

3．同　柱目面×200



4．ケヤキ(GFF−89)
木口面×40

5．同　板目面×100



6．クヌギ(GFF−90)
木口面×40

付図1　顕微鏡による写真撮影

8 考　　察

吹屋遺跡から検出された個別遺構は前章で触れたとおりであるが、まとめとして細述しなければならない点がいくつかある。それは堀切りに区画され防禦的機能と生活機能を有する館遺構や南接の日高遺跡で検出された弥生時代水田の延長の自然地形、さらには土地利用の変遷などもそうであり、以下、そうした点に触れておきたい。

(1) 村東館址の調査所見とその検討

① 関連遺構とその年代

遺跡地南半に、SD09、SD10、SD20などに区画され内部に井戸などの施設を伴う遺構群が存在するが、それぞれの遺構年代に触れておかないと相互の関連を明らかにし得ないので、以下明記したい。

SD09については出土遺物がないので次のように解釈される。SD10・20の底部に互層をなした砂の堆積があり、ある段階に東流水したことがわかる。その排水については東方に堀切りを想定しないと、排水できないのでSD10・20に接続しているSD09がその機能を果すと考えられ、この場合、構築年代は、SD10・20の構築年代に直結するはずである。

SD10は、埋土の下方まで近世陶・磁器片が含まれ、上方は方向性を軌を一にして現代農業水路が設けられていた。その埋没過程を土層断面から見れば、数度にわたり改修、掘り直しが認められ、長期の維持、管理と存続が窺えた。さらにSD10の北側中段には犬走り状の平坦面があり、その上面は極めて硬く道の可能性が強かった。その土層断面から機能した年代を押し測れば、中世から近世初頭が考えられた。そしてSD10の底面にはSE01～03の3基の井戸跡が並存して検出され、発見面レベルはSD10の底面である。それぞれの年代は井戸形態・出土遺物検討から14世紀代の構築が考えられた。SD10の底面に3基の井戸が並存して構築された点については、SD10に先だって井戸が存在し、遇然にも3基の井戸が堀切り底部に並んだとは考えがたく、堀切りが先行し、その最底部をねらって3基の井戸をさく井したとした方が蓋然性が高くなろう。このことからSEに先行し、SD10が存在したと考えたい。井戸跡の埋土には泥質土が充満しているため、SD10の機能の当初と井戸の存在は密接に関連していたと考えられ、SD10の構築は14世紀代であったと考えたい。その後、SD10は現代まで使用された。

SD20は、出土遺物がなく時代認定が困難であるが、堀切り断面形態は幅広の平底となり急勾配の両立ち上りを含め逆台形状を呈している。この形態は小溝や後世農業用水路を除けば中世前半に類似例が多く、中世前半の可能性がもたれるものである。埋土の質感は、下方ではやや締った砂質の黒褐色土で、中世としうる土質であった。上方には砂質土が互層をなし、この堀切りが閉塞的な堀切りでないことが判る。

SD12に伴う出土遺物はなく時代認定が困難である。SD12は大規模な堀切りではないが、SD12第2拡張区・第3拡張区において隅部が検出され、SD12第1拡張区に北西接して土塁状の遺構が存在した。その複雑な方向性や土塁状の遺構の並存などから利水・区画など一般的な機能は想定しがたいので、SD10・SD20などに関連した遺構で一連の構築と考えたい。

SE01はSE02・03などと共通の立地、井戸形態にあるため、それらの時期と共通した時期の構築と見な

される。

SE02は埋土中から漆塗の小皿（第43図）が出土している。それは土師質土器皿の形態に酷似し、土師質土器皿を模したか、この種の皿形態が定形化していたと考えられる。土師質土器皿の変遷観からすればこの形態は、鎌倉時代からの伝統を引くA系列にあり、14世紀代があたえられる。

SE03の埋土中から板草履が出土している。板草履は普遍性の高い木器種であり、中世前半に出土が集中するため、本例も13・14世紀の所産と見なされる。

SE04・05・06については、埋没土中に浅間山給源のB軽石を二次的に含み、質感はSE07・08に共通した暗黒褐色を呈し、近接した年代が想定できる。さらに推考すれば、この地帯が耕地化するのに先だって存在したと考えられる。つまり、この一角が生活空間として利用されていた頃にである。

SE07は、埋土中から板草履が出土している。板草履はSE03の説明で触れたとおり、中世前半の所産が考えられる。井戸の構築も、その頃であろう。

SE08からは常滑焼の第Ⅲ期に類する第63図1・2、第64図4が出土し、そのほか一括廃棄としうる大量な常滑焼片の出土があった。常滑焼の第Ⅲ期については13世紀後半から14世紀前半の年代観が提示されており、出土常滑焼のうち最も新しい第63図1は第Ⅲ期の終末に近い14世紀前半があたえられる。井戸の構築も、その頃であろう。

第3拡張区SA群、柵列群であるが、群在したので、ほぼ共通の目的を果たすために機能したと考えられ、特にSX群とは方向性を一致させたり、直交の形をとり、相互が意識された関係にあった。このためSA群はSX群と直結した時期の構築と見なされ、14世紀前半を想定できる。

第3拡張区SX群の機能はSX02・04で白灰色粘土集積が認められ、この一群が井戸跡に近接すること、低地部分にまとまって存在する点などを考え合わせれば工房跡が考えられる。ただし形態に統一観がないので、それぞれの目的に沿った数種の作業場であったかもしれない。竪穴住居様に地中を掘り凹めている点から生活址のようにも見えるが、しっかりした踏床が形成されていないこと、柵列群の存在する位置より20～30cmほど低く、高燥な場所ではないことなどから生活址とは思えないのである。小遺構の場合、機能継続は、そう長期に亘るとは考え難いので、これらSX群は一連の短期構築物と考えたい。

SX群の出土遺物については次のとおりである。

SX01からは第48図4の軟質陶器製の大形盤形が出土し、その変遷から14世紀前半の製作年代があたえられる。

SX02からは第50図1の常滑焼の大甕口縁部が出土している。その口縁部形態は常滑焼第Ⅲ期に類し、13世紀後半から14世紀前半の年代があたえられる。

SX03からは、第52図の中国南宋代の梅瓶が出土し、13世紀代が考えられる。また第55図7の軟質陶器製の鉢が出土している。形態は新田郡尾島町東照宮古墓群から出土した元応二（1320）年銘の同種よ

遺構名	世紀				
	13	14	15	16	近世
SA群					
SX群					
SX01					
SX02					
SX03					
SX04					
SD09					
SD10					
SD12					
SD20					
SE01					
SE02					
SE03					
SE04					
SE05					
SE06					
SE07					
SE08					

遺構相互から関連づけた相対年代

遺物から求めた相対年代（遺構相互の関連を除く）

第88図　遺構年代対比図

りも底が大きく、後出要素が強いため14世紀中頃の所産が考えられそれをSX04の遺構年代としたい。

これら出土遺物からすると、14世紀中頃の軟質陶器製の鉢が最も新しく、他例は13世紀後半から14世紀前半に主体があり、さらに小遺構の機能存続を考慮すれば、SX群の構築は14世紀前半になされたと解釈される。

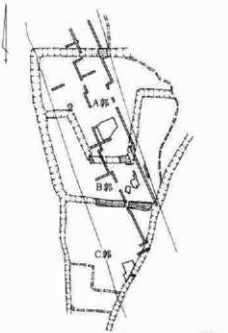
第1拡張区からは第38図2の美濃焼の灰釉小型香炉片が出土し、その編年観にしたがえば15世紀前半の所産が考えられるが、発見面レベルの高いSD01周辺から出土しているので遺構に直結しない可能性が高い。遺構に関してはSD09がSD10・20と直接関連性を持つこと、SD01・06は平底溝であり中世でも古い溝形態に属すこと、などからすれば、中世前半に構築された可能性がある。SD01・04・05・06・08・09などの埋土には地山ブロックが多く含まれ、人為埋塡の可能性が考えられる。それらについて一括埋没の同時性はSD01・07、05・06などにより土層を欠くため得られなかったが、共通の意図により埋めもどしがなされた可能性は強いであろう。そうした作意性は、ある程度、大がかりな作業が想定でき、その場合、吹屋館址の所作に伴った可能性は充分にあろう。

各遺構の構築時期はSD10が現代まで継続使用された例と第1拡張区出土の第38図2の香炉片を除外すると、各遺構、遺物の年代観は13世紀後半から14世紀前半の100年間にほぼ時期限定でき、その幅の中で遺構相互の共存性が生じる。さらにSD10・20は農業用水と考えられない規模であること、SD12は単純な方向性でなく、農業用水や耕地区画のための溝とは考えがたい点を推考すれば、これら3条の堀切り遺構は城・館址などに伴う防禦のための堀り遺構としうるであろう。このことをふまえれば前述したSA・SX・SEなどの遺構群が内部に伴うとした場合に、時期的、内容的にも矛盾が生じないと考えられるので、これらを中世館址に伴う一連の遺構と解釈し、総称を以降、中尾町所在の小字名称から村東館址と呼びたい。

② 館址の規模と諸施設

村東館址の北縁はSD20以北に関連の遺構・遺物が無いのでSD20を北縁と見てよく、東縁はSD09が一部を落差約2mの台地端の傾斜変換部を利用した可能性も高いが調査区外にあり明瞭でない。傾斜変換部を利用した場合には館址、北郭は、東西にほぼ対称となり、外縁下に堀切りを想定する必要があろう。西縁は調査地外の西接水田が堀切り様の区画を呈しているため堀切り存在の可能性が濃厚で、それを西縁としたい。南限については調査地外となってしまうがSD09と推定西堀切りとを連結する個所が一段低まり、水田となっているので、それを捉え、南限としたい。これらに囲まれた範囲が館址域で、さらにSD10・12の堀切りが内部を3分し、その単位を北よりA郭・B郭・C郭と称したい。

全長はSD20北縁から推定南限端まで310m、SD10・20間の西側で168mとなる。168mはおよそ、560尺で、1町半には20尺分、約6m大きすぎる。東西の最大幅は推定西堀切り、東傾斜変換部から求めると161mほどとなり、SD10の総長をとれば108.7mで



第89図 村東館址の平面形態 1:4,500

前者は約1.5町、後者は1町となる。SD12の南端の逆台形部分をB郭内で測定すると54mで半町分となり、縄ばりを繞らすについては計測を行い郭取りした可能性が高い。

調査時点で館址としての性格を考慮し、構造について明らかにすべく留意していたので、留意点を次に触れておきたい。

SD10の中央部に土橋の可能性を考えていたが、結果的には検出されなかった。ただ、第1拡張区のL—111区内の底面が東西の分水点となり、その個所がSD10のほぼ中点に当っていた。この所作は堀切り構築技法の一つであるのか、後世の溝が重複し、結果的にそうなったのか、あるいは渡橋部を示唆するのか明瞭にすることはできなかった。

館址中軸線はSD10の中点とA郭東西最大幅の中点を結んだ線が南北中軸で、東西中軸は南北中軸の中点を直交させた位置であろうと仮定し、中枢施設の割り出しに努めた。南北中軸と東西中軸の交点が第3拡張区である。その一角は、試掘用の二本の南北トレンチ130～137間に掘立柱穴が当っており、A郭北半、B・C郭では皆無であったので、その個所に館址中枢部があると考えざるを得なかった。調査の結果、第3拡張区は、東・西下りの中央部にあり、南北軸の中央としてよい地勢にあったが、館の中枢部としうる大建造物跡は検出されなかった。となると館址の中枢部はどこに存在したのであろうか。館の平面形態から主郭はA郭に当り、南半は第3拡張区があるため、北半に可能性が求められる。A郭の北半は水田化し、第3拡張区より一段低い地勢となっていた。該当個所のトレンチ断面は水田耕作土直下は地山層で、地山層上面に柱穴は見られず、遺構があったとしても平夷された可能性があった。しかし、平夷されたとしても柱穴の痕跡は若干、残ると誰しもが思うであろう。調査時点において担当者自身もそう考えていた。調査が終了し、本調査報告を作成するまでに約5ケ年の歳月が流れた。その間、発掘調査例の増加に伴って県内における中世掘立柱建物の実態と傾向が序々に判って来た。検出傾向は中世前半に希薄で後半に集中している。現在までのところ、確認されている中世掘立建物跡のうち、最も古い例は本書掲載の元島名B遺跡SB01・02で14世紀代が考えられ、それ以降、15・16世紀に位置づけられる例は、一般住居建築の大半が掘立建物であったとして良いほど検出されている。ところが13・14世紀代はまったく希薄で、通有の場合、掘立柱穴を用いなかったことを考えざるを得ないのである。ただし、社寺に伴う堂宇や、城郭の枢要建物など特殊な建築物は、その必要性に応じて掘立柱を用いた可能性は充分にあろう。当時の人々からすれば掘立建物に対する観念が任意的であったと考えられるが、このことが直ちに建物の建築技術が安易であったか高度であったかに起因するかは別問題であろう。そうした地域傾向をふまえれば村東館址の中枢建物は、時期的に掘立柱建物でなかったと考えられ、A郭の北半に中枢郭があった可能性を指摘しておきたい。第3拡張区のSAが掘立柱であるのは、そうしなければ柵を構築することができなかった技術的な理由によるためであろう。またSA05に限っては2個所、直角に曲る個所を有すること、柱穴内に柱支え用の石材を設置するなど周到さが認められ、他の柵列とは異なった構造と特殊な機能が示唆され、建物に伴う縁・庇などの支持柱穴であった可能性がもたれる。SA05については推測が多いので可能性ありとしておきたい。

土塁については、SD12のA郭側に幅約2mにわたり土塁状の遺構を認めたほかは確認できなかった。SD10・20の堀切り遺構に伴って存在が予測され注意をはらったが確認できなかった。C郭では人為埋墳と考えられる不自然な地山ブロックの入るSD01・05・06などの溝があり、そこは郭内に土塁を想定しても不思議ではない位置であった。

土橋については、SD10でも触れたとおり、意識して調査に当った。しかし、SD09・12・20など主要堀切りの埋土底部には、流水に伴う砂の堆積が認められ地山造り出しの固定的土橋の存在は否定的で、木橋の想定が必要であった。木橋については、第1拡

張区のSD06に土橋状の切り残し、接してSD07・08に溝の食違いが見られるので、その周辺に SD09を渡るための出入口があった可能性が持たれる。

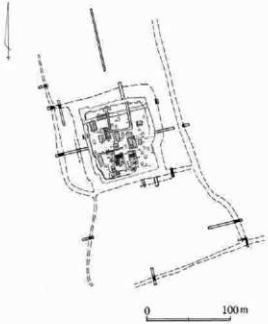
③ 村東館址の形態と機能

次に村東館址の形態と機能について触れたい。館は各遺構が複合的に機能して成立した大遺構である。このため各遺構を単独で捉えても、ある程度の意味しかなさないので、ここでは全体観をみたい。全体観を得るためには比較対照しうる別素材が必要であるので、近年、調査が実施され、全体観がある程度明瞭な例に矢島遺跡・寺の内遺跡例があり、それらから求めたい。

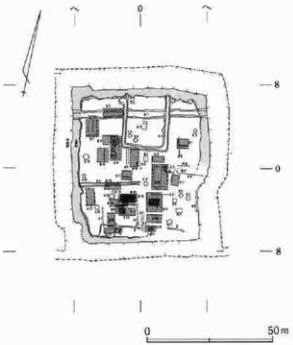
1. 矢島遺跡[6]（矢島館址）

矢島遺跡は高崎市浜川町にある。榛名山南麓から裾にかけ扇状地形が発達し、遺跡地はその末端の平地との変換部地帯に位置する。調査は圃場整備に伴い昭和53年に高崎市教育委員会によって実施された。その結果、外堀・内堀に区画された館址が検出された。幅約７mの内堀に区画された内郭は南北約80m、東西約75mの規模を持ち、四至には幅４～5.5mの土塁跡が検出され、南西部に角欠き、北西隅に張り出しが設けられていた。内部には主殿と推定される建物をはじめとし、29棟の掘立柱建物跡、10基の竪穴状遺構、17基の井戸跡などが検出された。出土遺物には中国青磁・白磁、北宋・明銭、常滑焼大甕、軟質陶器製の鉢・内耳鍋、土師質土器皿・香炉、石臼、墓石などが出土した。館址に直結すると考えられる遺物類は15・16世紀にあり、地域伝承もあわせ当地域に台頭した長野氏一族の居館と推定された。矢島遺跡の館址の調査は、内郭の全掘を実施した稀少例で、館の構造・機能を知るうえで重要な存在である。以降この館址を矢島館址と呼びたい。

館址の構造は、内堀と外堀とそれに区画された郭から構成されている。調査では北外郭、北外堀の延長がどこまで遠しているのか調査が及ばず不明瞭さを残している。このため外郭間の東西幅153m、南北長256＋αmである。外郭と内郭は内堀の北西隅、南西隅、東西隅に外堀に通ずる小堀切りをもうけ連結している。それに伴い、外郭の東・西・南側に郭囲が存在する。東・西は脇郭としての小規模な単位であるが、南側の外郭は内郭と同等規模を持っている。しかし外郭の郭内は未調査のため、どのような機能



第90図　矢島館址の平面形態　1：4500（同報告を加除筆）



第91図　矢島館址　1：1500（報告を加除筆）

が果たされていたかは不明である。ただ南外郭が内堀に接する部分には土塁跡とその東端部が検出され、南外郭が矢島館址に伴うのは確であろう。寺の内郭は幅10～14mで深さ約2mの内堀がめぐり、寺の内館址の内堀より大規模である。それに接して4～5m幅の土塁痕がめぐって検出され、南東隅には角欠き、北西隅には張り出し、東辺中程に折れを設けるなど、築城に伴う構築法が用いられ、館城的な機能意識を窺うことができる。内郭郭は土塁がめぐっているので、内郭の活用範囲は南北で77m、東西で67m、内堀の外縁からは南北約108m、東西約100mを測り、この測値から館の設定にあたっては外縁の縄ばりを基にし、それから堀幅・土塁を差し引いた規制によって生じたのが内郭の活用範囲となっていたと考えられる。内郭にはおびただしい掘立柱建物遺構があり、しかも大規模である。B06・09・10・12などは10mを越える規模で、主殿的なB07・10には縁が付き、9棟について庇が認められる。その配置は方位か、館の軸方向に一致させてはいるものの、公的な空間などは認められず、お互いがほどよく散漫とした配置となり、顕著な重複を見ない。庇か縁付の大形建物跡は内郭の北半に集中し、北半が館掌握者の居住域、ないしは中枢部であったと察せられる。南東郭には数棟の重複個所があり耐用年限の少ない建物群、つまり、雑屋的な建物が配されたと解釈される。そう解釈すると周囲に柵列が多いのも、雑屋的な建物を遮閉したと理解される。また内郭北半には一辺約30mの方形区画がある。内郭には屋根構造を持つと考えられた井戸が2基と、他に1基、B13とした掘立建物跡があり、時期は明言されていないが、周縁溝は比較的新しいとしている。厨房に関しては、内耳鍋を炊飯用具の一端として考え、廃棄に伴い近くの井戸に投棄したとすれば、井戸出土の内耳鍋は内郭の東・西端縁に近い位置から出土しており、郭内の東・西裏手に相当する。このことから厨房的施設は中央からはずれ、見えづらい位置にあったと推考される。竪穴状遺構は10基検出され、その多くは井戸跡と近接して存在するが内耳鍋、鉢、石臼などが出土しない井戸跡にも近接した例があり、竪穴状遺構が直ちに厨房に関連するとは認め難い。ただ南東隅に井戸跡と竪穴状遺構を伴う作業場的広がりがあり、竪穴状遺構が作業工房的機能を果たしていた可能性はあろう。これらを含む正面観については、南北中軸線上が空いていること、主殿的B10が中軸に面していること、他の建物の庇が南北軸に沿って作られていることなどから南正面であったであろうと考えられる。このことからすれば、建物は南を意識して、東西軸を取っても良さそうであるが大形建物はそうした観念よりも南北軸を意識しているので、通路的機能は南北に発達し、家屋の出入機能は東西に発達していると考えられる。そうした独特な観念が何に基づくものであったか、現状では明瞭でない。なお通路的な機能の中でも中軸上の通路的な部分は重要であったと見え、筋立った空間を取っている。

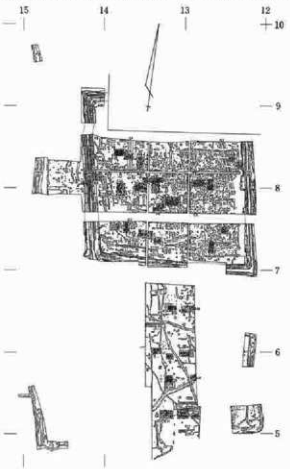
2. 寺の内遺跡[7]（寺の内館址）

寺の内遺跡は高崎市浜川町に所在する。矢島遺跡の南南東、約800mにある。調査は圃場整備に伴い昭和52年に高崎市教育委員会によって実施された。その結果、外堀・中堀・内堀に区画された館址が検出された。幅約7mの内堀りに画された内郭は南北約87m、東西約89.5mの規模を持ち、幅約2.5～4mの土塁痕が四至の東辺、南西隅、北西隅に認められ、内郭には、中枢と考えられる大形建物跡をはじめとし、23棟の掘立柱建物跡、10基の井戸跡などが検出された。出土遺物には、中国青磁・白磁、古銭、常滑焼大甕、軟質陶器製鉢・内耳鍋・火鉢、土師質土器皿、石臼、墓石などが出土した。館址に直結すると考えられる遺物類は15・16世紀にあり、長野氏に関連した館址の一つと考えられている。寺の内遺跡例は、県内において最初の内郭全掘の調査例として意義深く、以降、この館址を寺の内館址と呼びたい。

寺の内館址の構造は、内堀・中堀・外堀と、それに区画された郭から構成されている。調査では北外郭と中堀・外堀北半の延長がどこまで連しているの

か調査がおよんでないため不明瞭さを伴う。全体規模は、外郭間の東西幅約273～300m、南北長約225＋αmである。郭構造は中堀を置く点、矢島館址とは異なり、郭数・全体面積を広く取っている。東外堀・中堀とに挟まれた内堀りの南西隅に中堀に通ずる溝がもうけられ、南東隅側にも想定されるため郭数は少なくとも5郭となる。便宜上それらを内郭・東脇郭・西脇郭・南外郭・西外郭としておきたい。内郭は矢島館址より小規模な幅約8m、深さ約1.5mの内堀がめぐり、内郭東縁には、最大幅6mの土塁痕があり、西縁・南縁にも幅2.5mの土塁痕が認められ一部が20～30cmの高まりをもって残存している。北縁は未調査区に当り明瞭でない。西土塁痕と東土塁痕の幅の異なるのは東は外郭であり西方は中郭をひかえたため防禦能力を意識的に高めなかったのではないだろうか。内郭の西縁北端近くに浅い折れ状の屈曲部を見るが意識して構築されたか疑問である。内郭部は土塁がめぐっているのでそれを差し引いた活用規模は南北で約85m、東西で80mとなり、内堀りの外縁からは東西102m、南北104mを測り外縁の縄ばりを1町とし、それから堀幅、土塁幅を差し引いて生じたのが内郭の活用範囲となろう。しかし活用面積は矢島館址より大きくとも、内堀幅と深さ、土塁幅と高さは矢島館址より小規模となり防禦力はより低いことになるので館址の内郭の面積をもって優劣は決められないであろう。東・西外郭は郭内の調査が及んでいないため同時性を言及することはできないが、南外郭、西脇郭は一部について調査が実施され、ほぼ同期の遺物が出土しているので同時性はあったと見なされる。内郭には多数の掘立柱建物遺構がある。矢島館址のように10mを越える大規模な建築跡は検出されていないが主殿的な位置にある4号建築跡をはじめとし、8mを越える例が3棟ある。縁・庇を伴う例は見られず、矢島館址よりも建築所作が簡易化されている。その配置は、方位か館址の軸に一致させ、郭内に存在した23棟のうち、2間方形の建築跡を除外し、6：12で東西軸が多い。広場的空間など間の取り方は遺構重複が多く明瞭でなく、まと

第92図　寺の内館址の平面形態　1：4500（同報告を加除筆）



第93図　寺の内館址　1：1500（同報告を加除筆）

められた掘立柱建物跡数も旧状をはるかに下まわるであろう。厨房に関しては矢島館址例と同じように内耳鍋の出土をもって考えてみれば、郭内の東半の3基の井戸跡から伴って出土し、井戸とは別に南西部からも出土している。矢島館址においては、外縁側に近い位置で建築跡などの裏手に当る場所に多く認められる傾向にあり、寺の内館址もその傾向を認めることはできたが、内郭中央部の5号井戸から出土し、それほど顕著ではなかった。内郭施設で特筆される点は内郭西縁の中点に2間2間の建築跡が検出されている。門跡として、整数桁とする点に構造上の疑問が感じられるが、楼門としたり、特殊な構造をとればありうるであろう。門としなければ矛盾をきたす点は、西縁の中点に位置すること、西側柱列が内堀内に食い込むこと、棟軸の柱穴が内堀上端に位置することなどであり、西門としてよいであろう。館址の正面観は内郭の建築跡が6：12で東西軸が多く南正面として良い配置であった。寺の内館址はこのほか、西脇郭・南外郭が調査されている。西脇郭からは溝跡と柱穴が僅かながら検出され、内郭とほぼ同じ15世紀後半の内耳鍋片が出土し、内郭と同時並存は確定的である。西脇郭の東西幅は25mを測るが、周縁に土塁を設けた場合、活用しうる幅は15m強で極端に狭く、生活空間としての利用域ではなかったろうと思われ、西脇郭を意識したと見られる内郭西土塁の幅の狭さからすれば、西脇郭ないし脇郭は防禦のためであったと推考される。南外郭は、調査によって90～110mの南北長を有することが判っている。郭内には閑散とした配置で14棟の掘立建物跡、2基の井戸跡などが検出された。掘立建物跡は簡易的な建物ばかりでなく、総柱建物、庇付建物が南縁にそって存在した。B24は南面6間3間の総柱建物で東柱穴を持つ特殊建築である。それに東接するB28は南面庇を持つ建物跡であり、この2棟の南に2基の井戸跡があり、生活機能の一単位を感ずる。この南外郭は全体的に井戸検出数、遺構検出量が少なく生活感の薄い状態を呈している。それに代って狭長な小溝が目立って存在する。このことは内郭において公的な広場的空間や、米など収穫物の仮置きから収納に必要な作業空間、牛・馬の飼育空間などを設け得たとは、建物配置の集密状況から考え難く、その作業・広場に必要な空間は南外郭であったと推考される。

両館址の主体年代は出土陶・磁器、軟質陶器の全体を扱えば中世全般に亘ってしまうので、館址の生活に直結したと考えられる炊飯用具の内耳鍋から求めれば、寺の内館址は、丸底気味の鍋形が、矢島館址は平底の鍋形が出土している。近年の内耳鍋の変遷観からすれば、前者は15世紀前半から15世紀後半、後者は16世紀前半に位置づけられ、その頃に、それぞれの館機能の盛期があったと見なされる。このため構築時点は明言はできないものの、盛期において寺の内館址が先行し、矢島館址が後出したことになる。

なお両館址の平面形態が近似するのは築造時期が近接し、同一氏族による基本設計のため共通したと考えられ、このことは特記すべき点である。

4 村東館址の形態と機能

村東館址はA・B・Cの郭を並郭に配した館址である。占地は自然地形である低台地を、堀切りにより截り、郭区分している。このため自然地形の制約によって生じた全体の方向性と、方位を意識した人為的な方向性と二つの方向性があり、換言すれば自然をそのまま用いた面と、自然を克服した両側面がある。吹屋館址の場合、全体平面観は、自然をそのまま用いた型であり、寺の内・矢島館址のように方形区画を意図し、全体観そのものまでも人工的な所作を加えた点と大きく異なっている。

館址の形態は、一般的には、古代荘園に伴う館や中世絵巻物などによって単郭構造と考えがちである。確かに単郭構造が定形化した平安時代後期から中世初頭においては、そうであったかもしれないが時代が下った場合、館の掌握者の階級差によっては必ずしもそうではないことが村東館址の並郭的な構造、矢島・寺の内館址の縦横列郭的な構造から知る

ことができる。館の掌握者として矢島・寺の内両館址は、後の箕郷十二万石を擁した長野氏の一族に関連した十数個所の砦・館にそれぞれ含まれる館址で周辺遺跡・伝承を踏まえればほぼ誤まりのないところであり、館の掌握像や階級もこのことから推し測れよう。村東館址は群雄割拠し、館址数も多いと推測される15・16世紀をはるかに遡ぼる14世紀前半に盛期があり館数もそう多くはなかったことを思えば、館の掌握者の階級は地域名主層以上であり、地域の有力氏族であったと想定しうるし、矢島・寺の内館址の郭取りや全体規模においても貧弱さは感じられない。さらに中世館は所領内の管理・運営つまり統治や戦時の強頭堡であり主城ないしは地域の連合体に対し外堡となりうる側面を持っているので、村東館址を深く追究しようとする場合には、そうした関連をも含めて検討する必要があろう。

館址の縄ばりは、3館址ともに、三分ノ一町、半町、一町など一町区画を基に構築し、細部に至っては機能を優先した点が認められる。

主郭・脇郭・外郭など郭それぞれの機能の在り方は、寺の内・矢島館址がほぼ同じ使われ方であったのに対し、主郭部分は村東館址がA郭、寺の内・矢島館址では内郭が相当し、前者は、北半に中枢建物、南半に工房などの作業空間がある程度、分離して考えられ、後者は内郭内における表裏の区別はあったとしうるが全体観からすれば、いささか雑居気味である。南外郭は寺の内館址からすれば、公的な広場的空間、収穫物の仮置から収納までの作業空間、牛・馬の飼育など大がかりな作業を必要とする場合の郭と推考したが、村東館址のB郭においては、井戸跡の検出率が高く、生活主体の郭であった可能性がもたれ、大がかりな作業域としてはC郭にその余地がある。このことは、吹屋館址の各郭は機能分離して使用されたと想定でき、寺の内館址の場合は内郭における機能分化が不明瞭であり、云い替えれば、前者は、機能に則して郭を設定し、後者は、郭設定を重視し、機能をそれに合せた感がある。この差は、構築年代の差により生じたものなのか明瞭でなく、今後、類例の増加に期待するところである。次に村東館址の存在意義をまとめておきたい。

5　村東館址の存在意義

村東館址の盛期は14世紀前半にあり、時代的には鎌倉時代末期から南北朝期である。この段階における地方館址の調査例は少なく、群馬県内では初見の例となり、中世前半の不明に近い実態に、本例の存在は多少なりとも寄与することができた意義は深いとしなければならないであろう。

村東館址の調査は、全面拡張には至らなかったが、それには次のような理由がある。村東館址の試掘段階にそれが館址であると察してはいたが寺の内・矢島館址の例もない段階に館址とはいかなるものであるか想像できず拡張の意志を鈍らせたのは確かであった。さらに、そうさせたのは、掘立柱建物群があるものと信じて疑わなかったことである。試掘で確認できた柱穴は柵としてのまとまりでしかなく、そのほか試掘時点において遺構検出されない個所は拡張理由に繋がらず、結果的に中枢建物の検出には至らなかった。ましてや全面拡張への意志は持てなかったのである。このことは、鎌倉時代・南北朝期における当地域の一般的な建築跡が掘立建物ではないことを意味し、調査に当っては、その点を充分にふまえなければならない必要性を我々に、命題として提示してくれたのである。この内容は中世考古学における実証方法の根底にかかわることで、村東館址の存在からもたらされた最大の意義であろう。

(1) 大江正行「群馬県と周辺地域の土師質土器皿」『群馬考古通信7号』1980
(2) 赤羽一郎「常滑」『世界陶磁全集3』1977
(3) 大江正行「中世後半の土器群について」「清里・陣場遺跡」（財群馬県埋蔵文化財調査事業団）1981
(4) 「尾島町教育委員会」『長楽寺遺跡』1978
(5) 鵜崎彰一「美濃古陶のながれ」『美濃古陶』1980
(6) 「矢島遺跡」（高崎市教育委員会）1979
(7) 「寺ノ内遺跡」（高崎市教育委員会）1979

(2) 土地利用の変遷

吹屋遺跡の調査対象区は全体で45,000㎡に亘る面積があり、断続的ではあるが各時代の小遺構が検出されている。本項では土地利用がどのようになされたのかと云う観点で、これらを通史的に捉えたい。また村東館址内の個別遺構は館址が一つの遺構単位であるので触れないこととする。

1. 縄文時代

縄文時代の遺構はまったく検出されなかった。台地上は水性のローム層の2次堆積が終り、黒色土の堆積が進み、現在とほぼ同様な地勢において縄文時代をむかえたと考えられる。遺跡地北半の一部に検出された弥生時代谷地形の底部に厚く堆積した黒色泥土は、前代における地勢の安定を意味している。日高遺跡で実施した弥生時代台地上の花粉分析結果はコナラ亜属を主体にした広葉樹林であったが、おそらくは、前代の縄文時代晩期においてもこうした植性は変っていなかったと推定される。

2. 弥生時代

弥生時代は南接した日高遺跡に水田が営まれ、吹屋遺跡のある台地上は、コナラ亜属を主体とした広葉樹林を想定しうる花粉分析結果であった。吹屋遺跡では水田跡の延長上に当る自然地形を調査することができ、弥生水田を営んだ人々が、その谷地を利水管理のために足繁く通ったことも想像に難くない。

3. 古墳時代

古墳時代も、前代と同様に遺物の出土はない。浅間山給源によるC軽石、榛名山給源のFA層を調査区北半の低地部分で認めることができた。台地上が広葉樹林であることは、この段階もほぼ変りなく、日高遺跡の花粉分析結果から知れるところである。

4. 奈良時代

奈良時代の遺構・遺物は検出されていない。周辺遺跡は、この時代に至って急増し、北接の中尾遺跡や、西接の台地上にも存在を認めることができる。このため遺跡地はそれら人々の活動領域であったと考えられ、周辺地域において新田開発や開墾が進んだのもこの時代であろう。

5. 平安時代

平安時代は、遺構、遺物を認めることができ、緑釉陶器片の出土したSE09がそうである。トレンチにおいて確認された唯一の生活関連遺構である。周囲で住居跡は確認できなかったが、存在したとしても単独に近い数であったであろう。調査区北半では10世紀前半のSD25・26の溝跡が検出され、水田に伴う水路であった可能性が強い。台地部分では、B軽石に埋没したSD24が検出され、低地部分ではB軽石に埋没した12世紀初頭の水田跡を確認している。このため調査区北半の台地上、低地部分では人々の生産や、活動があったのである。調査区南半には第3拡張区があり畑を思わせる溝状遺構があり、人々の進出を窺うことができる。

6. 中　　世

鎌倉時代末期から南北朝期にかけ村東館址が営まれたが遺跡地北半には同期の遺構は認定できなかった。ただ万願寺南縁の農道は古道であることが確認されたが、出土遺物がなく、時代判定ができなかった。日高遺跡で確認されたB軽石下の水田は、現代水田の区画に踏襲されており、このため低地部分は平安時代以降、水田として使用されていた可能性が強く中世においても水田であったと考られる。

(3) 弥生時代の自然地形

館址の検出された低台地の東側は、一段低く幅狭い谷地形となっており、現水田が営まれている。この谷地形は、その東西を低台地にはさまれ、幅100～200mほどで、谷地頭部が確認される中尾から、その南方端の日高地区にかけて、南北約1kmに及んでいる。吹屋遺跡はこの谷地上部の西辺に位置している。

本遺跡の調査は、日高遺跡北の吹屋地区に広がる低台地に遺跡の可能性が考慮されたために、トレンチ調査を実施し、その確認に努めた訳であるが、同時に日高遺跡西側低台地に検出された方形周溝墓等の、弥生時代遺構の広がりを把握する上でも、極めて重要な意味をもつものであった。

弥生時代方形周溝墓の検出された、日高遺跡西側低台地北側の広がりは、館址の検出された吹屋遺跡と連なる低台地のため、その可能性も考えられたが、台地に設定したトレンチ、拡張区の発掘調査の所見では、方形周溝墓、住居跡等の弥生時代遺構は検出されず、吹屋遺跡においては中世館址、水田地帯で検出されたB軽石下の平安水田跡を主とする遺跡であることを確認した。したがって日高遺跡で検出された弥生時代墓址群の広がりは、本遺跡の南側にその限界が求められることになる。

遺跡地東側水田地帯には、日高遺跡の発掘調査によって、現地表下40～60cmほどに浅間山B軽石層下の平安水田跡の存在が明らかになっている。さらにその下部60～80cmほどに黒色泥土を利用して営まれた、弥生時代水田跡が、浅間山C軽石に覆われて存在することも明らかになっている。したがって水田地帯の調査は、吹屋遺跡においても同様に、これら遺構が検出し得るか大いに興味ある課題であった。

調査の結果は、現水田部分に設定したトレンチによって現地表下約40cmほどに、浅間山B軽石に覆われた平安水田跡が明らかとなっており、谷地形に広がる水田地帯には、広域にわたって平安水田跡の存在が推定された。

次に弥生水田跡の営まれた低湿地の確認をするために、トレンチの掘り下げを進めたところ、2E－195～205トレンチにおいて、現地表下約1.2mほどに、浅間山C軽石に覆われた黒色泥土の堆積を示す低湿地を確認した。さらにトレンチを増やして低湿地の広がりを追求した結果、本遺跡北半の水田部分に、やや複雑な形状を示す低湿地の広がりを確認した。低湿地に堆積した黒色泥土中は、植物遺体を多量に含んで泥炭化を示している。その厚さは、台地縁辺部では薄く、低湿地中央部では厚い弧状の堆積を示している。日高遺跡における弥生水田土壌は、この黒色泥土を長年耕作することにより、生成されたと考えられる、厚さ20～40cmほどの茶褐色を帯びる暗褐色粘性土層であり、黒色泥土と明らかな相違が認められる。また黒色泥土が堆積する台地の縁辺部において、水路、畦等、水田跡を思わせる何らの遺構も検出されなかった。したがって本地域の調査で確認された低湿地部分では、弥生水田跡は認められないという結果となっている。

本遺跡で確認された低湿地は、西北側の吹屋集落の低台地部分より伏流した湧水により生成した可能性を考えているが、本遺跡の北方に位置する谷地頭部においても、同じ関越自動車道地域の中尾遺跡発掘調査において、黒色泥土の堆積を示す低湿地を確認しており、谷地頭部周辺では、数条の低湿地が流出しているものと推定される。本遺跡で確認された低湿地も、その一条として理解されるものであり、谷地の地形からみても、これらの低湿地は、谷地内を南流して日高遺跡で検出した幅20～40mほどの低湿地に結ばれるものと推定している。

弥生水田跡は、この低湿地を利用して営まれたことが明らかとなっているが、その上限と下限については不明である。今後の発掘においては、この低湿地の広がりを明らかにするとともに、そこに営まれ

た弥生水田跡の範囲、その性格を把握することが、大きな課題として残されることになろう。

なお本低湿地に堆積した黒色泥土中に、アシ等の植物遺体が、多量に含まれており、その生成にあたっては、長い年月にわたり、安定した状態にあったことを示している。谷地基底部の黒色泥土より出土した自然木のC^{14}年代測定の結果では約3000年、花粉分析においては、冷涼の気候条件にあったことがうかがわれ、その生成の時期は、寒冷化が進んだ縄文後、晩期に相当するものと考えている。

この厚く堆積した黒色泥土は、弥生時代後期の段階に至り、初めて土地利用が行なわれることになるが、4世紀中葉とする浅間C軽石の降下、堆積の後、また黒色泥土の生成する状態にもどっている。その後6世紀前半とする榛名山火山灰層（FA）の降下段階まで、安定した状態で堆積を示すが、その間、縄文後、晩期から古墳後期に至る段階まで、長い年月にわたって、生成、発達したことを物語っている。

（平野　進一）

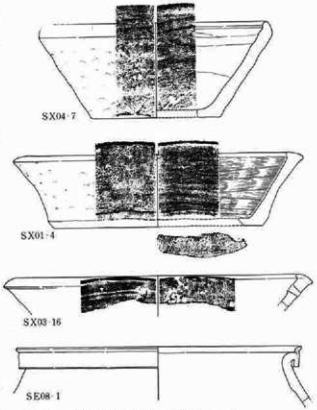
(4)　出土遺物について

吹屋遺跡から出土した遺物類は、中世を主体とするものであった。中世遺構出土遺物は古代遺構出土遺物に見る出土量の豊富さや一括性は高くなく、当地域での遺物像の究明は遺物種揃えさえ明瞭にされていないのである。その理由としては各報告に同時性、一括性の表示がなされていない点に端を発し、遺物種組合せなどについても触れられていない場合が多い。本項では一括性、同時性の表明と、その組合せについて触れておきたい。

1. 土 器 類

個別の製作年代に関しては、前項で遺構年代を推定するのにあたり、記述したので、それを参照されたい。遺物類の主体的な製作年代は、館址関連では第38図2あるいは年代根拠の薄いSE06出土遺物を除外すれば13世紀後半から14世紀前半にあり、その範囲で合成による同時性は認めてよく、組合せについても同様である。

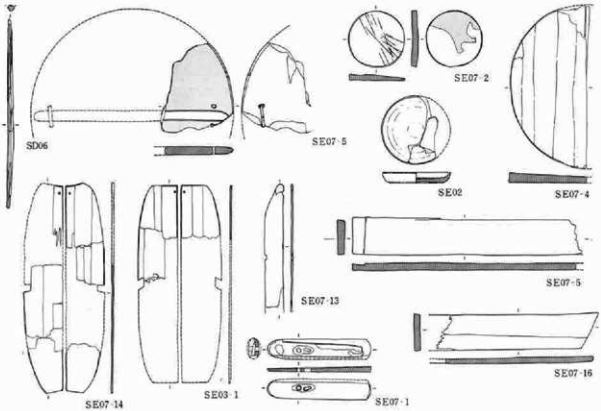
一括性はSX01～04、SE07･08など、それぞれ個別では一括廃棄と考えて良い出土状態にあったが、下限を示す遺物と上限を示す遺物との間に年代的なひらきが、SX03出土の青磁2と軟質陶器平盤16、SE08の常滑焼大甕1、常滑焼甕との間に半世紀ほどの差が生じている。SX群、SEともに近接した位置関係と、まとまりがあり、それらが時期を替えながら長期に亘ったとは考え難いため、それぞれ14世紀前半のある時期に機能し、それを遡ぼる資料については伝世したものと解釈される。伝世と考えられる例を除外すれば、14世紀前半の今成の組合せが得られ、



第94図　14世紀前半の合成一括遺物　1：5

SX01－4、SX02－16、SX04－7、SE08－1などがそうで、軟質陶器製平盤、同鉢、常滑大甕である。

これらの組合せと想定される中世一般の日常什器とを以下に比較したい。かつて分析したことのある50遺跡例[1]を目安にすれば当館址出土遺物中に、調度では上手火鉢・香炉などが見られないのであるが、各遺跡から軟質陶器製の上手火鉢・香炉は出土しているので当時としては存在しなかった訳ではない。厨房具では、鍋、釜、鉢、椀、瓶、壺、甕、石臼・石鉢などがある。鍋・釜は中世前半においては、その多くに鉄製が推定され、鎌倉例を除くと、関東地方でも微弱で、県内では長楽寺遺跡例[2]に軟質陶器製の羽釜を認めるに過ぎず、やはりその多くが鉄製であったとしてよいであろうし、村東館址から未出土であるのも当然の反映現象と云える。鉢・盤などは、在地製の軟質陶器製が多用され、当遺跡からも出土し、一般傾向と同じである。壺・瓶などは、一般的に常滑焼が多用され当遺跡においてもSX03などにその例がある。招来物の梅瓶の例がSX03にあるが、青磁梅瓶の出土例はそう多くはなく、歌舞伎遺跡[3]、元島名遺跡[4]などがあり、稀少性において館掌握者の階層が示唆される。瀬戸焼製の瓶類が見られないのは注意される。猪類は渥美・常滑焼の製品が中世全般にわたり使用され、当遺跡における出土も一般例と相通ずるところがある。石臼や石鉢など石製利器の出土は当遺跡では見られなかったが、時代的な反映なのか、それともたまたま出土しなかったのか明らかではない。ただ石臼の一般普及が中世後半であるなら出土しない可能性もあり、今後、注視する必要があろう。遺明皿あるいは信仰性をおびる遺物として土師質土器皿があるが館址内での出土は見られなかった。群馬県における出土傾向は、中世前半に少なく、後半に多出する傾向にあり、この場合、出土しなくとも良いのかもしれない。以上、村東館址で得られた軟質陶器製同鉢・常滑大甕などの組合せは厨房具を主としており、生活の存在をここに認めて良いであろう。



第95図　出土木器の合成一括遺物　1：5

2. 木製遺物

個別の製作年代に関しては、遺構年代を推定するのにあたり、記述したので、それを参照されたい。木器については、編年観がある訳ではないが、吹屋館址の全体観から少なくとも13世紀後半から14世紀前半があたえられ、その結果、1世紀に亘る年代幅をもって、合成の同時性が得られる。その組合せは、漆塗小皿、板草履、呑口刀柄、曲物底板、杓子曲物底板、鍋蓋、組物材など生活用具、武具、調度部材などであり、県内における中世木器の器種揃えが不鮮明な現状において、ここに確実な組合せを提示したことになろう。

(1) 大江正行「群馬県と周辺地域の土師質土器皿」『群馬考古通信7』1980

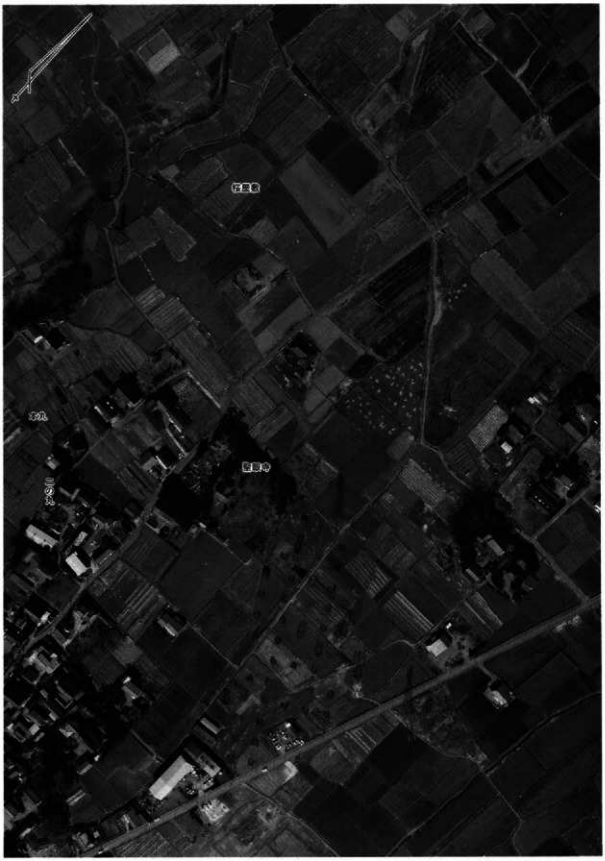
(2) 『長楽寺遺跡』(尾島町教育委員会) 1978

(3) 『歌舞伎遺跡』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982

(4) 『元島名遺跡』(高崎市教育委員会) 1979

写　真　図　版

元島名B遺跡全景垂直



元島名城跡・桜屋敷、調査区との関係

元島名B遺跡、南半部を北から望む　　北→

元島名B遺跡より元島名城本丸址を望む　　北東→

内部南半部とSD06遠望　　北→

内部北半部とSD05・SD06近景　　北→

SD06北東隅部俯瞰遠景　　北上→

SD06北東隅部俯瞰近景　　北上→

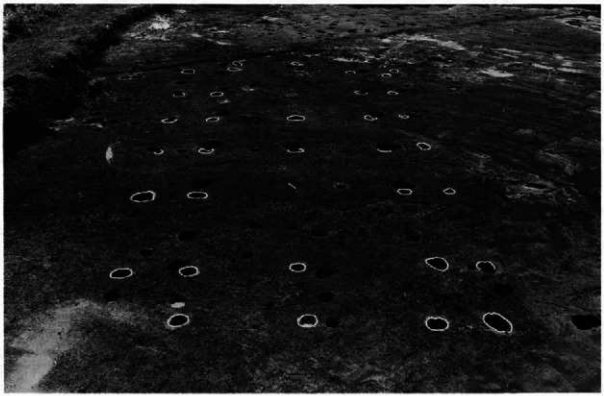
SD06北東隅部近景

SD06北東隅部近景

SB01全景　　北→

SB01全景　　東→

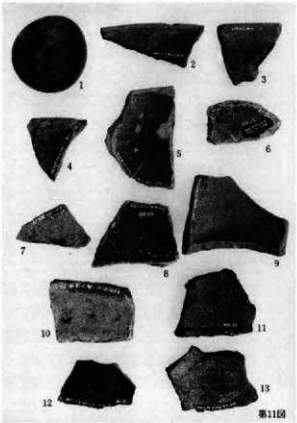
SB02全景　　東→



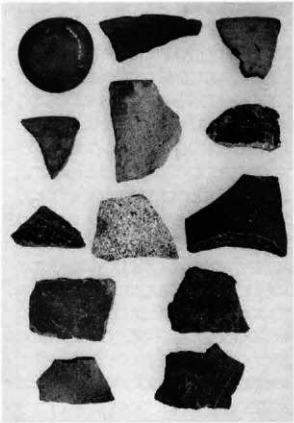
SB02全景　　北→

SB02柱穴内出土磁器香合出土状態　　北→

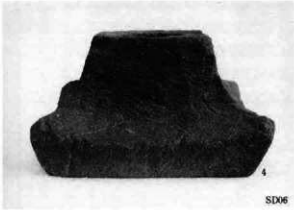
SD34鎌穂先出土状態　　北西→



第11図

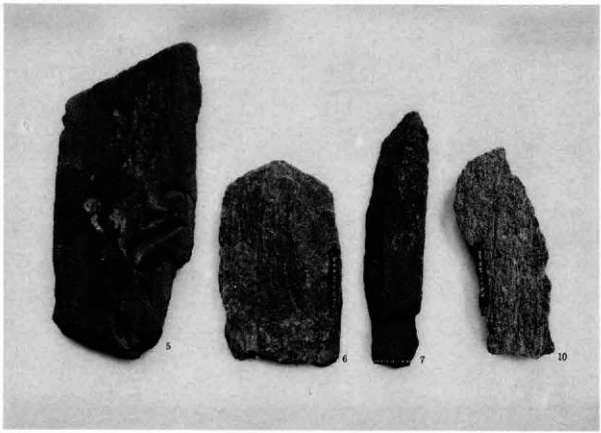


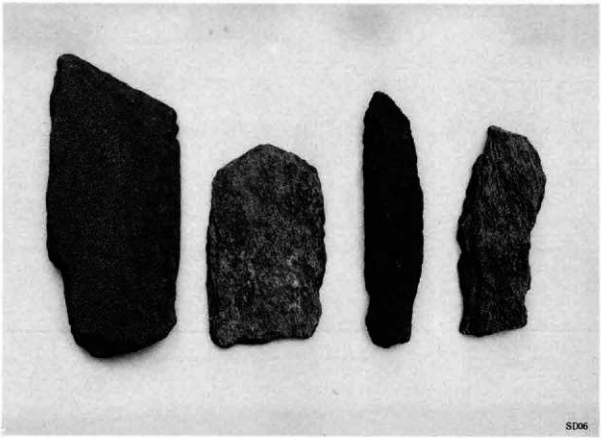
第12図



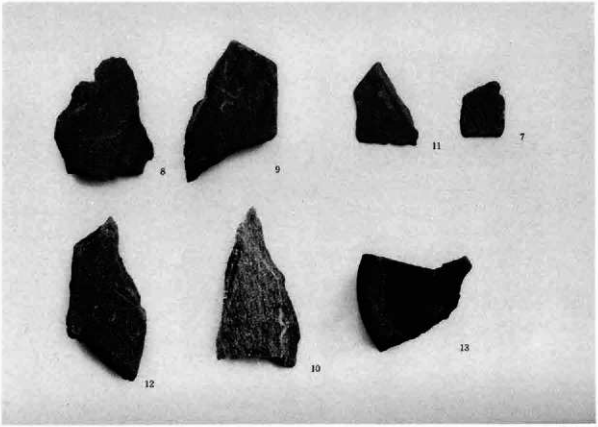
SD06

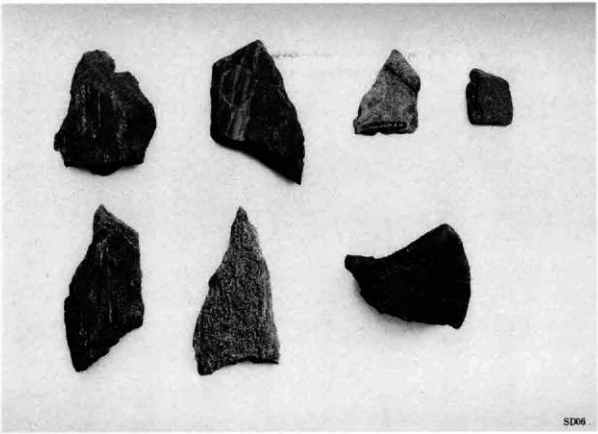
内郭出土遺物





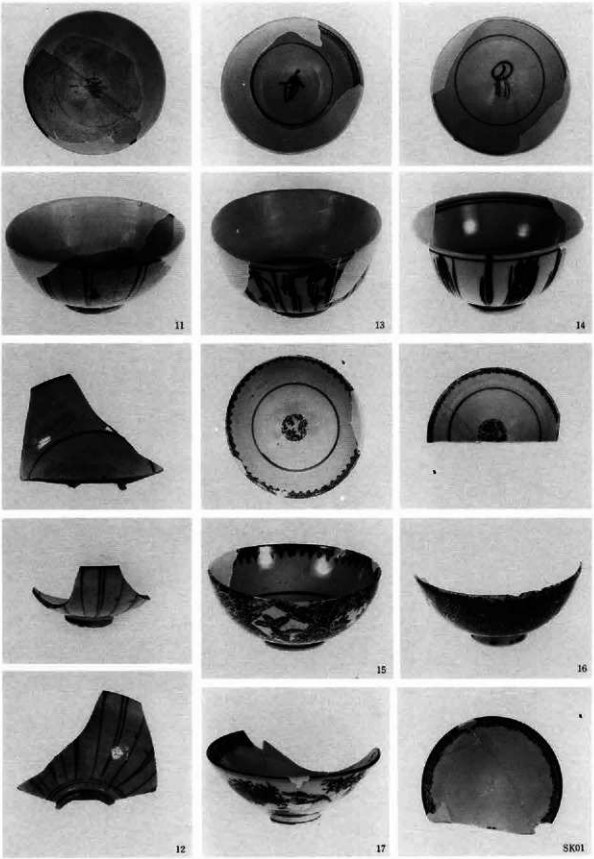
SD06出土遺物



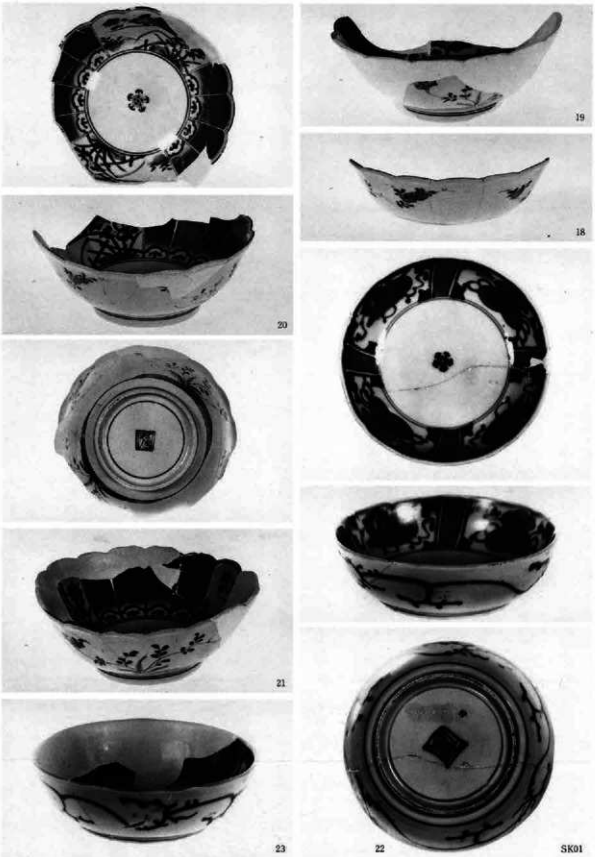


SD06出土遺物

SK01出土遺物



SK01出土遺物

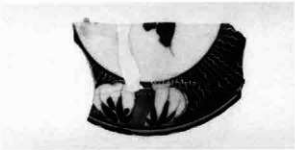


SK01出土遺物

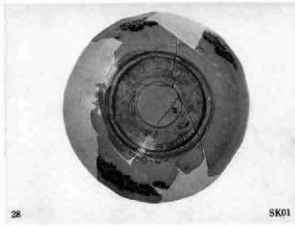
24

26

27

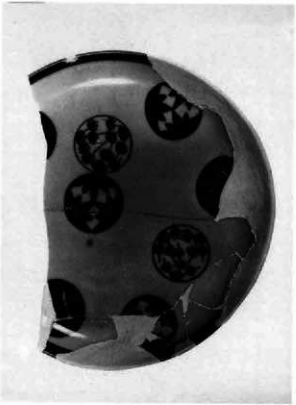


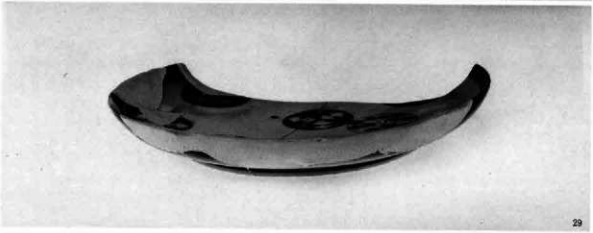
25



28　　SK01

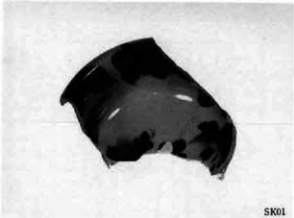
SK01出土遺物





29

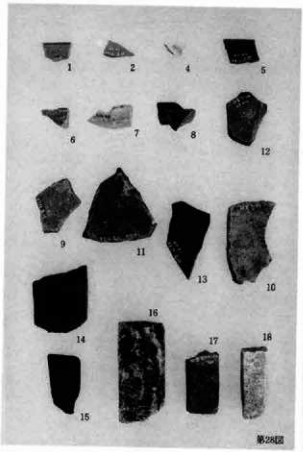
30

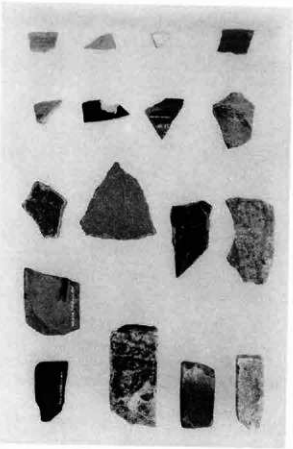


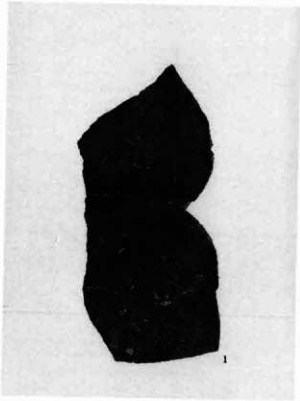
SK01

SK01出土遺物

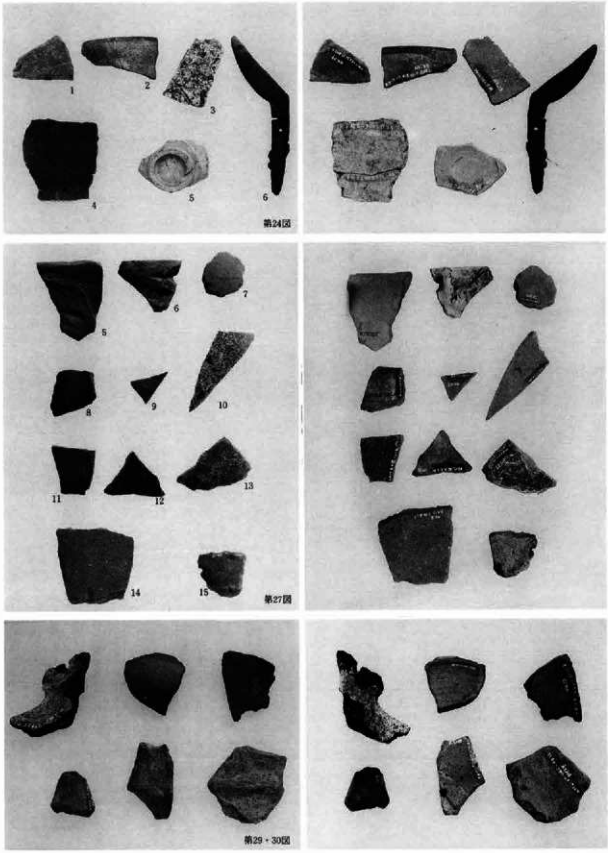
SK01出土遺物







第28図遺物・SB01出土遺物



第24図・第29・30図・第27図遺物

吹屋遺跡垂直全景

村東館址と日高遺跡の垂直全景

遺跡地北端部を北東より望む　　北東→

遺跡地南半を望む　　北→

遺跡地南半を望む　　北→

遺跡地北半を望む　　南→

第 1 拡張区全景　　南西→

第 1 拡張区全景　　北東→

第１拡張区SD01・06近景　　南西→

SD12第１拡張区　　西→

SD12第２拡張区全景　　北→

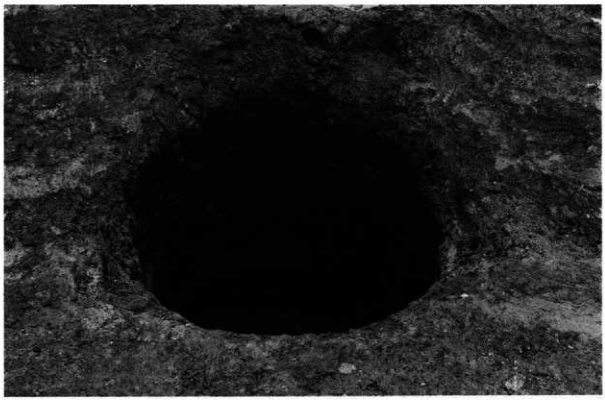
SD12第２拡張区南西隅部近景　　北→

第２拡張区全景　　西→

第２拡張区近景　　西→

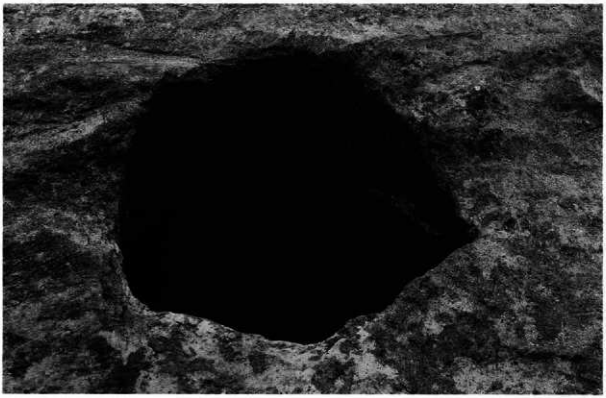
第２拡張区SD10底面　　東→

第２拡張区SD10底面　　西→



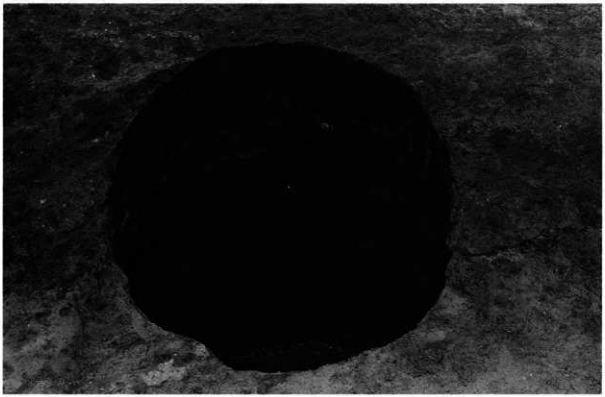
第2拡張区SE01近景 北→

第2拡張区SE01近接 北→



第２拡張区ＳＥ02近景　　北→

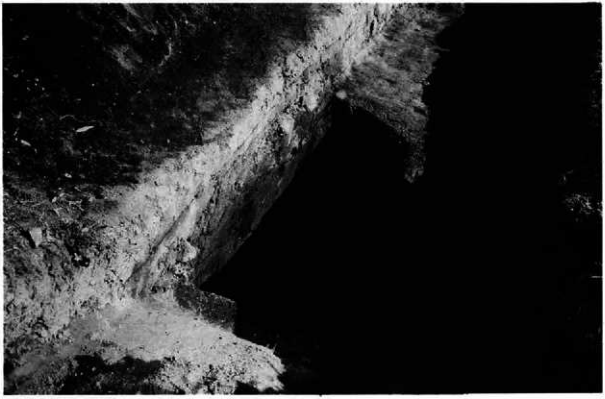
第２拡張区ＳＥ02近接　　北→



第２拡張区ＳＥ03近景　　北→

第２拡張区ＳＥ03近接　　北→

第２拡張区SE02（左）・SE03隣接状態近景　　西→



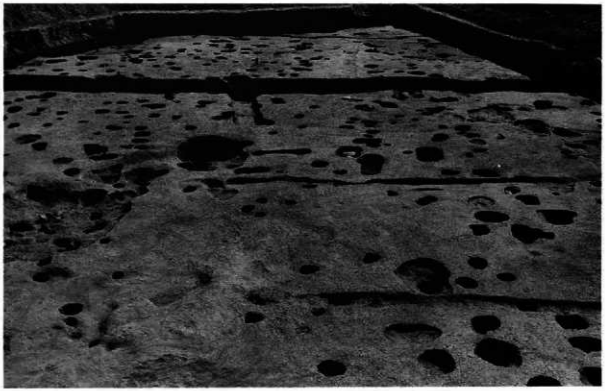
SE04近景　　北西→

第３拡張区全景　　北西→

第３拡張区ＳＤ14近景　　西→

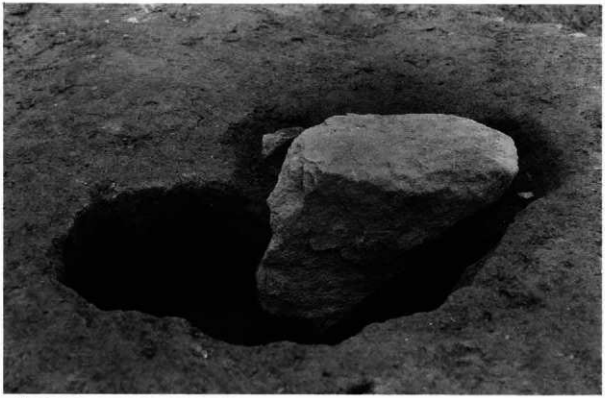
第3拡張区掘立柱穴群確認状況　　南西→

第3拡張区掘立柱穴群・SD14重複確認状況　　西→



第３拡張区掘立柱穴群近景　　北→

第３拡張区ＳＥ・ＳＸ群近景　　北→



第３拡張区ＳＡ05の柱穴内に見られる石材　　西→

第３拡張区ＳＡ05の柱穴内に見られる石材　　北→

第3拡張区SE07近景　　北→

第3拡張区SE08近景　　北→

第３拡張区ＳＸ01近景　　北→

第３拡張区ＳＸ02近景　　北→

第3拡張区SX03近景　北北西→

第3拡張区SX05（手前）・SX04近景　北→

拡張区SE06近景　　南東→

拡張区SE06近景　　南→

2A－145～155トレンチ　SE09近景　　北→

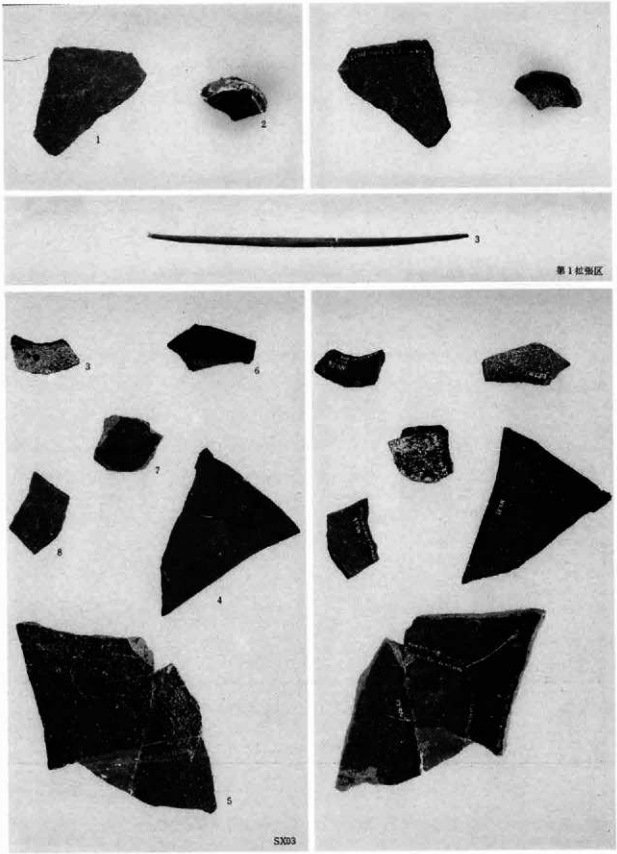
2A－145～155トレンチ　SE09近景　　北→

160ライントレンチ　　東→

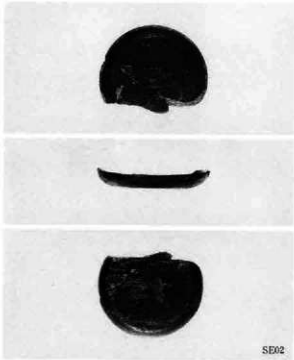
Xライン105～125トレンチ　　北→

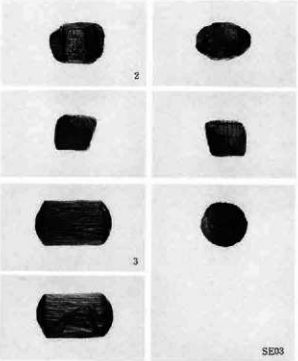
Uライン　173～177トレンチ　　北→

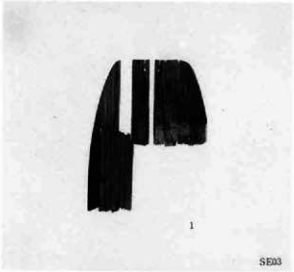
Oライン　120～128トレンチ　　北→

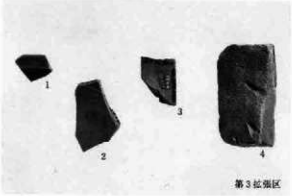


第1拡張区・SX03出土遺物

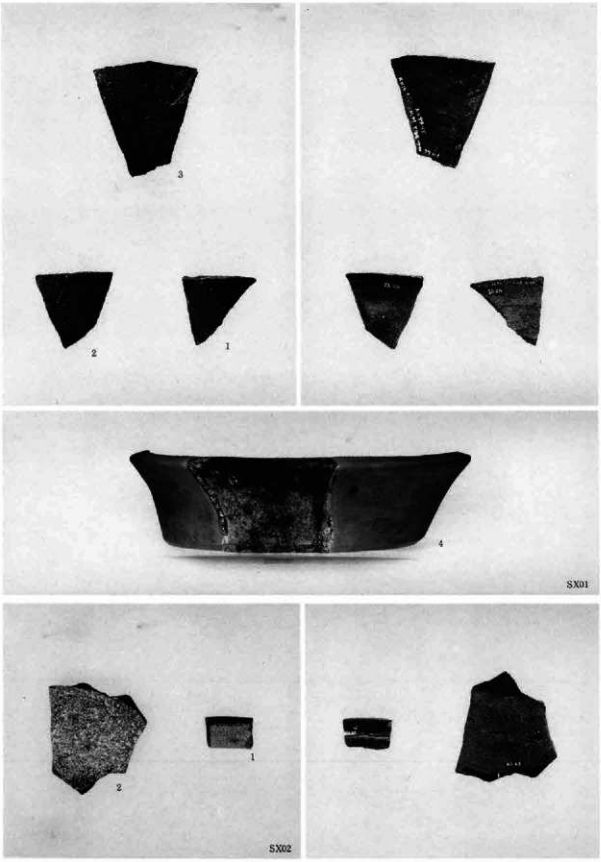




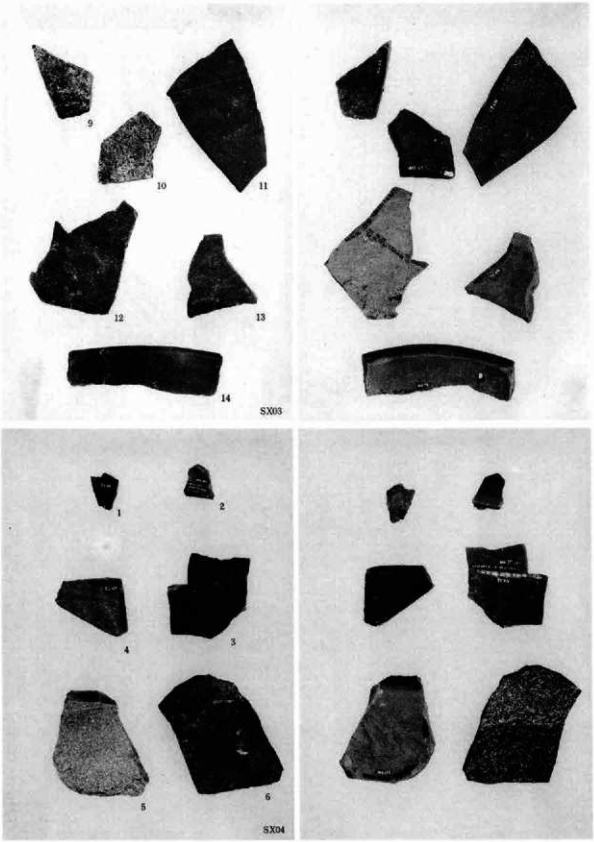




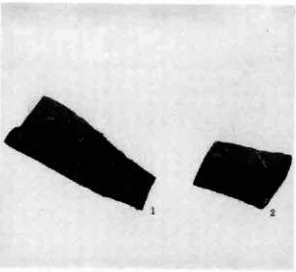
SE02・03、第3拡張区特殊遺物

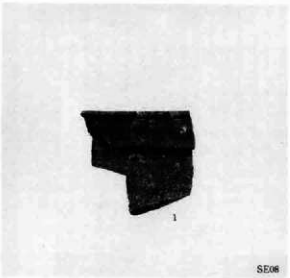


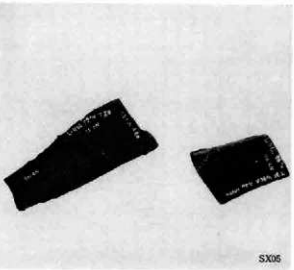
SX01・02出土遺物

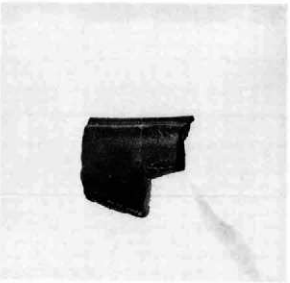


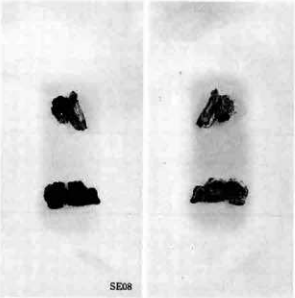
SX03・04出土遺物



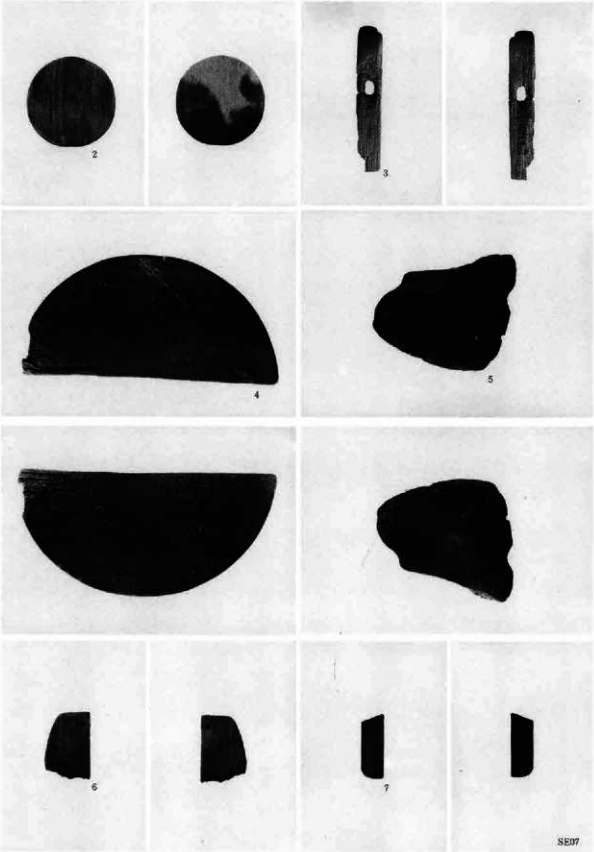




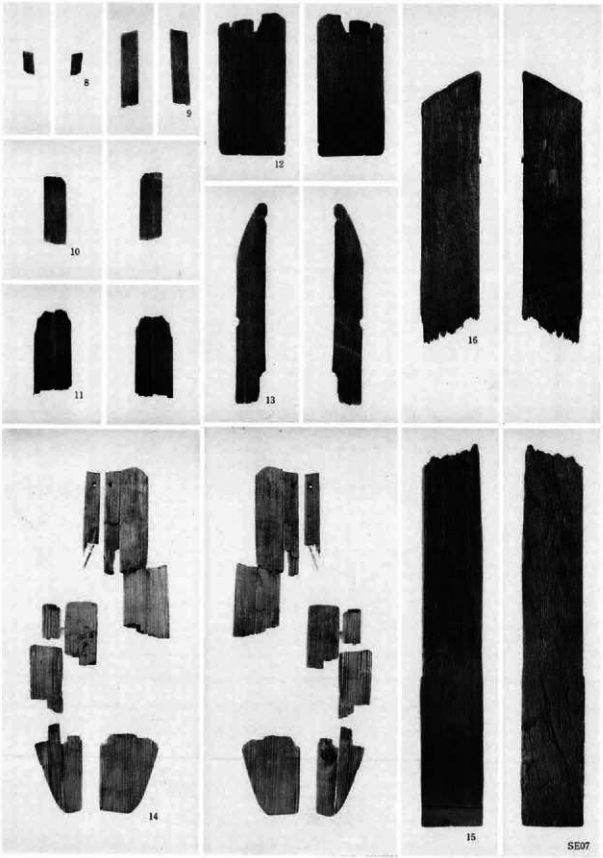




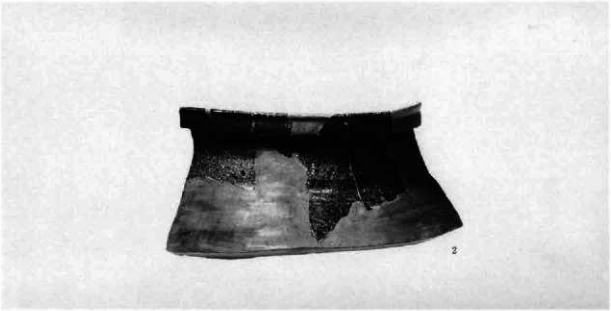
SX04・05、SE08出土遺物・第62図遺物



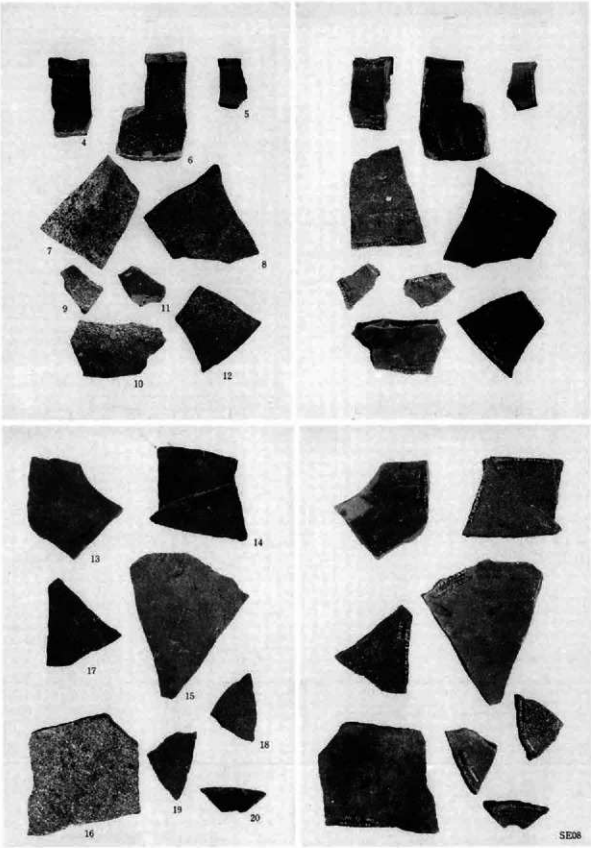
SE07出土遺物



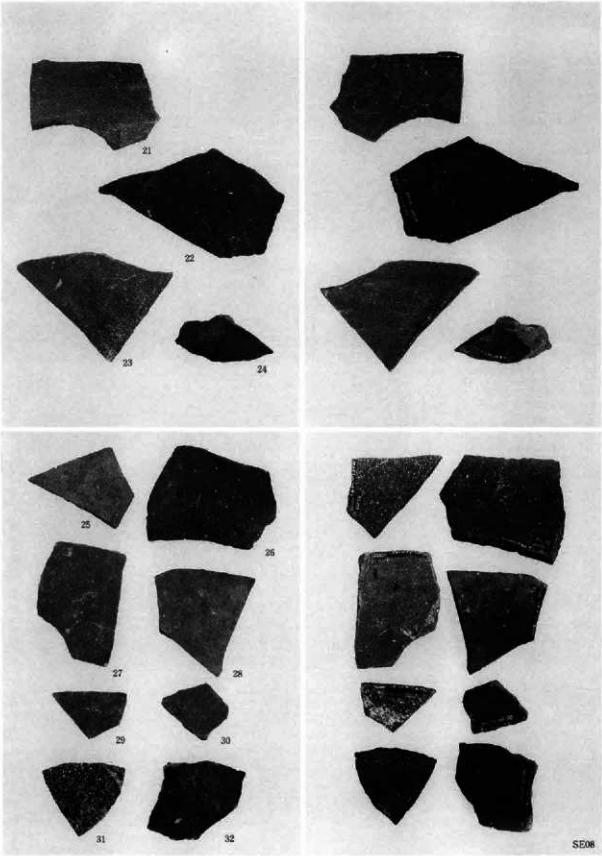
SE07出土遺物



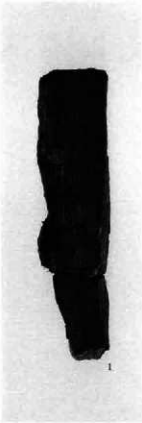
SE08出土遺物



SE08出土遺物



SE08出土遺物



SE06・09・SD28出土遺物

元島名B・吹屋遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集—

昭和57年3月20日 印刷
昭和57年3月25日 発行

発行／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話（0272）23－1111

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社